

大菩薩峠

白雲の巻

中里介山



秋風ぞ吹く白河の関の一夜、駒井甚三郎に宛てて手紙を書いた田山白雲は、その翌日、更に北へ向つての旅に出で立ちました。

僅かに勿来なこその関で、遠くも来つるものかなと、感傷を逞たくましうした白雲が、もうこの辺へ来ると、卒業して、漂浪性がすつきり根を張つたものですから、低徊顧望なんぞという、娑婆しやばツ氣も消えてしまつて、むしろ勇ましく、北地へ向けてのひとり旅が成り立ちました。

得てして、人間の旅路というものはこんなものでして、ある程度のところで、ちよつと堪こたえられぬようにホームシックにつ

かまるが、これが過ぎると、またおのずからいい氣というものが湧いて出て、かなりの臆病者でさえが、唐天竺からてんじくの果てまでもという気分になりたがるものです。

白河城下を立ち出でたその夜は、須賀川へ泊りました。

白河から八里足らずの道。

この地に投弓とうぎゆうという風流人があるからたずねてみよと、人に教えられたままにたずねると、快く入れて、もてなし泊めてくれました。

その翌日、例の牡丹ぼたんの大木だの、亜欧堂のあとだの、芭蕉翁ばしやうおうの旧蹟だのといったようなものを、親切に紹介されて、それから投弓のために白い袋戸わらじせんへ、山桜と雉きじを描いて、さて出立という時、主人が若干の草鞋わらじ銭と「奥の細道」の版本を一冊くれました。

若干の草鞋錢は先方の好意でしたが、「奥の細道」は先方の好意というよりも、こっちの強要と言った方がよかったかも知れません。

「奥の細道！　これが欲しい、この旅にこれは越裳えっしょうし氏が指南車に於けると同じだ——ぜひこれを拙者にお貸し下さい」

こう言つて、白雲が強奪にかかったのを、根が風流人の投弓が、いやと言えようはずもなく、彼の拉ちうし去るに任せたものです。

白雲は、それから「奥の細道」の一卷を、道ながら、手より措おかずに、ある時は高らかに読み、ある時は道しるべの案内記として、足を進めて行きました。

白雲が「奥の細道」に愛着を感じていることは、一日の故ではありません。およそ、旅を好むものにして「奥の細道」を愛

読せざるものがあるうとは思われません。

白雲もまた、芭蕉の人格を偉なりとすることを知っている。その発句の神韻しんいんは、到底、後人に第二第三があり得ていないことを信じている。その発句のみではない、その文章がまた古今独歩である。黄金はどこへ傷をつけても、やつぱり黄金である。人格となり、旅行となり、発句となり、文章となるとはいえ、いずこを叩いても神韻の宿ることは、あたりまえ過ぎるほどあたりまえのことだが、その文章のうちでも、この「奥の細道」は古今第一等の紀行文である。単に文章家として見たところで、馬琴よりも、近松よりも、西鶴よりも上で、徳川期では、これに匹敵される文章は無い。少なくとも鎌倉以来の文章である——白雲は、かく芭蕉の紀行文を愛して、その貧弱な文庫にも蔵し、その多忙なる行李こうりの中にも隠さないということはなかったのだ。

すが、今度は忘れて来た。そうしてその忘れた時に最も痛切な
る必要を感じてきた。今その一冊を持ち合わせないことが、秋
風の吹きそめた時、あわせ 衾を一枚剥がれたように、うすら寒い。

ところが、それが、目の前に、投弓の家にころがつていたも
のですから、若干の草鞋錢なんぞは辞退しても、これをおかつさ
らって行こうという賊心に駆かられたのも、また無理のないところ
がありましょう。それがすなりと、草鞋錢も、「奥の細道」
も二つながら、かすめ得たものですから、心中の欣よろこび、たとう
る物なく、明治二十年代の子供が「小国民」を買ってもらった
時のように、嬉しがって、声高に読み且つ吟じて行くという有
様です。

白河の関にかかりて旅心定まりぬ——なるほど、旅心定まり
ぬがいい——この一句が、今日のおれの旅心を道破している。

「『いかで都へ』と便りを求めしもことわりなり。なかにもこの関は三関の一にして、風騷の人、心をとどむ。秋風を耳に残し、紅葉もみぢ おもかげを俤しらたへにして、青葉の梢なほあはれ也。卯うの花の白妙いばらに、茨の花の咲きそひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠かんむりを正し衣装を改めしことなど、清輔きよすけの筆にもとどめおかれしとぞ」

古人の名文は、今人の心を貫くが故に名文なのだ。名文というものは人の言い得ざることを言うが故に名文なのではない、万人言わんとして言い得ざることを、すらすらと言い得るから名文なのだ。

こうして、郡山、二本松、あさかの山——黒塚の岩屋をそれぞれに一見して、福島についたのは、その翌々日のことでした。福島の家老に杉妻栄翁という知人があつて、これをたずねて

みると、この人は藩の政治になかなか勢力ある一人ではあつたが、またよく一芸一能を愛することを知らぬ人ではなかつたから、白雲のために、その家がよい足がかりとなつたのみならず、かなりの仕事を与えられたのみならず、狩野永徳を見んがために松島に行くという白雲の意気の盛んなるに感心し、

「なるほど——観瀾亭かんらんていの襖絵ふすまえのことは、わしも聞いてゐる、それが山楽、永徳であるか、そこまではわしは知らん、しかしながら、たしかに桃山の昔をしのぶ豪華のもので、他に比すべきものはない。いやしく苟もその道に精進しようとするものは、一枚の絵のために、千里の道を遠しとせざるほどの意気が無ければならん。それに就いて思い起すことは、永徳ももとより結構に相違ないが——伊達家だてけには、まだ一つ、天下に掛替えのない筆蹟があるはずじゃ、それを御承知か」

「伊達家のことでござるから、それは天下に掛替えのない宝が一つや二つではござるまいが——刀剣であろう、茶器であろう、これらは拙者に於てあまり渴望もいたさぬし、また渴望いたしたからとて、拙者のような乞食画かきに、わざわざ宝蔵を開いて見せる物好きな三太夫もござるまいとあきらめています」

「それもそうだ、観瀾亭の襖絵は、相当の紹介があれば誰にも見せてくれるだろうが——もう一つのは——これは到底及びもつかないことだろう、その点はあきらめるのが賢明ではあるが、学問のために、伊達家には、しかじかのものがあるということをお覚えて置くのは無益でもござるまい」

「左様——そうとう蹭蹬として他の宝を数えるのは知恵のない骨頂ですが、いったい、あなたがこの際、ぜひ覚えて置けとおっしゃる伊達家の至宝とは何物ですか」

「それはなあ、もちろん伊達家のことだから、天下無二の宝が数知れず宝蔵の中に唸うなっているには相違ないが——貴殿御執心の永徳よりも、それこそ真に天下一品として、王義之おうぎしの孝経がござるはずじゃ」

「王義之の孝経——」

これを聞いて白雲が一時、眼をまるくして栄翁いつときの面を見つめましたかおが、押返して、

「それは、いささか割引がかんじんじゃ、大諸侯の物とて、一から十まで盲信たいそうするわけにはゆかん。いったい、義之の真蹟はすべて唐の太宗が棺だんかんの中まで持ちこんで行ってしまったはずで、支那にも、もはや断簡零墨だんかんれいぼくもござらぬそうな」

「ところが、伊達家の義之には、れつきとした由緒因縁がある、しかも、それには唐の太宗の御筆の序文までがついているそう

じゃ」

まゆつばもの

「ははあ——眉唾物ではござるまいなあ。まさか、奥州仙台陸奥守のことでごござるから、嘘にしても何かよるところがあるでござろうかな」

「あるある、大いにある、そのよるところを話してお聞かせ申そう」

ここまで主客の間に話が進んだ時、来客で話の腰を折られて、それぎりになりました。

主人としては、なおくわしく、伊達家所蔵の王羲之の孝経——

しかも唐太宗親筆入りという絶代ものの出所来歴を話して聞かせたかったらしいが、話がそこで折れた上に、その後は忙がしく、白雲もまた、いかに伊達家のことなりとも、羲之の真筆は少々割引物として、問いをほごすことをしてみませんでした。

そこで、伊達家の王義之は立消えになつたままで、白雲がこの邸を暇乞いをする最後まで復活しなかつたのです。

けれども、この家の主人として、白雲が打立つ時に、仙台へ向つての有力なる紹介者となつて、白雲の落着きを安くしてくれるの親切は残りました。その紹介者のうちに、

「仙台へ着いたら、ともかくも、玉蕉女史ぎよくしやうじよしをたずねてごらんなさい」

というのがありました。

玉蕉女史——とは何者？

それは才色兼備の婦人で、ことに漢詩をよくし、書をよくし、画を見ることが知り、客を愛し、旅を好む。ことに漢詩を作ることに於て最も優れている。

ははあ、これは珍しい。婦人で、才気ある婦人は必ずしも珍

しいとはしない、三十一文字を妙なる調^{みそひともし}べもて編み出し、水荃^{たえ}のあとうるわしく草紙物語を綴る婦人も珍しいとはしないが、婦人にして漢詩をよくするという婦人は極めて珍しい。

それにしても、ただ単なる奥様芸で、覚束なくも平仄^{ひようそく}を合わせてみるだけの芸当だろうとタカをくくつて見ると、なかなかどうして、頼山陽を悩ませた細香女史^{さいこう}や星巖夫人^{せいがん}、紅蘭女史^{こうらん}あたりに比べて、優るとも劣るところはない、その上に稀れなる美人で、客を愛し、風流の旅を好む、以前は江戸に出て、塾を開いて帷^いを下ろして子弟を教えていたが、今は仙台に帰っているはず、ともかくも、あれをたずねてみてごらん——全く才貌兼備、才の方は別としても、思いがけないほど美しい婦人だから、その用心をして——

ははあ、ほかならぬこの拙者に向つて、左様、然^{しか}るべき才貌兼

備の婦人をたずねよとは少々キマリが悪いと、白雲はがらにも
ない羞恥心しゅうちしんを少しく起しながら、とにかく、名前だけでも覚えて
置くことだと、更に念を押すと、栄翁が答えて、姓は高橋——
名は玉蕉——家は仙台の大町というのへ行つて、それと尋ねれ
ば当らずといえども遠からず。

かくて、福島に逗留二日。

しのぶ文字摺もじずり、しのぶの里

月の輪のわたし

瀬の上

佐藤莊司しょうじが旧跡

飯坂いゐざかの湯

桑折こおりの駅

伊達の大木戸

鐙摺^{あぶみずり}、白石^{しろいし}の城

笠島の郡^{こおり}に入ると、実方^{さねかた}中將の遺跡、道祖神の祠をたずねなければ、奥州路の手形が不渡りになる。

かくて、田山白雲は、仙台に入る前に笠島の道祖神の祠へ参詣^まの道を枉^まげてみると、そこで呆^{あき}れ返ったものを見せつけられないわけにはゆきませんでした。

二

それは別物ではない、露骨に言つてしまえば、人間の男性の生殖器が一つ、石でこしらえた、しかも、これが図抜けて太く逞^{たくま}しいのが、おごそかに一基、笠島道祖神の一隅に鎮座してましますということです。従来とても、路傍や辻々に、怪しげな

小さな存在物を見ないではなかったが、これはまた優れて巨大なるものであつて、高さ一丈もあろうと覺しいのがおごそかに鎮座しているのですから、一時、いつとき初対面の誰人をも圧迫せずにはおかぬものです。

「呆れ返つたものだ」

白雲といえども、思わず苦笑をとどめることができませんでした。

いつたい、これは何のおまじないに原因しているのだ——道

祖神というと、こんなものを押立てたがる故事因縁がよくわか

らない。道祖神そのものは、猿田彦命さるたひこのみことだということだが、猿田

彦命ならば、それは神代史に儼存の人であるに相違ない。それ

がこの露骨な男根と何の関係があるのか、これは柳田国男氏にでも聞かなければよくわからないものだ、と、白雲が途方にくれ

ました。

呆れ返った末に、とどめ難い苦笑いをもつて、白雲は、図抜けた道祖神の表象のまわりをながめているうちに、その太く逞しいかり首のあたりに結びつけられた、一つの絵馬を認めないわけにはいきませんでした。本来ならば、このブラさがった絵馬そのものが、まず人の目につき易いのですが、石体そのものが、あんまり奇抜過ぎるものですから、絵馬は第二第三の印象になつてしまいましたが、よく見ると、つい、たつたいまかけて行つたかと見えるほど新しいもので、しかもその絵がまた奇抜であることを認めずにはおられません。

普通、絵馬に描く図柄はきまつたようなものですが、この絵馬には、全く異様な般若はんやの面めんが、ごく拙いものではあるが一つ大きく描いてありました。

「迷信はところからで致し方がないとしても、社へ納める絵馬に般若を描くやつもなからうではないか」

そう思つて、白雲が見直すと、その署名に、

「清澄村、茂太郎納」

と筆太く記して、その頭へ小さく「仙台大手御門前」と割註わりちゆうがしてある。

「はてな——」

田山白雲は、全く別様な頭の働きを、この異様な額面の絵と文字との上に向けて、一思案なからざるを得ませんでした。

「はてな——全く、これは、はてなだ——清澄村茂太郎なる者がこの額を納めたとな。広い日本の村々のうちには、清澄というのも一つ以上あつていけないというはずはない、また茂太郎という名乗りも公儀へ御遠慮を致すべき差合ひのある名前とも

覚えていない。房州の清澄の、あのでたらめの歌うたいの茂公のほかに、天下に、もう一人も二人も清澄村の茂太郎なるものが存在してはならない筋合いもないのだが、それにしても、これは少し度外どはずれだ、名前そのものは度外れでないにしても、図柄そのものが、度外れだ」

白雲は、でたらめの歌うたいの茂太郎と、般若の面とが、くつついて離れないことをよく知っている。あいつは、母の腹の中から般若の面を持って生れて来たのではないかとさえ思っている。

その般若の面の、描くべからざる場面に描かれているのは、どうして、清澄村の茂太郎が尋常一様の清澄村茂太郎としては通過しないことを証明しているではないか。

それに——もう一つ合点がてんのゆかないのは、清澄村と名乗るか

らには村である。村である以上は、城下であるべきはずはないのに、その肩書を見給え、「仙台大手御門前」と明らかに註してある。

どちらから見ても、ちぐはぐだらけ、矛盾だらけだ——こいつを納めた奴の常識のほどが疑われる。いやいや、その常識のほどを疑うこつちの判断が、こんがらかる。

ちよつとこのままでは立去れないよ。そこで白雲は、手をさしのべて、そのまだ新しい、謎なぞの絵馬をひっくり返して見ると、裏面に、

「百姓、七兵衛納」

とある。

「はてな——これはまた、はてな以上のはてなだわい」

白雲はついに、道祖神の御神体石の首から、その絵馬をもぎ

取つて、自分の鼻づらへ持つて来てしまいました。

三

そこを立ち出でてから路傍の人をたずねて、事のいわれを問うてみるが、一向に要領を得ない。要領を得ないのである、得させないのは、言語の不通がさせるのだ。

「おらあ、おくにやあ、くちいたてばつても、あんな折助言葉、うざにはくわなあ」

げきぜつ

さても駄舌の音、一時ムカとしてもみましたけれど、いやいや、ところかわれば品もかわるのだ、かえつて、先方は、こつちの江戸弁——をさげすんで、嘲っているようでもある。今も子供が言つた一語、「折助言葉——」だけが、耳ざわりに残つて

いる。身不肖にして小藩に人となり、田舎まわりの乞食絵かきのようなザマはしているが、未だ曾て折助風俗に落ちた覚えはないのに、陸奥の涯みちのくへ来て、しかも子供の口から、こういったあざけりをあてつけられようとは、あさましい。

白雲が舌を捲いて、名取川の岸まで来ると、そこで、一ぜん飯屋に身を投じました。前の川で取った川魚を炙あぶつて、そのまま食膳に供えて客を待つ。

白雲は、ここで亭主と女房とを相手に、わざと悠々と構えて、よもやま四方山の話をもちかけたのは、一つは、これから仙台郷へ入つて、なるべく郷ごうに従わんとする用意としての、奥州語の会話の練習を兼ねんがためでありました。

ここで、気を練らして白雲が、夫婦を相手の会話の中から判断して、幾つかの仙台語のうちの単語を修得し、これを画帖の

端へ、ちよいちよいと書きつけたものです。その一例を言えば、

△いぎやる——これは、普通、おっしゃるということらしい

△はるなたをこく——これは偽うそを言うということらしい

△にし——おぬしということだ

△ほいちよう——ほうちようのことだ

△じいごばあご——じじ、ばばのこと

△われ様——おぬし様ということ

△よだつぽれ——馬鹿とか阿呆あほうとかいうこと

△ねいきをこく——腹を立てること

△なまだらくさい——じだらくなこと

△なじよたがな——何としたということ

△むぞい——可愛ゆいということ

△うちやせた——忘れたということ

△やくと——わざとということ

△まくらう——食うこと

川の肴でさかな一ぜん飯を食いながら、大体に於て、こういう奥州語を、聞くに従つて判断しつつ、白雲は画帖のわきへ幾つも書き並べて、なおわからないところは、二三問いただしているうちに、さいぜんのあの一つの不快な、さげすまれの語源を知ることができました。

仙台及びその附近では、江戸弁を称して、すべて折助言葉と
いうのである。仙台では、品格ある家庭に於ては、江戸弁を用
うることを決してしない。鈍重にして威儀ある、純然たる仙台
弁を用うることを貴しとしているが、もちろん、軽快なる江戸
弁は、用いようとしても用いられないにきまつているが、その
模倣の軽薄を避けることが土人の品格となつてゐる。若い者な

どが、たまたま江戸弁などを使つてみせると、家中では、何だ折助みたような言葉づかいをする——といつて卑める^{いやし}。それは江戸へ出て折助奉公をしたり、商家の小僧なんぞに住込んだものが帰つて来ると、往々江戸弁をつかうものだから、仙台の城下では、江戸弁そのものを軽薄なもの、下等なものとしてひんせきする——そこで、今も、白雲はなまじい関東弁をもつて子供たちに問いかけて、かえつて、折助言葉のさげすみを買つた^{ゆえん}。所以がよくわかりました。

白雲は、そんなことに恐縮しながら、なお相当に問いただしているうちに、この店へ、岡っ引が二人、川から上つて来ました。

白雲も、それがたしかに岡っ引の類^{たぐい}でなければならぬと見て取つたし、先方でも、ジロリと白雲の方に眼をくれながら、亭

主夫婦の方へよつて、心安立てに問いつ語りつ始めたのは、やはり純粹の奥州語を、双方とも達者にしゃべりまくるのですから、白雲の俄にわかごしらえの語学では、とうてい追いつきそうなことになく、結局、何をどう受渡しているのだから、音声の上では全く要領を得ることができませんでした。それでも身ぶりや表情によつて判断すると——何か事件が起つて、職務の上から、非常線を張りに来たもののようにもあり、特にこの亭主夫婦に向つて、川筋の警戒を申し渡し、頼み込んでいるらしい素振りであることは、判断がつきます。

で、二人の岡っ引は、こうして純粹の奥州語を亭主夫婦と達者に取りかわしていながらも、ジロリジロリと白雲に眼をくれることは以前と少しも変らないが、こつちが存外泰然自若なのに、相当面かおま負けがしているようでもあります。

しかし、お茶を飲んでしまうと、どうしても、この風来の逞したくまい旅絵師のえたいにさわつてみないことには、役目の手前、立去れない羽目になったのは無理もないことです。

そこで、二人の岡っ引は、田山白雲の方へまむきに向つて来て、今度は純粹の奥州語に多少の標準弁を交ぜて、つまり、

「貴君は、どなたですか」

こう詰問されたものですから、白雲が、

「拙者は、旅の絵師です」

と答えると、

「劍師——左様でござらば、劍道のお流儀は？」

と先方が反問して来たものです。うむ、では絵師といったのを、劍師或いは劍士と聞きそこねたのだな——いや、これは今にはじまったことではない、劍客と言えば通るが、絵師と言ったん

では通らないことになっているのが、生れついでの人相だから
いまさら致し方もない。しかし、まあ、どっちでもいいわ、道
に劍客に逢う時はすなわち劍客になりすまし、道に絵かきに逢
う時は絵かきになりすましてゐる。ここでも、こちらは絵師だ
というのに、先方は劍士と受取つたのだからそれでもよろしい
と、白雲が即座に答えました、

「左様、南北流を少々修行仕り、狩野、土佐、雲谷、円山、四
条の諸派へも多少とも出入り致しました」

「ほほう」

これは八流兼学の大劍客とでも思ったのか、岡っ引二人は、
少なからず度胆どぎもを抜かれたように、

「して、いずれからおいでになりました」

「江戸を立ち出でて、奥州街道を白河より福島を経て、これよ

り仙台城下へまかり通ろうとする途中でござる」

「ほほう、して、仙台はどちらの先生の道場へお越しでござるかな」

「道場——それぞれ、とりあえず仙台城下、高橋玉蕉先生の道場で一本お手合せを願ひ、それより松島へ罷り越して、観爛道場に推参して、狩野永徳大先生に見参仕る目的でござる」

「ははあ、左様でござるか——昨今、仙台御城下には、少々物騒な儀がござるによつて、随分御用心の上——」

二人は、多少とも、白雲の応対ぶりに吞まれたようにも見られるが、一つはその堂々たる体格と、わるびれない応答ぶりが、信用を買ったものと言わなければならぬ。事の進行によつては、一応剣客の面を脱いで、改めて絵師としての自分を証明しなければならぬ運命のほどを覚悟もしていたのですが、存外すら

すらとパスして、岡っ引は立去ってしまったものですから、白雲も店へ払いと茶代とを置いて、ここを出ようとして、ちよつとひっかかりになつたのは、道祖神からここまで持つて来たあの絵馬です。

わざわざ持つて来るほどのものではないが、捨てるのもなんだか心残りのようだから、ここまで持つては来たが、茂太郎ではあるまいし、これから先、どこまでも般若はんにやの絵馬と道行も変なもの。

そこで白雲は、このまま店へ置去りにしてここを出ました。店を出ると名取川です。

四

田山白雲は、名取川の仮橋を渡りながら、今の岡つ引のことを思い返しました。

岡つ引の言うことには、仙台城下が今日は物騒がしいから用心しておいでなさいと。

それよりさき、純粹の奥州語をもつて、飯屋の亭主夫婦と会話を試みていたところを拾い聞きにしての判断から言うと、その仙台城下の物騒というのは、やっぱり盗賊沙汰であるらしい。それも、市中商家を荒した盗賊ではなく、どうやら城内の然るべき部分をおかしたる某重罪犯人の搜索でもあるらしい、ということをお白雲が思い返しました。が、そんなことは深く心配せんでもいい。

いつしか名取川の沿岸の風物に頭こうべをめぐらして、眼を放ちながら、幾瀬の板橋を渡りきろうとした時分、ついそこの柳の木

の下で、蛇籠じやかごを編んでゐる男があるなという印象が、なんとなく眼にうつりました。

と同時に、こちらの瀬には、魚を捕るためのやなながかけてあるのを認めました。単にそれだけのことで、川岸で、筏いかだを組んだり蛇籠を編んだりすることはあたりまえの光景なのであり、川の中にやななをかけて魚を捕ろうとしていることも、名取川特有の風景でもなんでもないけれども、それがなんだか、白雲の眼に、どうも特有な風物のようにうつったものですから、歩みをとどめて、このやななのところまで歩いて行つて見ました。

そうして、その附近をのぞいて見ると、鮎あゆがかなりにいることを発見しました。ははあ、鮎あゆがいるな——今の飯屋で食わせたのも、焼いて乾かした鮎あゆであつた。瀬の清い、流れの早い川に鮎あゆがいることは不思議でもなんでもない——この名取川には、

特有の鮭さけの子もいるということを聞いた。それよりも、名取川の名そのものと切つても切れない埋れ木というものがこの川から出るのだ——はて、鮎あゆのほかに鮭の子はいないか。もし、その辺に埋れ木のひねったやつが頭を出してはいないか。

そんなことで、無心にその辺の淵をのぞき込んでみると、背後うしろから、

「もし、あなた様は、田山白雲先生ではいらつしやいませんか」
「えッ」

白雲が、ぎよつとして後ろを向くと、いつのまにか背後に歩いて来ているのは、それは、確かに、いま、ついその柳の下で蛇籠を編んでいた老人に相違ないと直覚しました。だが、かぶっている笠をとりもしないで、鉈なたを腰にさしながら、小腰をかがめている人体にんていは、思ったほど老人ではありません。

「お前は誰だ」

「田山先生でいらつしやいますか」

「わしは田山だが、お前さんは？」

「ああ、それで安心を致しました、私は近頃、駒井の殿様の御家来分になつた田舎老爺いなかおやじめにございまして」

「駒井殿の……」

改めて、白雲が、その老爺の面かおを見直しました。面を見直すまでもなく、それはもう言葉でわかつている。この辺では聞き慣れない関東弁ですから、耳を疑う余地はありませんが、そんならばこの老爺が、駒井甚三郎の家来分だというこの老爺が、なんのために、こうして、こんな奥州の名取川の岸で、悠々閑々と蛇籠などを編んでいるのだ。

白雲は、油断のならない眼をもつて、この老爺の面を見てい

ると、老爺は存外、落着いたもので、

「田山先生、何はともあれ、申し上げなければならぬことは、

駒井の殿様は、あなた様の御出立中に、すのさき洲崎をお出ましになつて

しまいました。手ずからお作りになりました、あのお船で……」

「ナニ、駒井殿が、あの蒸気船で洲崎を立たれたと、どうして、
おつぎゅうそう早急に……」

「はい、土地の人氣が悪くなりましたものでございますから、大急ぎで人数を取りまとめて、船おろしと船出を一緒になさいました、あなた様をお待受け申している間もございませんでした」

「うむ——」

「それで、わたくしが、あなた様のおあとを慕つて、このこと
うけあをお知らせ申し上げようと請合つたようなわけでございました
が、運よくここでお目にかかれて、こんな嬉しいことはござい

ません」

「なんだか、遽にわかに拙者のまわりで、廻り燈籠どうろうを廻して見せられているようで、とんと面食った気持だが、そう言われると、そうありそうなことじゃ。それで、駒井氏は洲崎を船出して、どちらへ行かれたか」

「はい、それが、その、このつい御近所の石巻の港を目あてに乗出しておいでになりました」

「ナニ、石巻——なるほど、駿河の清水港へ行こうか、仙台の石巻へ行こうかと駒井氏は常々言われていたが、して、なにかな、もはや石巻に到着しておられるのか」

「いや、それが、たしか今明日中には御無事にお船入りのはずなのでございます」

「それはそれは——で、なにかな、あの番所に居候の連中は、み

んな同じ船に乗込んで来たのか」

「はい、一人残らず、茂太郎も、金椎^{キンツイ}さんも、マドロス君も、も

ゆるさんも——それから、お松に、登様——土地の船頭さんたち」

「おお、それはそれは——それを知らないで、このまま房州へ舞い戻ろうものなら、飛んだあとの祭りを見せられるところであつた、よくお前さん、知らせておくんなすつた」

「お話し申し上げると長うございますが……」

この時、遙かにみとおしのきく河原の両岸を見ると、こしかたの方からは、さいぜん飯屋へ出張したらしい岡つ引が先に立つて、村役人らしいのを数名^{ひきぐ}引具して、こちらへ取つて返して来る様子。それからまた一方には、檣を押立てた同勢が、長町の方から物々しげにやつて来る。

それを見ると、右の蛇籠じやかご作りが、多少そわそわし出して、

「のちほど、ゆつくりお話し申し上げましょう。今晚、先生は、どちらへお泊りでいらつしやいますか」

「わしかい——まだどこといって、宿はきまらないが、とりあえず、大町の高橋玉蕉という女の学者のところをたずねて参るつもりだ」

「大町の高橋先生とおつしやいますか」

「そうだ、女で有名な学者——それに家はなかなか金持の商家ということだから、そこをたずねて来ればわかるだろう。もしまた、別に宿を取った時は、その家へ申し置くから、わかるようにして置く」

「よろしうございます、私は、只今のところ、仕事が少々忙せわしうございますから、今晚——夜分も遅くなるかも知れませんが、

必ずお伺い致しますから、おかまいなく、お休みになつてお待ちくださいませ」

「うむ——では」

と言つてゐるうちに、右の蛇籠作りは、大忙しがりで、ついその柳の木の下へ引込んでしまい、そこで、以前の通り一心に蛇籠を編み出したものですから、白雲も、ちよつと手のつけようがなく、そのまま川原道を急いで行くと、やがて、前から来た槍の同勢と、後から来た岡つ引の連中との間にはさまれたよな形になりました。

だが、別段、問題は起りません。白雲は川原道で、この前後の勢を無事にやり過して、自分は悠々閑々と歩いて行きながら、ふと、柳の木の下を見ると、蛇籠作りが一心不乱に蛇籠を編んでいるのがかすかに見られて、別段の異常を認めません。

槍の一隊はと見ると、もう向うの岸についてしまつて、自分が語学の稽古をした一ぜん飯屋の底ひさしに槍を立てかけて、それぞれ休んでいる姿までが、豆のように見えてゐるだけのものです。

五

川を渡りきつて、白雲、途みちすがら思うよう、さては、駒井も洲崎にいたたまれなくなつたのだな、どちらにしても、あそこが永住の地でないことはわかつてゐるが、しかし、あわただしく出船を余儀なくされたというのは、駒井にとつては不祥だ。

人間、馬鹿では樂ができないけれども、また、あんまり頭が進み過ぎていても、樂はできないものだ。駒井ほどの英才が、当世と相容れないのは、これも一つの間人間の約束ごとかも知れ

ないが、由来、独創の氣というものは不遇の茨いばらの中から開けるものだから、駒井のこれから前途の方が、なまじい衰えかけた幕府のお役人をつとめて当世に時めいているより、どのくらい意義もあり、興味もある生涯か知れないのだ。

思いきつて、この石巻へ来たとか来るとかいうのは、この際、よいことを聞いた、またよいことを知らせてくれたものだが、あの知らせてくれた蛇籠作りの老爺おやじこそ、全く解げせないへんな奴だよ。なんにしても近々思いがけないところで駒井に逢えるのだ、そうして、もはや、自分に於ても、房州へ取つて返す必要はなくなってしまったのか——それはいいとして、房州にはかなり自分としての財産を残して来たはずだが、あれはどうなつたろう、まさか暴民どもに焼討ち、掠奪の憂目こらむを蒙こうむつたとも思われないが、いや、蒙こうむつたにしたところで金目にしては知れた

ものだが、丹念にして置いた写生帖だけは、自分としてかけ替えがないからな、そこで多少の心残りが房州にないことはない。うむ、よしよし、それもあの蛇籠作りの老爺が知っているだろう、今晚、たずねて来ると言ったが、急にそわそわした様子がおかしいけれど——まあ、今晚来たらつかまえて、委細を聞いてやる。

こんなことを考えながら、田山白雲は、中田、大の田より長町——ここはもう仙台の城下外れです——大町というのを苦もなくたずね当てて、そこで、とりあえずまずおとのうてみよう」と心がけた高橋玉蕉女史をたずねると、これも難なく——これは大きな商家で、女史は宮城野の別宅にいらつたのことで、改めてそこをたずねると、ちょうど在宅でもあり、また極めて歓迎もしてくれました。

女史の住宅は数寄^{すき}をこらした家です。それよりも、白雲を驚かしたことは、玉蕉女史が本当の美人であることを見たからです。

美人に、ウソの美人と本当の美人があるかどうかは知らないが、世にいわゆる才色兼備の婦人などといつても、才の方とはとにかく、色の方は大割増がしてあるのを通例とするのに、玉蕉女史に限って割引なしの美人でしたから、白雲がおもはゆく思いました。

女史が学者であるということを知らないで見れば、それ者と見たかも知れないほど粹^{いき}な美人でした。もはや四十の坂を越していようと思われるのに、姿、かたち、どう見ても二十台で通るのです——それに、永く江戸で修業して、婦人の身で塾を開いて、生徒を教えていたというほどですから、その応接もこと

ごとく江戸前で通り、白雲をして、俄仕込みにわかじこの奥州語を応用せしめる必要は少しもありませんでした。

女史は、この遠来の客を欣よろこんで、相語るほどに、両々の興味が加わって、話はいつ果つるとも覚えません。

その夜も——夜もすがら、語つても語つても尽きないものがありました。

「そういうわけで、拙者の奥の細道は、狩野永徳というそぞろ神にそそのかされたのですが——明日はとりあえず、観瀾亭へ行つて永徳に見参したいと思うのです、簡単に許されましようかな」

こういつて女史にたずねると、女史は、

「それは容易たやすいことです、月見御殿の拝見ならば、よい伝手つてがございますから、わたくしが御案内を致しましょう、山樂の襖

絵といわれますものは、わたくしもかねて拝見は致しておりますが、あなた様と御一緒に拝見すれば、またよい學問を致します」

「いや、それは恐縮です、拙者こそ、あなたのような學者に、御自身案内をしていただくということが、はからざる光榮でした。明日は、扶桑第一ふそうといわれる松島も見られるし、あこがれの狩野永徳にも見参ができるし、それに東道の主人が稀代の學者であり、絶世の美——」

と言つて、田山白雲が、少しあわてて口を抑えたけれども、その尻尾が少し残ったものですから、玉蕉女史を追究させました。「絶世の——何でございますか、扶桑第一の松島や、狩野家の大名人の次へ持つて来て、絶世の……だけでは罪でございますね」玉蕉女史からからかわれて、田山白雲が、今度は額を抑えて、

「あ、は、は、は」

と声高く笑いました。玉蕉女史も、またつり込まれて無邪気に笑いました。田山白雲はそこで申しわけのように、

「全くあなたは、絶世の美人と申し上げてもお世辞ではありませんよ。実は、あなたが怖るべき才色兼備の御婦人ということ、紹介された者の口から、よく承つて来たのですが、案外なのに驚かされました」

「どうせ案外でございましょう、いつたい仙台は、昔の殿様が高尾を殺した祟りたたで、美人は生れないのだそうでございます」

「いや、違います、全く案外の、掛値なしの才色兼備なのですから——はなはだいつたい世間では、身投げの婦人があれば必ず美人にしてしまい、はなはだ甚しいのは首無し美人なんぞというのもありました、婦人で、学問がある、歌がよめるといって、おきまりに

才色兼備にしてしまうのが慣例になつていまして、才の方とはとにかく、色の方は大割引しなければ受取れないのが通例なのに、あなた様だけは、割引なしの美人でしたから驚かされました」

白雲だから、これは全くお世辞ではありませんでした。

そんな調子で、話がそれからそれとはずんで行くうちに、白雲が、ついに望蜀ぼうしよくの念を起してしまつて、

「ああ、それぞれ、もう一つ仙台家に——特に天下に全くかけ替えのない王羲之おうぎしがあるそうですが、御存じですか、王羲之の孝経——」

「有ります、有ります」

玉蕉女史が言下に答えたので、白雲がまた乗氣になり、

「それは拝見できないものでしょうかなあ」

「それはできません」

女史はキツパリ答えて、

「あればつかりは、わたくしどもも、話に承つておりまするだけで、どう伝^{つて}手を求めても拝見は叶いません、いや、わたくしどもばかりではございません、諸侯方の御所望でも、おそらくは江戸の將軍家からの御達しでも、門外へ出すことは覺束なからうと存じます」

「ははあ、果して王羲之の真筆ならば、さもありそうなことですが、王羲之の真筆はおろか、拓本でさえ、初版のものは支那にも無いと聞いています——そういう貴重品の品が、どうして伊達家の手に落ちたか、その来歴だけでも知りたい」

という白雲の希望に対しては、玉蕉女史が、次の如く明瞭に語つて聞かせてくれました。

六

豊太閤朝鮮征伐の時、仙台の伊達政宗も後おくれ馳おせながら出征した。

朝鮮国王の城が開かれた時、城内の金銀財宝には目をつける人はあつたけれども、書画骨董こつとうに目のとどく士卒しそというのは極めて稀まれであつた。

そのうちに、肥後の熊本の細川の藩士で甲へいというのがしきりに、王城内で一つの書き物を見ている——兵馬倥偬かうそうの間に、ともかく墨のついたものに一心に見惚へいれているくらいだから、この甲士の眼には、多少翰墨かんぼくの修養があつたものに相違ない。

「これこそ、わが主人三斎公にお目めにかけなければならぬ」
それを、傍かたえから、さいぜんよりじつとのぞいていたのが、伊

達家の乙士であつた。

この乙士がまた、偶然にも同好の趣味を解し得ていたと見え——細川の甲士が一心をとられているそれを、のぞいて見ると、ああ見事——熟視すると、それがすなわち王羲之筆の孝経である。

乙士の眼は燃えた。わが主人政宗公へ、この上もない土産——分捕つて持ちかえないまでも、一眼お目にかけたら、そのおよろこびはと、自分の趣味から、主人思ひは細川の甲士と同様で、それに功名熱が煽りかけたが如何せん——先取権はもう、その細川の甲士の上にある。

さりとて、どうも、このままでは引けない、ともかくもぶつつかつてみよう、伊達の乙士は細川の甲士に向い、なにげなく、「さても見事な筆蹟でござるが、拙者もこの道は横好き、なん

とこの一卷を、拙者の好事こうずにめでてお譲り下さるまいか」

こう言つて持ちかけてみたが、甲士は頭を縦に振らなかつた。敵将の一番首はお譲り申そうとも、この一卷は御所望に応ずるわけにはいかぬ」

「それは近ごろ残念千万ながら、是非に及ばぬこと」

礼儀から言つても、名分から言つても、先方が譲らないと言う以上、こちらは、どうしても指をくわえて引込まなければならぬ。ぜひなく陣へ立戻つたが、残念で堪らないから、改めてその一条を主人政宗に向つて物語つた。

「それは残念無念——そのほうが我に見せたいと思うより以上、おれはその品を見たい、見ずには置けぬ」

そこで独眼竜は馬を駆かつて、直ちに細川三斎の陣を訪れた。

「突然の推参ながら、たつて所望の儀は、さいぜん貴公の家士

が稀代の名筆を分捕られたそうな、それを一目拝見が致したい」

「容易たやすき儀でござる」

三斎もそれを否こまん由はなく、今し甲士が分捕つて齎もたらしたばかりの一卷をとつて、政宗の手に置いた。

政宗それを取り上げて見ると、唐太宗親筆の序——王右軍の筆蹟——独眼竜の一つの目が、その全巻の中へ燃え落ちるばかりになつてゐるのを見て、急に驚き出したのは細川三斎であつた。

この勢いでは、この男に持つて行かれてしまふかも知れない——所望と打出された以上は、相手が相手だけに、どうしても只では済まされない、ここは先手を打つよりほかはないと、老巧なる細川三斎は、政宗と王義之おうぎしとをすつかり取組まして置いて、穩くさびかに楔を打込んだ、

「伊達公の御来駕ごらいがを幸い、密談にわたり候えども、かねがねの所存もござること故、折入つて御相談を願いたい儀は——」

と、改まつて物々しく出た。王義之に打ちこみながら、政宗は、

「何事かは存ぜねども、御心置なく申し聞けられたい」

「余の儀でもござらぬが、太閤殿下の威勢によりて天下は一統の姿とはなりつるが、これで安定とは、我人共に得心のなり申さぬ時勢、太閤百年の後、天下再び麻の如く乱るるや否や——然しかる上は、君は東北にあつて本土の頭を抑え、不肖は九州にあつてその脚を抑え、かくして、南北相俟あいまつて国家のために尽しなば、そのしあわせ、我々の上のみならずと存じ申す。よつて、今日貴公の来臨を機会とし、伊達公と細川家——末永く親類の名乗りを致したいものでござるが——」

練達れんたつ堪能たんのうの細川三斎から、こう言われて、豪氣濶達たつたの伊達政

宗が、その返答を躊躇するようなことはなかった。

「それは、深慮大計の御一言、不肖ながら我等とても同様の所存、然らば今日より、細川家と伊達家は、末永く親類づき合いをすることに致そう」

「早速の御承諾かたじけなし——然らば、その結納ゆいのうの記念として」

細川三斎は、伊達政宗の手から王義之の孝経を受取つて——その場で二つに裂いた。

「この上半を君に進呈し、下半は忠興ただおき頂戴し、これを以て心を一にして、両家親類和睦の記念とつかまつる」

そこで、この一卷が、伊達家と細川家と、両家にわかれての家宝となった。

それより物変り星うつり、伊達家は政宗より五代、名君と聞

えた吉村の時代になり、細川家もまた当然越中守宗孝の時代となつたのである。

「ところが、どちらがどう伏線になつていてございますか、この二つに分れた王羲之が、それとは全く異なつた因縁と出来事によつて、一つになる機会を得ました、それで話が伊勢の国へ飛ぶのでございます」

七

玉蕉女史は、事実の非常に奇なる物語を、やさしい物言いであくみに語り聞かせるものですから、白雲も膝の進むのを覚えませんでした。

朝鮮陣の物語から、話題一転して、ここは伊勢の国、藤堂家

の城下の舞台となる。玉蕉女史は、嬋々^{びび}として次の如く物語を加えました、

「御承知の通り、伊勢の国は、大神宮参拝の諸国人の群がる土地でございます、それだけに土地に、他国人を相手に悪い風儀も多少ございまして、藤堂家の家中のさむらいにも、折々、通りがかりの旅人に難題を吹きかけ、喧嘩を売り、相手を困らせて置いて一方からなれ合いの仲裁役を出し、そうしてどうやら事を納めたようにして酒手^{さかて}をせびる——というような風の悪い武家が無いではなかったそうでございますが、いずれも遠国の旅人ゆえ、相手が怖がつて、無理を通したというようなわけでございしましたが、藤堂家からはお隣りの、大垣藩の戸田家の方々がそれを聞いて苦々しいことに思いました。これはひとつ遠国旅人の迷惑のために、最寄りのわが藩中に於て目附役を買つて

出て、藤堂の悪武士の目に物見せて置いてやるべき義務がある、こんなように思ひまして、戸田家の剣道指南役のなにがしという方が、わざと入念の田舎武士風によそおつて、伊勢詣りを致すと、案の如く、藤堂家の悪さむらいにひつかかりましたものですから、御参なれとばかり、それを取つて抑え、さんざんにこらしめ、固く今後をいまして許し歸したとのことでございますが、それだけで済めばそれでよろしいのでございますが……」

右のこらしめの武士は、実は戸田家の指南役が姿を変えて、いたずらに來たのだという噂うわさが、藤堂様の耳に入つたものですから、藤堂様もいい心持はなさらず、それに家中の者が戸田家の仕打ちを憎んで、その儀ならば、仕返しとして、戸田家に向つて、うんと恥をかかせてやれ——という一念が昂じて、ついに戸田の殿様を暗殺してやろうという血氣にはやるのが、とうと

う実行に現われてしまいました。

それは藤堂家の家中で、板倉修理というさむらいが、江戸の西の丸のお廊下に身を忍ばせて、戸田の殿様のおかえりを待受けていて、不意に飛びかかって斬りつけたのですが――

間違いのある時は、いよいよ間違いのあるもので――板倉修理が戸田の殿様と思って斬りかけた先方は、思いきや前申し上げた肥後の熊本の細川越中守宗孝侯でございました。

細川様こそ、何とも申上げようのない御災難で――実は、その時、板倉修理の一刀で御落命になったそうでございますが、そこへ通り合わせたのが、これも前申し上げた通り、名君の聞え高い仙台の吉村侯でございました。

殿中、上を下への騒動の中に、通り合わせた伊達吉村侯は、細川侯を介抱し、

「細川越中守、ただいま卒中にて倒る、伊達陸奥守お預り申す」
と言つて、血の垂れたところへは、全部小判を敷きつめて、御自分のお乗物に、越中守の御死体とお相乗りになつて下城なされました。

桜田御門の検閲は厳しいそうですが、その時、吉村侯のお乗物は、東照宮御由緒附きの胴白どうしろのお乗物——それに太閤様以来、伊達家だけにお許しの活火縄いきひなわで、肅々と行列を練つてお通りになつたので、どうすることもできず——御面会のために群がる者へは、

「越中守殿は卒中にて倒れたが、只今、粥かゆ一椀を召上られたから心配御無用、御療養中、面会は一切おことわり——」
——
ということで、とりあえず細川家へ急をお告げになりました。

細川家では、その翌日、「細川越中守宗孝、薬用叶わず、卒中

にて卒去」ということの喪を發しましたが、暗殺は公然の秘密に致しましても、伊達家の証明如何いかんともし難く、病氣ということで公儀の取りつくろいも一切御無事に済みました。

これはこれ、有徳院様お代替りの延享四年十月十五日のことでございます。

御承知の通り、国主大名が殿中に於て非業ひじょうの死を遂げた場合には、家名断絶は柳營りゅうえいの規則でございますから、伊達公のお通りがかりが無ければ、細川家は当然断絶すべき場合でございます。そこで、細川家が再生の恩を以て伊達家を徳とすることは申すまでもございません——その時に、細川家で家老たちが相談をして、文禄朝鮮征伐の時の王義之の孝経の半分を持ち出し、いささか恩義に酬ゆるの礼として、これを伊達家に御寄贈になりました。これで細川家五十五万石が救われ、王義之の孝

経は完全な一卷となつて、伊達家に秘蔵される運命になつたのだそうでございます。

右の来歴を逐ちくいち一聞き終つてみると、白雲はあきらめたようなものの、せめて、その摹本もほんでも、うつしでも、片鱗でも見たいものだしきと頻りに嘆声を発しました。

玉蕉女史も、来歴のことだけはかなりくわしく知っているが、その片鱗をもうかがっていないことは白雲と同じ、そうして、しきりと渴望の思いにかられることも同じであります。

けれども、結局、いかに執心しても、こればかりは我々の齒が立たないということに一致し、徒らいたずに王羲之の書——その他の書道の余談に耽ふけることによつて、夜もいたく更けたようです。

いつまでたつても話の興はつきないが、この辺で御辞退と白雲も氣を利きかせると、廊下伝いの立派な客間へ白雲を案内させ

て、美しい夜具の中に、心置なき疍ねぐらを与えくれるもてなしぶりに、白雲もなんだか夢の国へでも来たような氣持になって、うつとりと、その美しい夜具の中に身を置いてみると——王羲之を中心としての話に、あんまり身が入り過ぎて、他の多くのかんじんなことを、すっかり忘れ去ってしまっていたことに、我ながら苦笑いをしました。

そのうちの最初として、今晚たずねて来る口約束になっていた、あの名取川の蛇籠じやかごづく作りの変な老爺おやじ——こっちは話に夢中で忘れてしまつてはいたが、先方は、自分から念を押して今夜はかならずやつて来るとあれほど言っていたのにまだ訪ねて来た様子はなし——責めは先方にあるのだ、と独文句ひとりもんくを言つてみたりました。

まあしかし、明日という日もあるし、何とか沙汰があるだろう——と白雲は、タカを括くくつて、その美しい夜具に身をうずめると、まもなく夢路の人となりました。

旅の疲れと、夜更しとで、かなりの熟睡に落ち込んで行つたはずの白雲が、夜中にふと眼をさましたものです。夜中とはいうけれども、寝に就いた時が、もう暁間近になつていたかも知れません。

ふと、眼がさめた途端、まず鶏の啼なく声が耳に流れこむと一緒に、有明ありあけをつけて置いた朱塗の美しい行燈あんどんがぼんやりと——
そうして、その行燈の下にうずくまつている怪しいものが一つ——
睡眠に触れると、さすがの白雲がハツと身を起して、枕許

の刀をとろうとしたのです。

「何者だ！」

白雲として、自分ながらかなり慌^{あわただ}しい挙動であると思つたが、事態、そうしなければならない場合を、先方は全く静かなもので、

「先生、お静かに」

と、たしかにうづくまつた奴が、説教でもはじめるように物を言いかけました。

「何だ、何者だ、貴様は」

白雲は半分起き直つて、刀を引寄せていました。そうして、もう睡眠がパツと冴^さえた眼で見ると、行燈の下にうづくまつている奴は、旅の合羽^{かつぽ}を、肩からすっぽりと着て、頭には手拭を米屋さんかぶりに捲いている。

「先生、お約束によつて参上いたしました、少々遅くなつて相済みません」

でも、まだ白雲には、はつきりと納得なつとくができない。

「貴様、どろぼうの端くれだな、貴様たちと約束をした覚えはない」

大抵のどろぼうならば、この豪傑画家の白雲から一喝を食えば、尻尾を捲くであらうのに、こいつに限つてどこまでも、いけ図々しい。

「お忘れあそばしましたか、日中、あの名取川の川原でお目にかかりました、蛇籠おやじ作りの老爺でございます」

「うむ、そうか」

白雲がまたここで、そつくり、返らざるを得ません。

そうか、そんならそうと、なぜ早く言わないのだ。それにし

でも、いよいよ変な老爺だ、いつたい、いつ、どうして、この間に、誰に案内されて入つて来たのだ——というその咎め立ても、こうなつては氣が利かない。そこを先方が、いよいよいけ
図々しく喋りました、

「夜分、あんまり遅くなりましたものでございますから——いえ、その実は、こんなに遅く参つたのではございませんが、先生が、あの御婦人様と、あんまりお話に身が入つておいででございましたから、ついあの時に、御案内を申し上げる隙がございませんで、で、つい、こんなに遅く上りまして、あいすみませんことでございます」

「なに、では貴様、なにか、拙者がこの家の女主人と對話をしていた時分に来ていたのか」

「はい——あんまりお話が持てておいでなさいますから、お邪

魔になつてもなにと存じまして、いったん出直して、また上りました」

「ふーむ」

白雲は、そこにうずくまっている物のかたまりを、うんと睨にらみつけていました。遅くなつて上りましたはいとしても、夜更けたゆえ、案内を頼むことに気兼ねをして直接にやつて来たのも、まあこの際ゆるすとして、いったいそのザマはそれは何だ、旅ごしらえのままで人の座敷へ侵入して来て、とぐろをまいたようにうずくまり込み、そうして、頭にまいた無作法な、下品な手拭かぶりを取ろうともしない挨拶ぶりは何だ。

白雲は、いまさらその辺を咎め立てするのもドジを重ねるよ
うな気がしていると、

「先生、実は、わたくしも忙しい体だものでございますから、こ

のままで失礼をさせていただきますでございませう——で、手つとり早く川原のお話の続きを申し上げますと、駒井の殿様は明日のうちに石巻の港へお着きになる、それからあの殿様の御家来や、居候といった一味のものもみんな同じお船でおともをして参ります、田山先生だけが御不足でございましたが、それもこうしてお目にかかれる、もはや申し分はございません。そこで、この七兵衛——いや、この蛇籠作りの老爺も、追っつけあとから馳^はせ参じさせていただくのでございますが、先生のお荷物、それからお書きになつた品々などは、私が取りまとめ、船へおのせ申すものはおのせ申し、わたくしが持つて参りましたものは一切、行李にしまいまして、石巻の田代屋という宿にあずけてございますから、あれへおいでになつてお受取りを願います。残らず始末を致して参りましたはずでございませうが、

もしや、一品二品、取残しがございましたも、あんな際の時でございますから、ごかんべんが願いたいので……ともかくも、石巻の田代屋というのをたずねてお越しになつて、駒井の殿様のお着きをお待ち下さいませ」

態度のいけ図々しいのに反して、その取りしきりぶりと、物言ひとは、行届ききつたもののようですから、白雲がいよいよ手がつけられない氣持がしました。

「うむ、そうか、それは何から何まで厄介千万になつたが——お前という男は何者だ」

「いや、それは、あとでお船のうちで、ゆつくりと身の上話を聞いていただく時節がございましょう——とにかく、これだけのことを申し上げて置きました……」

「そうして、お前はなにか、これから旅立ちをしようというの

らしいが、どこへ行くのだ」

「いいえ、旅立ちというほどじゃございません、ちよつと、この辺をかけめぐつてみたいような虫が起りましたものでございますから。なあに、病気がなおりますと、直ぐにまたあなた様のおあとを追いかけて、石巻へ参ります」

「そうか」

白雲は、それよりほかに何とも言いようがない。無然^{ぶぜん}として、なお燈下にうずくまる男を見下ろしていると、右の老翁^{おやじ}は平蜘蛛^{ひらぐも}のような形をしているのが、気のせいか、見ているうちに平べつたくなつて、畳にべつたりくつついてしまつて見えるように見えて、白雲も少し気味が悪いような気分になつてしまつた。

ぴつたりと畳の上へ、一枚になつて、吸いついた形になつて、顔だけを上げて、蛇籠作りの老翁は、

「時に先生——」

いやに改まった物の言いぶりです。

「何だ」

「承りますと先生は、あの赤穂義士の書き物がたいそう好きだそうで……」

「ナニ、赤穂義士の書き物——そんなものは別に嫌いではないが、改まってきかれるほど好きではない」

「でも先生は、仙台様の御宝蔵にあつて、たとえ將軍家が御所望になつてもお貸出しをなさらない赤穂義士の書き物を、一目見たい見たいとおっしゃつたようにお聞き申しましたがな……」

「こいつ……」

白雲が罵ののしつたのは、怒つたからではありません、呆あきれ果てたからです。思わず眼をまるくして「こいつ」と前置をして、

「それをどこで聞いた。赤穂義士ではない、支那の王義之おうぎしといつて、支那第一等の書家だ。その書が仙台家にあるそうだから、それを見たい見たいと言つたには相違ないが、それを貴様、どこで聞いていた」

「いや——その、ちよつと、失礼ながら立聞きを致しました。先生が、それほどにごらんになりたがるほどのものならば……と、この老爺、またしても持つて生れた病がきざして参りましてな」

「ナニ、何がどうしたというのだ、仙台公秘蔵の王義之は、国主大名將軍といえども借覧のかなわらないものだから、是非に及ばない。それがどうしたというのだ」

「へ、へ、へ、実は、この老爺も乗りかかった船でございますから、まあ、止せばいいんでございますがね、持った病でございましてな——人の見られないものを見たい、人の持てないも

のを持つてみたいなんぞと、ガラにない山つ気がございますものですから、まこと仙台様の御宝蔵のうちに、国主大名將軍様でさえも拝見のできない品とやらがございますならば、ひとつ何とかして、ちよつとの間でも、それを……何とかして……」

「馬鹿——何とかしてと言つたところで、貴様風情ふぜいに何となる」

「そこのところを、何とかして、ここ二三日のうちに……駒井の殿様のお船がおつきになるまでの暇つぶしに——と申しては勿体もったいのうございますが、できないはずのそのお宝を、それほど御所望でいらつしやいますから、それを一目なりと、あなた様のごらんに入れて——それからまた思召おぼしめしによつては、元通り、どなたにもわからないように、もとのお蔵へ返して置いて上げたいと、こんな、いたずら心が出たものでございますから、ちよつと、御念を押しに参りましたようなわけで……では、そ

れは赤穂義士じゃございませんでしたか、支那の王羲之という支那第一等の字を書く方、その方のお筆になつた巻物——それだけでよろしうございますね。はい、承知を致しました、やり損ないは御容捨を願ひまして……」

「うむ——貴様」

田山白雲は徒らに眼をむいて、大きな唸りうなを發するのみであります。

その時にまた鶏が啼きました。そうすると、平べつたくなつていた老爺が、急にのし上り、

「では、これで失礼を致します、御免下さいまし」

すつくりと立つて、障子の隙間から——事實は相当にあけて出て行つたのですが、白雲の眼からは、あのままで、暈の中へ吸いこまれてしまったのか、でなければ、障子の隙間から消え

てしまったようにしか受取れないので、やつぱり眼を光らして呆れ返つて、さて、ホーツと太い息をついたのみであります。

九

駒井甚三郎の無名丸が、あれからああして、無事に牡鹿郡おしかごおりの月ノ浦に着いたのが、洲崎を出てから十四日目の夜のことでありました。

着船は、わざと夜を選んだのは、駒井の思慮あつてしたことでしたが、無論その前後、この辺の漁船商船が、駒井の異形なる船の出現を怪しまないはずはありません。

だが、朝になつて見ると、その船の上に、仙台家の定紋じょうもん打つた船印が立てられてあることによつて、浦の民が安心しました。

御領主の御用船とあつてみれば、文句はないのですが、駒井がそうして無断に仙台家の船印を濫用してよいのか、一時の策略で、それを利用してみても、あとの祟りたたというものはないか。その辺には、駒井としては充分の遠謀熟慮があつてのことだろうから、それは憂うるに足りないことでした。第一、船つきをこの月ノ浦に選んだということにしてからが——故意でも、偶然でもなかつたのです。

そもそも、この月ノ浦というのは——それを説明する前に、さかのぼ溯つて、東北の独眼竜伊達政宗を説かなければならないのですが、そうすると記述が徒らに肥えて、ロマンの肉が瘦やせる。ただ、伊達政宗が、その昔、この港から、ローマへ使節を遣つかわした港であるということだけを、とりあえずしるして置く。

そうして駒井甚三郎は、かねて海外に志ある人としての伊達

政宗をかなり研究していたところから、一つはその思い出のため、この由緒ある港を選んで着船したものと見て置いていただいてよろしい。

本来ならばこの船が着くと同時に、真先かけて、はしけに立っている七兵衛の姿を見なければなりませんのですが、それが見えないことが、誰よりもまず清澄の茂太郎を失望させました。

茂太郎は船の舷上に立って、左の小腋には例の般若の面をかかえたまま、呆然として爪を噛んで陸地の方を見つめたままです。

「なあーんだ、七兵衛おやじが来ていないや」

これが着いたその夜の事です。夜のことでも、漁村と漁船には点々たる火影が見えないということとはなかったのですが、それでも陸地一帯は茫々模糊たる夜の色に包まれている間を、

茂太郎は淋しげに見渡して、

「七兵衛おやじが、こつちへ駈けて来るのが、船の上ではよく見えたんだがなあ」

茂太郎としては、珍しく、ほとんど泣き出しそうな声をして、
たらずイみきつて動こうともしません。

なるほど、そう言えばそうです。海上遠くメインマストの上で、茂太郎は、「七兵衛おやじが、走るわ、走るわ」とわめき立てたことがありました。その時の調子と、今日のしよげ方とを比べて見ると、それではあの時のほほばしら、檣でたらめの上の出鱈目の即興ではなくて、真に、茂太郎の眼では、磐城平から海岸通りを北走する七兵衛の姿を認めたのか。

そんなはずはあるまい。あの時は、陸地を避けて、船はあんなに遠く海洋の沖中を走っていたのだ。四顧茫々として、遠眼

鏡を以てすら陸地がいずれにあるかさえわからなかつたその中で、茂太郎が仙台領を走る七兵衛の姿を認め得られるはずはないのです。

しかし、あれが即興の出鱈目であるとすれば、ここへ来て、こんなに失望する理由もまた消滅しなければならぬのではありませんか。

ましてこの夜の事です。は、し、けで迎えに来ないからといって、この見渡す海岸のいずれの地点にかその人が待兼ねていないとも限らないのに、以前の即興があまりに眩耀げんようてき的であつただけに、ここへ来ての失望が独断に過ぎるのは、多少気の毒と滑稽を感じしめないわけにはゆかないのです。

今や茂太郎はパツタリと、出鱈目も歌わず、即興も叫ばぬ人になつてしまいました。もつと尤も駒井としては、船がかり中は別し

て静肅を保つようと、特に入港の前に申し渡してあるのですが、それを、すんなりと守り得られる茂太郎ではないはずで、船が着く時は、彼の即興がまたネジを戻すものとばかり思われていたのに、ひっそりとして、全くそのことがありません。

「今晚は茂ちゃんが、バカにおとなしいではありませんか」

お松が言うのと、駒井が、

「珍しくあの子の上に船長の威令が行われた」

と言つて微笑^{ほほえ}みはしたけれども、その実はなんとなく、淋しい思いに襲われていることは、お松も同じことです。

噪^{さわ}ぐべき人は噪いだ方がよろしい。歌うべき人は歌った方がよろしい。船長の威令を無視してまでも、あの子はあの子として出鱈目を歌った方がよろしい。むしろ歌ってもらいたいものだというような物足らなさが、駒井の胸にも、お松の胸にも、ひ

としく湧き上ることを如何いかんとも致しかねました。

ですけれども、茂太郎の歌は、決して聞えませんでした。

「よく寝れば、寝るとて親は子を思い」——お松は、そういったような一種の親心同様な思いに駆かられて——船長室を立ち出で、

「茂ちやあーん」

と呼んでみようとしたが、おとなしくやすんでいるものを起さないがよいとも思案しました。なまじい呼びかけて、またあの子の即興心をまで呼びさまし、はしやぎ出されたのではたまらない。

港へ入ったという安心で、あの子もぐつつすり寝込んでいるだろう、明日まではそうして置くがよいと、お松は思案して、自分の部屋へ引返しましたけれど、茂太郎の歌わないことが、いよ

いよ我が身を滅入^{めい}らせるといふような思いをしないではありません。

こうして、入船の当夜は、特に静肅なるべき船長の思慮と命令がよく行われて、物音らしい物音、人声らしい人声は船内から一つも外へ洩^もれないで、ほとんど無事にその夜が明け放れんとする時分に、船長の思慮と威令とが、遺憾なく蹂躪^{じゅうりん}された一大衝動を捲き起したというのは、本意^{ほんい}ないことであります。

さては茂公、いよいよまたネジが戻ったかな、七兵衛の姿をでもいずれからか発見して、急にはしやぎ出したのか、そうではない。

噪^{さわ}ぐべく、歌うべき当人の株を奪つて、その騒音は、意外といえは意外だが、さもそうありそうな船内の一角から起りました。例のマドロスが、突拍子もない大きな調子で、だみ声をあげたかと思うと、ガムシヤラに歌い出すと共に、足踏み荒くダ

ンスをはじめ出したことです。

そのけたたましい物音に、一船内がことごとく暁の夢を破られてしまいました。

夢を破られたもののすべてが、さてはマドロスめ——と、苦々しい思いをしましたけれど、マドロス是一向その辺の遠慮心を喪失してしまつたものと見え、濁声だみごえはいよいよ濁り、調子はいよいよ割れ出し、ダンスの足踏みは盛んに荒れ出したあばものであるります。

「奴、また飲みやがつたな」

船頭二三が齒齧くはぐはみをしました。事実、マドロスとても、その後はかなり神妙にし、船中でも相当に働き、役にたつ時は羅針盤同様の必要な役目をさえ成し遂げて、ともかく無事——金椎ちゅうぼうの厨房から饅頭まんじゅうを取つて来て、ひそかに兵部の娘に食わせたり、

食つたりしたなどは別として——にこれまで来たのに、そうして、今夜一晩は特に静肅にという船長の命令もようやく吞込んでいたのに、九十里のところで物の見事にぶちこわしてしまつたということとは——それは必ずしも御当人に、航海中たくわえられた反抗心があつてそうさせたのではない。あのだみ声の呂律ろれつでも、足踏みのしどろもどろでも分る通り、酒という魔物が手伝つて、あれをああさせているのだ。

それにしても、誰が酒を飲ませた。船中では一切飲ませないことにしてあつたはず——飲みたくも、飲ませたくも、酔わせるだけの分量は貯えてなかつたはずなのに。

ははあ、では、あいつ待ちきれなくなつて、早くもこつそりからだと小船に乗るかなんぞして、岸へ抜けがけをして、あのアルコール分を身体の中へ仕込んで来たのだな、そうと解釈するほかは

ない。

そうだ、そうしてアルコール分をしつくりと体内に仕込んで帰って、いい気持で寢床にもぐり込むはずのところを、その仕込んだ分量が超過したものだから、ついにあの呂律となり、あのステップとなつてしまったのだ。

ちえッ——世話の焼けた奴だなあ。

まず、最も近い室の房州出の船頭の二人が眉をひそめると、同様の思いが、お松にも、駒井の室へも響かないということはありません。

しかし、マドロスにこうもアルコール分が廻った場合に、この船内では遺憾ながら、それを制裁する実力を持ったものがない人もありませんでした。

ウスノロはウスノロだが、体格は図抜けていて馬鹿力がある

し——田山白雲でもなければこれに対抗するものはないのです。今のところでは、手をつけるより、手をつけないで自然の鎮静を待つよりほかはないと船頭はじめ眉をひそめて、苦々しく思っているのだが、あいにくそのアルコール分はいよいよ沸騰するだけで、いつ鎮静の時を得るか分らないもののようです。

船長室へ駆けつけたお松が、駒井の迷惑と共鳴して、

「こつそりとお酒を飲み、^{おか}陸へ上ったのでございましょう」

「困ったものだ」

駒井甚三郎も真に当惑の色であります。

そのうちに、たまり兼ねたか船頭が取鎮めかたがたなだめに行つたもののようです。ところがその結果はかえつて石灰の中に水を入れたような結果になり——^{けんけんごう}喧々囂々、組んずほぐれつ、

收拾すべからざる大乱闘が捲き起されてしまったことは、船長

室まで手に取るように聞えて来ました。

「まあ、なだめに行つた船頭さんたちを相手に、また乱暴をはじめたようです、どう致しましょう」

「困つたことだ」

駒井は苦り切っている。お松はいても立つてもいられない心持。あちらの船室内の騒動はいよいよ驚天動地。

「ほんとうに、田山先生がいらつしやるといいのですが……」

お松としても、時艱^{かん}にして英雄を思うの情に堪えられないが、徒らに英雄を想うのみで、この際、自分としてはなんらの施すべき策も手段ありません。

捨てて置けば、幾つかの人命にも関するほどになりはしないか——この上は、是非に及ばない、自分が出動して取りさばくよりほかはないと、駒井も思案して立ち上りました。お松もお

どおどしてその後に従い、乱闘の方に進んで行きましたが、お松の心では、この殿様を、あんなところへお出し申したくはない、こんなことにまでいちいち殿様の御足労を煩わさねばならないかと、痛々しさに堪えられませんでした。

いかに酔っていても、船長の命令に服するだけの常識は残っているだろうが、もし、それをきかない時は、この殿様が御自身手を下して、あんな奴を御成敗——といつても、人間はガラシがないにはないけれども、船としてはいま無くてならない人になつてゐるあのマドロス、殿様もあれを失いたくはなくていらつしやるだろうから、思い切つた御成敗をなさるわけにはゆかない、そうすると、あれが増長する。

お松は、どうかして、この殿様をあの場合へやりたくない。で、きることなら自分が出向いて取締りをつけてやりたい。しかし、

ああなつては気がいよりも怖いのだから、わたしの力なんぞではどうすることもしようがない。

ああ、困ったことだ。

お松は、じりじりとじれる足どりで、駒井に従いながら、実はその行手に立ちふさがりたい心持です。

こうして、一步一步乱闘の室に近くなつた時分に、急にそのけたたましい喧けんそう噪がいくぶん緩和されたような気分になつたのは意外でした。それでも、たしかにそうです。獣の狂うような渦巻が急にいくらか和やわらかになつてきたようだと感じた途端――女の声で、

「マドロスさん、いいかげんになさい、そんな乱暴をしないで、わたしのところへ来てお休みなさい、まだ夜が明けたわけじゃないから、もう一休み、ゆつくりと寝ましようよ、ね、マドロ

スさん……」

それは、兵部の娘の声であります。この女性の声が乱闘の中へ流れ込んだものですから、それで獣の噛かみ合いのような渦巻がいくぶん緩和されたものでありました。

それを聞くと、甲板の上で、駒井甚三郎とお松とが、言い合わせたように足を止めていると、マドロスの声で、

「お嬢さんと、寝る、寝る、よろしい、寝る、寝る、よろしい、チーカロンドン、ツアン、バツカロンドン、ツアン」

急に御機嫌が直ったマドロスが足踏みおかしく、よろよろとよろけた体を、兵部の娘に持たせている様子が手にとるようです。

もえさんと

寝る、寝る

よろしい

チーカロンドン

バツカロンドン

ツアン

まさしく茂太郎の株を、この不埒ふらちなるマドロスめが奪つて、
そうして、兵部の娘にあやされながら、その寢室の方へと転げ
込んで行く様子が、いよいよ手にとるようです。やがて一切の
喧囂けんごうが拭うたように消え去つてしまいました。

甲板の或る一点に、申し合わせたように足を止めた駒井甚三
郎とお松は、そこで面かおを見合わせました。

けれども、駒井の面にも、お松の面にも、まあこれで安心と
いう快い色は見えませんでした。そうして二人とも、なんとなく
興ざめ面で、無言にとつて返さなければなりません。

お松は、ここでちよつと駒井に取りなす言葉のきつかけを失つた思ひです。事実、この際、もゆるさんが、あの人を自分の寢室に引取つてくれたから、それでようござんしたとも、いけませんでしたとも、お松としては言えなかつたものですから、そのまま暫く無言で、船長室へ引返す駒井甚三郎のあとに従ひ、無言でたじたと引返すよりほかはありませんでした。

そうして、お松は親柱のところへ来ると、また、思わずギョツとして立ちすくんでしまい、

「まア——」

ほぼしち
檣柱の下の俵を積んだ上に、人が一人、黙つて坐り込んでゐる。

「茂ちゃんじゃないの」

「あい」

「まア、お前——」

お松は、呆氣あつけにとられました。出鱈目でたらめのうちの出鱈目、饒舌じょうぜつのうちの饒舌である清澄の茂太郎が、ほとんど化石の彫刻みたように、チョコンとしてその俵の上にのせられたもののように坐っていたからです。

熟睡していた人なら知らぬこと、今までの騒ぎを知っているが——一言も、この子の伴奏がなかったことは不思議中の不思議。それを今まで不思議とも感じなかったほど、自分たちは何かに制せられていたことを、いま気がついて見ると、やや明け方の光で見たこの少年の面色かおいろが、いやに沈み切っていることに、またなんとなく胸を打たれないわけにはゆきません。

「いったい、お前、そこに何していたの、どうしたんです」

「あたいは、七兵衛おやじを見つつけ出そうとして、ここに一晚

中ながめていたの」

「一晚中？」

「ところが、七兵衛おやじの姿が見えません、何をおいても見えなければならぬはずの七兵衛おやじが、来ていないことを見ると……」

「だつてお前、この闇の中で……」

と言つたが、お松はこの非凡な少年が、暗い中でもけつこう見える眼を持つていたのだということに気がつきました。

そうして、この少年は、夜目遠目のきく非凡な眼を以て、夜もすがらここに立番をして、一心不乱に七兵衛おじさんの来ることを期待していたのに、それが酬^{むく}いられないことによつて、この痛心の面^{おもて}があり、その一心不乱のために、さしも喧囂を極めたマドロス騒動的一幕にも、振向かなかつたものに相違ない。

それほどまでに、七兵衛おじさんというものの来ることと、来ないことに関心を置いているこの少年。それは、多少とも縁ある人の去就に関心を持つことは人情には相違ないが、この少年が、これほどまで七兵衛おじさんを待兼ねている、それを思うと、自分の方がもう一層、それをなつかしがらなければならぬ義理でもあった——とお松は、ここで七兵衛の安否について、この少年の懸念けねんを頒わかつ心になつてみると、この少年のなんだか沈んだ面色を見るにつけて、なんとなし、また一種の不安がこみ上げてくるのを如何いかんともすることができませんでした。

「ここへおつきになることが遅いなら遅いでよいが、何かまた道中に変事があつたのでは……あのおじさんに限つて、旅に慣れているから、万々間違ひはないと思うけれども……」

こう言っているうちに、そのなんとなしの不安が、いよいよ

募^つつてくるものですから、茂太郎の傍を立去りかねているうちに、駒井は、もう一人で自分の部屋へ帰ってしまいました。といつて、それ以上どうすることもできないお松は、茂太郎をなだめすかすほかの術^{すべ}を知りません。

「茂ちゃん、そう取越し苦勞をしたって仕方ありません、いつまで待っていたって、来る時でなけりや来やしませんから、休みましようよ、まだ明るくなるまでには充分時間がありますから、下へ行つてゆつくり休みましよう。わたしも、なんだか、まだ寝不足だから、もう少し休ませてもらいましよう」

マドロスが兵部の娘につれられたのとは期せずして同工異曲に、お松は、茂太郎を引っばるようになして自分の船室へ連れて行つてしまいました。

そこで、船の上下こそ、今度は全く静かなものになりました。

茂太郎も、存外素直^{すなお}にお松の部屋へ来て、その一隅の寢床へもぐり込むと、早くもすやすやと寢息が聞えます。

騒擾事件^{そうじょうじけん}の発頭^{はつとう}たるマドロスも、鼻唄^{びうた}の声さえ、鼾^{いびき}の声さえ、洩れないほどに納まり込んでしまっていると見るよりほかはない。明朝は、朝寝、昼寝おかまいなしというお触れですから、皆さんが安心^{あんしん}しきつて羽目^{はめ}を外^{はず}して寢込んだものです。

ひとり、駒井甚三郎だけが、船長室にカンカンと明りをともして、その光に熱心な面を射させて、海図であろうか、航海誌であろうか、眼をさらしていて寢ようとはしないだけのものです——そのほかに、眠っているのか、醒^さめているのか、寂然不動^{ていぶつ}の体^{てい}を守つて艙^{とも}の方に坐っているのがムク犬であります。

やがて、船長室のカンカンとした燈火も消えました。これですべての船のうちの人という人は眠りに就いたことの確定を見すま

したかのように、今まで寂然不動のムクが、悠然として立ち上り、のそのそとして甲板に歩み出しました。これからが、おれの職分の世界だと言わぬばかりに――

十

ノソリノソリと歩み出したムク犬は、左舷さげんの舟べりに立つて、海の上を見渡しています。

この静寂な海港の夜を破るほどの物音ではないけれど、左側の船腹のところで、たしかに断続的に物音が立っているのです。ミシリといったり、カタリといったり……それが鼠でも、ミサゴでもない証拠には、極めて軽いながら人の息づかいと、囁ささやきとが聞えるのです。

ですから、当然、ムク犬として、それに聞き耳を立て、注意深い眼を注ぐことはその職責であります。ただ軽々しく吠えないのは、この犬として当然の思慮で、その何たるを見極めて後にこそ、吠ゆべきは吠え、防ぐべきは防ぐことを心得ているからです。

ムクは両足を揃えて、半ばのぞき込むような形で、船腹を見おろしたまま、あえて動きませんでした。

たしかに、船腹のブリッジドアを開いて、一人の人体が出て来ました。それは大男ですけれども、身軽に船の腹から這い出ましたが、這い出したその下には、いつのまにかボートが櫓ろを備えてつり下ろされていました。大男は存外身軽に、ひらりとそのボートへ乗り移ると、続いて同じところのドアから、また一つの瘤こぶが現われたものです。やっぱり、人影です。人影ではあ

るけれども、以前のとは違いました。小柄な、きゃしゃな、女の姿であります。

この女の姿が半ば船腹からはみ出されると、それを待っていたとばかり、取り上げて引き抜くように無雑作^{むぞうさ}に抱きおろしたのは、その大男の手を以てして、同じボートの中でありました。ここで、二人は完全に、一つのボートの中におろされると、ホツと一息ついて親船を見返りがちに、何か二言三言ささやいたにちがいありませんが——ムクには聞き取れません。

そうすると間もなく、大男の手はオールにかかったのですが、その以前に、もう二人のほかにも、何か若干の手荷物を取りまとめられて、ボートの中に運ばれていたのです。

さば こうしてボートは大男の、図体に似合わぬ熟練輕妙なオール捌きによつて、ほとんど水音を立てず、鏡の上を^{すべ}るように、

すーつと月ノ浦の港の上を迂り出したものです。

その前後、誰ひとり見ているものはなく、また誰をしも驚きさます物音をも立てず、すつと抜け出した手際だけは、たしかに鮮やかなものだと呼すべき価値はあつたのでしよう。

それを最初から見ていたのはムク犬だけでした。ところで、この豪胆にして且つ敏感なるムク犬が、ついに吠えることをしませんでした。

月ノ浦から小鯛島の間を、右のボートが夢のように迂つて行く。それを茫然として見送つていたムク犬——出て行くボートの者にも、留まつている親船の人に向つても、あえて一吠えの挨拶をも警戒をも試みないところを以て見ると、さしものムクも、もうヤキが廻つたのか、そうでなければ、出て行くものは追わざるがよし、留まる者をして安らかに眠らしめよ、という

厚意ある諒解をもつての挙動と見るよりほかはありますまい。

今朝に限つての朝寝昼寝を充分に保証された船の人も、日が三竿さんかんにもなつて、相当の時が来れば、そう素晴らしい気持で内職の船を漕いでばかりはいられないと見えて、一人、二人ずつ面かおが揃つてくると、早くも、

「おや、ボートが一ぱい足りねえ——おや、船窓があいている、マドロスが——もゆるさんが——まあ、荷物が——」

二人の姿が全く親船の中から見えないうです。二人ともに、手廻りの物が程よく取りまとめられて持ち出された形跡も充分ですから、合意の上で逃げたものと見るよりほかはありません。どちらがどうそそのかしたか、そのことはわからないが、いずれにしても、相当の合意をもつて計画的に馳落かけおちを遂げてしまつたということは、疑う余地がありません。

呆れ返るもの——罵る者——地団駄を踏む者——直ぐに追いかけて、あん畜生、とつ掴まえて今度こそはと、マドロスを憎むこと骨髓に徹する者もある。もゆるさんももゆるさんだ、何だつてあんな毛唐にだまされて、いつたい、あのウスノロのど

こがいいんだ——と齒噛みをする者もある。

お松としては、言句も出ないほど浅ましい感に堪えなかつたので、傍えにいたムクをつかまえて、こんなことを言いかけてみました。

「ムク、お前が昨夜、あの二人の逃げ出すのを、気がつかなくつたというのがおかしいわね、あの二人は当然ここを出て行くべき人なんだから、それでお前が知つていても止めなかつたの——ここにゐるよりも、出て行く方が二人のためにも、船のためにもいいと思つたから、それでお前が見逃したの、どちらだか、わ

たしにはわからない。お前がいながら、二人を無事に逃がした
氣持が、わたしにはわからない」

こういつてムクに言いかけたが、その傍にいた金椎キンツイが、一種
異様な表情を試むるだけで一言も吐かないのは、體質上是非も
ないが、兵部の娘とは切つても切れない馴染なじみをな持つてゐるはず
の清澄の茂太郎が、ここへも姿を現わさないし、ウンだとも、つ
ぶれたとも言わないのも異例の一つです。

と思ひやる途端に、親柱の上高く人の声がする、

「ああ田山先生が来る——七兵衛おやじは来ないけれども、田
山白雲先生がやつて来る」

もう、あんなところに登っている。

どこの方角を、どうながめているのか知らないが——遠く眼
を空と山との間に注いで、そうして、人が来る来ると呼んでい

る。果してその方角から来る人があるならば、それは雲際から降りて来る人でなければならぬ。

甲板に立つ人が幾つの眼を集めて見たからとて、こちらへ来る人の影は——といううちに、土地の海女あまや漁師は別として、田山らしい、白雲らしい人の影は、いずれにも見えはしない、茂公の出鱈目がはじまった、これでまあ、天気も変らないで済む——といったような、一種の気休めを与えるだけの効はありました。

十一

茂太郎の予報から約一刻ひとときも経て、果して田山白雲しやううんの生しやうのものが、月ノ浦の港の浜辺に現われて、船をめがけて大きな声をあ

げました。

心得て、ボートが迎えに来る。親船について、白雲は駒井の案内で、なにもかも目新しく、物珍しい目で船の内外を見廻しながら、船長室に伴われて、そこで二人の会談がはじまりました。

介添かいぞえには、お松が時々出てあしらう。

「駒井氏、せっかくここまで来たからには、どうして、目と鼻の間の石巻へ船をつけないですか——月ノ浦なんて、こんな辺鄙へんぴなところへわざわざも、やったのは、どういう見ですか」

「左様、この月ノ浦を選んでこの船をつけたのには相当の理由があるのです。今こそ、石巻や塩釜に比べて比較にならない月ノ浦だが、歴史上の由来は深いものがある。昔、伊達政宗が、はせくら支倉六右衛門をローマへ使者として遣つかわす時分に、船出の港と

して選んだのがこの月ノ浦だ」

「なるほど、伊達政宗がローマへ使を遣^やつた時の船が、ここから出たのですか」

「そうです、それが最初から我々の頭にあるものですから、石巻とは言い条、寧ろ^{むし}ここを我々の投錨^{とうびようち}地——次第によつては当然、第二の根拠地と想像して、予定してやつて来たのですが、来て見ると案外でした」

「どう案外でした」

「どうも、政宗があれだけの船おろしをしたのは、この浦ではないようです」

「どうしてそれがわかります」

「あの時は——政宗が拵^{こしら}えた船は、幕府からも船大工十人の補助を受けてやった仕事なのですが、長さが十八間、幅が五間半、

高さが十四尺、乗組は南蛮人を合わせて百八十人という多勢ですが、どうもこの地へ来て見ると、ここでそれだけの造船がやれそうには思われないのだ」

「なるほど」

「伊達政宗という人は、船を造ることにはかなり興味を持つていた男だが、その事業や、野心の程度などについては、多くの疑問が残されている、月ノ浦の地形を見て、いよいよその問題が大きくなってきたところだ」

「そうだろう、独眼竜、あいつ、なかなか食えない奴だからな」と田山白雲が、伊達政宗を友達扱いでもあるように言い放ちますと、駒井甚三郎が、

「そうです、政宗はなかなか食えない男です、邪く法国を迷わすなんぞと、詩にまでうたつていながら、その事実、宣教師を保

護し、切支丹きりしたんを信じていたのですな。信じていないまでも、決

してローマの法王なる者に悪意は持つていなかったのです。或いは切支丹を食いものにした男かも知れません」

「そうでしょうとも。風向きによつては、秀吉や家康をさえ食い兼ねない男でしたから、切支丹を食うぐらいは朝飯前でしよう」

「それは少し比較が違ふ、秀吉や家康は、或いは食いものになるかも知れないが、切支丹は全然食いものにならん。これを迫害しないで、利用しようとした点に、政宗の頭脳あたまのよさを認められない限りもない。あの時代、秀吉を除いて、本当に海外に志のあつた豪傑は、まず政宗でしようかな——近世の奇物、林子平りんしへいなんというのも、たしかに政宗の系統を引いている。他の土地からは出ない人物だ」

というような人物論からはじまつて、白雲もまた、古永徳こえいとくに惹ひかされて、こちらを志した行程から、仙台城下の所見を語り出し、結局——このはからざる奇遇を喜ぶと共に、この奇遇の結びの神たる七兵衛の身の上に、話が落ちて行かないはずはありません。

実は、もつと早く、二人ここで相見た最初の時に、引合せの老爺おやじのことから緒いとぐちが開かれなければならない順序なのですが、船のことが先になつて、次に人物論に花が咲いたものですから、勢い七兵衛おやじのことは、最後の時に繰りのべられてしまいました。

「名取川で、蛇籠じやかごを作つていた怪しい老爺——あれには全く度胆を抜かれましたよ、あなたの御家来に、あんな怪物がいようとは思ひも及びませんでした、あれには怖れました」

田山白雲が全く恐れ入ったものののようにこう言うと、それを引受けたのは駒井甚三郎ではなく、傍らに介添役のお松でありました。

「そのおじさんは、それからどうなさいました」

「いや、おつつけここへ来るには来るはずなのだが、一つ土産を持って来ると言つたが、そのみやげたるや」

ここまで来た時に、あわただしくこの部屋の前に立つたのが、清澄の茂太郎でありました。

「田山先生——」

「やあ、茂坊か」

「入つてもようござんすか」

「お入りなさい」

と許諾を与えたのは、駒井甚三郎でした。

そこで室内に走り込んだ清澄の茂太郎が、まず田山先生に向つて問いかけたのは、次の言葉であります。

「田山先生、七兵衛おやじはどうしたの？」

「今もそれを話していたところだ、おっつけこれへ、おみやげ持つてやつて来る」

「そうか知ら——あたいは、どうも、あの七兵衛おやじはもう、ここへ来られないように思われてならない」

「どうして？」

それを聞き咎めたのは白雲でしたが、さつと面かおの色を失つたのはお松でした。

「どうしてつて……」

茂太郎は、むずかるような声で、

「あたいはどうも、七兵衛おやじが怪我をしたように思われて

ならない」

「怪我！」

「怪我ならいいが、もしかして、縛られてしまやしないかと……」

「何を言うのです、茂ちゃん」

お松がたまりかねてたしなめると、茂太郎は、

「どうしても、あの七兵衛おやじの身の上に、変ったことが起つたに違いない」

「そんなことが、わかるものですか」

「だって、あたいは、もう二日というものの、あのおやじが、つかまって、縛られて牢屋へ入れられたところを夢に見た」

「ほんとに、いやなことばかり、茂ちゃん——何も悪いことをしない人が、縛られたり、牢屋へ入れられたりなんかするものですか」

「そうかしら、でも……」

「それに、白雲先生と、つい一昨日、おととい お話をしていたと申します、いやなことを言うものではありません」

「そうか知ら……」

その時、田山白雲が、茂太郎の面を睨にらみつけるように見詰めて、そのくせ、心は玉蕉女史の家の離れのあの一夜のこと——
おうぎし 王羲之の秘本を土産に持つて来ると誓った、夢のような、幻のような場面に集中しないわけにはゆきません。

そうして、その夜の、あのおやじの怪挙動を、逐一ちくいち ここで話したがよいか、もう暫く話さないでおいた方がよいのではないか——と、猶予し、且つ思案せしめられました。

問題の七兵衛は、その日は観瀾亭の床下に昼寝をしております。

七兵衛が昼寝をするということは、盗人の昼寝という本文に合致することだから、あえて異とするに足りないが、特にこの月見御殿の観瀾亭の床下を選んだというのは、どういう了見であるか。この床下の上には、田山白雲の憧れの^ま的となつてゐる古永徳か、山樂かが、^{けんらん}絢爛として桃山の豪華を誇つてゐるのですが、七兵衛にとつては、特にこの床下が離れられないほどの魅力となるべき理由はなんにも無いはずです。七兵衛としては、別段、永徳でなければならぬという見識も主張もないのですから、ところもあるうのに、この床下に昼寝の巢を選んだのは、偶然か、然らずんば何か^{しか}商売上特別の便宜がなければなりません

まい。

観瀾亭、一名月見御殿の床下——御殿の床下なんという名目
が七兵衛の芝居ごころを刺戟して、ちよつと拈^{ひね}つてここへ寝て
みたい心持にでもなったのか（明治大正の頃、華族芳川伯爵家の
令嬢が、その自動車の運転手と情死する前に泊つた宿屋へ、わ
ざわざ出かけて行つて、それと同じ室へ一泊して気分を味わつ
た人間もある）そうでなければここはこれ、太閤様名残り^{なご}の伏
見桃山御殿のお間をそつくり移したということだから、大先輩
の石川五右衛門氏が忍び込んだ手沢^{しゅたく}のあともなつかしいなんぞ
の、そぞろ心から、ついこの床下を借用してみる氣になったな
んども、それも、あんまりコジツケに近い。第一、七兵衛は水
呑百姓を以て自ら任じている素朴な男ですから、御殿の床下で、
「ああら怪しやな」なんぞと騒がれてみたがつたり、また大先輩

の石川五右衛門氏のように、衣冠束帯の大百日で、六法をきつてみようというような華美な芝居氣のない男ですから、この床下を選んだことにしてからが、一方は牡鹿半島方面の船の到着が氣にかかり、一方はまだ仙台城下に無くもがなの心がかかりがあるから、ちようどその中間の、ここ松島の觀瀾亭あたりを選ぶのが、地の利よりして最も適度と考えただけのものでしよう。

地の利もいいし、場所柄も結構らしい。第一、床下とはいえ、海氣がよく通つて、陰深な氣分がしないし、床の間が相当高く、頭がつかえないし、そこへ菰とむしろを敷きこんで、合羽を頭からスッポリと被り、軽い寢息で、すっかり寢込んでいるが、その枕許と、横ッ腹の方に、異形の物体が二つ三つ陳列してある。陳列とはいえ、そこへ投げ出して、ふわりと風呂敷を被せただけですから、中の物体はよくわからないが、形だけは

風呂敷を抜いた角々で相当に受取れる。それによつて恰好を案ずると、どうやら、古えの武将が着た兜かぶとのような形をしています。別に長い箱入りの軸物のようなものが二本——そんなのを枕許と横ッ腹に抱えて、七兵衛はすやすやと昼寝をしているのです。

七兵衛の寢息は、いかなる場合にもほんとうに軽いものです。いかに熟睡の時といえども、いびきというものを聞かせたことはなく、障子一重にいても、寢息そのものを感じしめたことはない。身も軽いけれども、天性、息も軽いのです。形そのものさえ見せなければ、他のなんらの気配によつても、自己の存在を、目と鼻の先の人にさえ知られるということのないように——すべてが出来ておりました。

そこで、誰に憚はばかることなく、昼寝の甘睡を貪むさばっていること幾

時——自分の存在を知らしめないだけの天地の上に、他の者の来襲に遭つては、針を落したほどの音にも眠りを醒すさまの機能を授かっている。こうして甘睡を貪っていたところを、思いがけなく、息もつかせずこの梁上床下の天才を襲いかけた不敵者がありました。しゅうーしゅうーと鳴りを立てて、七兵衛が甘睡の枕許に、鼠花火のように襲いかかり、枕許の風呂敷を被せた兜様のものにカツンと当つて七兵衛の面を横倒しに撫でおろしたものがあつたのには、さすがの七兵衛が夢を破られて、一時は全く周章狼狽しました。

何だ、もとより人間のお手入れではないし、そうかといって、鼠やいたちの類ではない。横倒しに倒れかかつて自分の面を上から撫でおろした一件の物を、無性むしようにかなぐりとつて見ると、それは一筋の弓の矢でした。

「あ、矢だ！」

縁の下のいずれかの隙間から、この矢が流れ込んで、自分の枕許を脅おびやかしたのだ。我ながら——人獣に備える心は不断に怠つたとは言えないが、まだ、ここで弓矢に覷ねらわれようとは、さすがの七兵衛も予想していなかったことです。

その矢を握りしめて、半分起き直つて見ると、七兵衛の頭を掠かすめたのは、この一筋の矢が——果して、自分のここにひそんでいることを認めて来り脅したのか、或いは何かのはずみの流れ矢か、その二つのうちの一つでなければならぬ。後のものならばまず安心だが——前のであつてみるとこれはたまらない。

七兵衛は、素早く身づくろいをせざるを得ませんでした。

ともかくも自分の身だけを、いま寝ていたところよりは、ずつと一段の奥、海に近い方の親柱の一本を小楯にとつて、身を伏

せたまま、二の矢の受けつぎを、じつと見つめて息をこらした
ものです。

まもなく外で人声がします——

「どこへそれた——」

「その植込の笠松の枝ではないか」

「塀の下を見い」

「燈籠とうろうの蔭——」

「雨落の中——」

「樋といの間——」

「いずれにも見えませぬ」

「では」

「このお床下へ飛び込んだものに相違ござりますまい」

「なにさま」

「お床下だ」

二人のさむらいが来て、雨落の下でしきりに評定をはじめたが、もとより、七兵衛の耳へ手に取るように入る。

まず安心——それ矢だ、どこかこの近隣で弓を稽古していたさむらいの矢が一筋それてこちらへ飛び込んで来たまでのことだ。あえてこの七兵衛のあることを知って、試みに射込んだ探りの矢でなかったことは安心だが、外の評定はこれで終わったのではない。もとより二人のさむらいは、もう縁の下だと諦めて立去ってしまったのでもない。まだ同じところに立って評定を続けている。

「ちと困ったことだ」

「捨て置きましょう」

「いや、捨て置くわけにはならん、苟いやくも藩の御殿の床下へ矢を

射込んで、それをそのままにして置いては、後日の言いわけが相立たぬ」

「それもそうでござりますな」

「大儀ながら番人に申し入れて、よく床下を探させ下さい」

「心得ました」

この問答を聞いて、再び七兵衛が不安に襲われました。

なるほど、あやまって射込んだ矢一筋ではあるが、御殿の床下へ入ったものを、そのままにして置けない、尤ももつとな言い分だ。

だが、そうしてみると、当然、ここへもぐり込んで、あくまで矢を探しに来る人の数がある。矢一筋よりも、見つかつてならな
いものが現にこの通り床下にあるのだ。それをどうしよう、七
兵衛は本当に焦眉しょうびの急きゅうの思いをしました。

自分一身が遁のがれるだけは何の苦もないことだが、枕許のあの

一件、あの幾点の品、あれをこの際、土を掘って埋めるわけにはいかない、火をつけて焼くわけにもいかない、当然やがて寸分の後、ここへもぐり込む人の身が、一筋の矢よりも、もつとずっと大きな獲物を発見するにきまつている……

はや、三方からメリメリと矢探しの手がかかつて来た。黒い人影が、むくむくと湧いて来る。七兵衛は身をもつて遁れるよりほかは、この際、術すべのなきことを覚りました。

十三

それから後、果して、一筋の矢より、ずっと大きな獲物を発見した諸士たちの驚愕は非常なものでありました。大がかりで御殿の上へ持ち出して見ると、それは金光の古色を帯びた名将

の兜かぶとであり、蒔絵まきえの箱に納まった軸物であり、錦の袋に入れた太刀たちであり——一筋のそれ矢が射出した獲物としては拔群なる手柄であります。

ただ拔群なる手柄だけでありさえすれば何のことはないのですが、実は、これらの物体は皆、観瀾亭の床下にあるべき品ではなく、五十四郡の伊達家の宝蔵の奥深く存在していなければならぬはずの物体のみでありました。

最初の諸士を中心として、松島のすべて、塩釜方面と瑞巖寺ずいがんじの主なる面々が、みんなこの観瀾亭に集まって、縁の下すゝの獲物の検分に移ると、舌を捲かないものはありません。

これは検分すべきものでなくして、拝観すべきものである。拝観も容易にすれば眼のつぶれるべきほどの「御家の重宝」ということに一致して、とにかく、無下むげなるものの口の端はにもの

ぼらない先に、この宝物の御動座がなければならぬ。

釣台にのせられて、これが非常な警護をもつて、仙台より城内へ運び去られたのは久しい後のことではありませんでした。しかし、この大きな獲物の内容に就いては秘密に附されただけに、松島から青葉城下へかけて、さまざまの下馬評と、見て来たような当て推量が、事実らしく伝えられたのは是非ありません。

この宝物こそ——伊達家秘宝の一つ、三宝荒神の前立まえだてのある上杉謙信公の兜だったというものもあります。いやいや楠木正成卿の兜だというものもあります。そうではない、伊達の大御先祖の軍配であつたという者もあります。いやいや名代の武蔵鎧むさしあぶみに紫手綱たづなでござりました、という者もあります。長光ながみつの太刀だというものもあれば、弁慶の薙刀なぎなただと伝える者もあります。軸

物は世尊寺家の塩釜日記だとか、古永徳の扇面であつたとか、
ついには王羲之の孝経であつたというような説が、紛々として
起つたけれど、事実、誰も現品を見たものはない。縁の下から
出て、一路御宝蔵へ逆戻り、いわば闇から出て、闇へ消えたよ
うなものですから、確証あつてこの品と言ひ切るものは一人も
なかつたのです。

御家の宝物の品調べは、そんなようなわけで、何の根拠もな
い無責任な下馬評のはやるに任せているが、そのままで済ま
されないのは、この大胆不敵なる曲者くせものの詮議であります。観瀾亭
を中心として続々集まつた諸士、顔役も、さすがにこの点は抜
かりがありませんでした。

一方、御宝物が嚴重なる守護をもつて送り返される前後より、
たちどころに非常線が張られたのは申すまでもありません。

「まだ決して遠くは逃げていない」

と、炭部屋もどきに、縁の下の藁わらの寢床に手を触れてみた一人の諸士が言う。

「さりげないことにして網を張つていれば、戻つて来る」

そこを附込んで、虚をもつて実を討たんと策を立てるものもある。

それに応じてまた一方、いずれにしても、この非常線の非常なることを知つて、それに処することに抜かりのあるべき七兵衛でないことはわかつているが、事が全く予期しなかつた流れ矢一筋から来ているだけに、存外、転身の自由が利きかないおそれがあります。

でも、その日の暮れるまでは、犯人がつかまつたというなんらの報道もなく、仙台城下の内外の隠密おんみつが、密々のうちにいよ

いよ濃度を加えることほど、彼の身元が心もとないと言わなければなりません。

十四

こういう空気の真只中へ、駒井甚三郎がおともを一人連れただけで、仙台城下へ乗込んで来て、別段咎めだてを受けなかつたということは、不思議に似て不思議ではありません。

それは、駒井とこの土地とは、古い馴染があるからのこと、その由緒を語れば、今より約十年以前、この仙台藩で開成丸という大きな船を造った時にはじまるのです。

その時に、江戸から三浦乾也が来て、仙台のための造船の一切の監督をしてやりましたが、当時、一青年学徒としての駒井

甚三郎は、船を造る興味と研究のために、わざわざここへやつて来て、その船で江戸までの廻航に便乗びんじようしたということがあるというわけでした。

ですから、駒井にとつては、この地は曾遊そうゆうの馴染があつて、その当時、藩の要路にも充分の懇意があつたものですから、相当の気安さで旅行もできるし、また石巻、松島、塩釜、仙台の間は、通学の往復路のようなものでしたから、少し立入れば、今でも顔馴染がいくらかもある。

そういうわけですから、駒井は、極めて無事安全に仙台城下に着いて、まず養賢堂の学頭を通じて、このたびの来着の挨拶をすると共に、当分、この地——月ノ浦に船をとどめて、修補に当りたいことの諒解を求めると、順調にその要望が達せられて、幾多の便宜が与えられるようになったのは、瘦やせても枯れ

でも直参じきさんの面かおであることを、駒井がいまさら認めないわけにはゆきません。

仙台的有志では、この不時の珍客を歓迎して、相当の集まりを催す計画が起りましたけれども、駒井は悉くことごとくこれを辞退して、養賢堂の儒臣が送ろうというのも辞退して、そうして折返し月ノ浦への戻り道、松島へ来て瑞巖寺を訪れると、折よく典童老師が臥竜梅がりゆうばいの下で箒ほうきを使っていたのを見かけました。

「これは、これは」

というわけで、招ぜられて客殿へ通ると、つい話が面白くなりました。

老師を相手の昔話や、今時の物語が面白くなってきたものですから、駒井は、今晚はここに一泊ということにきめました。

その夜、この大寺の客殿の間にひとり寝かされてみると、今

晩こそ、全く異なつた世界へ持ち來たされたような氣持にならざるを得ません。

海の上に、波の音と風の騒ぎにのみ苦勞をして來た身が、この大寺の森閑を極めたる一間に置かれてみると、昨日は昨日、今宵は今宵、二つの極端な世界を、両端から歩ませられている我が身を、我が身でないように感じました。

そこで急に落着いて眠ることができません。静かなところもいいが、急にあまり静か過ぎることは、また人の身心を安定せしめないことがある——なんだか、寝ぐるしいようだ。寝苦しさを妨ぐべき何物もないのに、寝つかれない。

なるほど静かなものだなあ、まるで四方千里、人烟じんえんを絶した山谷さんくの中に置き放されたような心持がする。静寂といつたところで海は直ぐそこだし、町も、城下も、そんなに遠いところで

はないが、洞然として森閑なる思いが身に迫るのは、寺が大きいからだ。

駒井は寝ながら、行燈あんどんの光で、高い天井と、がつしりした木口をながめて、今更のように瑞巖寺の規模というものを考えさせられざるを得ませんでした。

本来、駒井甚三郎は、科学工芸——ことに造船だの、新式兵器だのということに就いては、深甚しんじんなる研究も興味も持つてはいるが、土木建築となると、さほどに興味がないし、絵画彫刻となると、なお一層でした。

ところが、こうして見ると、この寺を建てた政宗の規模を思い起さないわけにはゆきません。

瑞巖寺は、寺ではなくして城だ——表は寺の構えにしてあるが、これを建てた最初の政宗の規模は城である。陽寺陰城とで

もいうのかな、昔の大名が城としては持てないのを、寺として置いて、他日に備えるという用意は、この瑞巖寺に限ったことではない——加藤清正なんでもその著しいもの、大名のうちの殊に大きなやつは、みんなそのくらいの用意を持っていた。

あの当時は、造船の見学に多忙で、名所旧蹟の探訪に疎かでもあったが、今度はひとつその辺から瑞巖寺の規模を見直すかな、城としての寺の構造、要害としての地形を、明日になったらもう一ぺん見直してみよう。

こうして駒井は眠られないままに、高い天井を眺めて、うつらうつらと伊達政宗のことを考えているうちに、ふと、この寺に「御座の間^{ぎよざま}」があつて、そこへは政宗が、いかなる貴賓をも立入らしめなかつたという由緒の間がある。といつて、「御座の間」とある以上は、何かひとたびその名を空しうせしめざる

ほどの期待がなければならぬ。ひそかに伝うところによると伊達政宗は、いつかこの土地に天子の行幸を期待し奉る大望があつて、このために、特にこの「御座の間」が設け備え奉られたのだということだ。

ありそうなことだ。

それともう一つ、この瑞巖寺の天井のいずれかに、千人の甲を伏せて音もさせない、俗に「武者隠しの間」があるそうだ。そういうことは必ずしも当てにならないが、とにかく、明朝はひとつこの寺の構造をもう一ぺん見直してみよう。絵画彫刻の類も一応——いやこれは自分には少々畑違いだ、いずれ白雲画伯を紹介してよこすことにしよう——というようなことを感じてゐるうちに、それでも^{まぶた}瞼がようやく重くなつてくるのはやむを得ないことです。もうかなりの夜更け、先晩、田山白雲が仙台

城下で、美にして才ある婦人と語つて興が乗り、ようやく離れ座敷で眠りに落ちようとしたのとほぼ同じぐらいの時刻でありました。

唐戸からとのような大きな障子が、すうーつとあいて、有明あんどんの行燈の中が、にわかになまたたきをはじめました。

「誰じゃ」

その時の駒井の驚き方も、あの時の白雲の驚き方も全く同じでありました。違うのは、パツと睡眠さまを醒すと共に、白雲は枕許たちの太刀を引寄せたけれども、駒井は蒲団ふとんの下ビストルの短銃へ右の手が触つただけのことでした。

のんのんと瞬きをしつつづけている有明の行燈の下に、人が一人、うずくまっている。

「御免下さりませ」

「そちは、何者じゃ」

「お静かにあそばしませ」

「何しに來た」

「駒井の殿様、わたくしめでござります」

「や、七兵衛ではないか」

うづくまつていて頬かむりの頭を上げて見せた面は、かお駒井としては、全く見紛うべくもない七兵衛おやじです。

「深夜、お騒がせ申して相済みませぬが、七兵衛は只今、この奥御殿の天井裏の忍びの間、武者隠しと申すのに暫く隠れておりますが、今夜、殿様のおいでが、願つてもない仕合せでございました」

「どうしたというのだ、何で、そちはこんなところの天井裏に隠れている。船ではみんなそちの來るのを待兼ねている、田山君

もそちの案内で無事に船に着いている、それにそちだけが——
どうしてまた、そんな姿で、こんなところに——」

駒井甚三郎は、七兵衛そのものは、洲崎で働いてくれた七兵衛に相違ないが、その内容は全く別物か——どうかすると、或いは七兵衛の幽霊でもありはしないかとさえ疑われるほどの眩惑を感じました。

「はい、その御不審は御尤もごもつとでございますが、この七兵衛は自分の間——まあ長くて七日間——はこの瑞巖寺様の構内から一寸も出られない余儀ない羽目になりました——これと申すも、よせばよいのに、年甲斐もない悪戯心いたずらこころがさせた業でございます、仔細はいずれおわかりになりました、お聞捨てにあそばして下さりませ。ただ一つのお願いは、七日の間の兵糧が少しばかり欲しいのでございます、お握飯むすびなり、おかちんなり、ほん

の凌ぎになるだけ——お松にでもお言いつけ下さつて、あの、こちらのお庭の臥竜梅がございます、あの梅の大木のう、つろの中へ、明晩でもひとつ……」

「ふーむ」

「なにぶんお願い申し上げます、委細は、あとからお耳に入ることでもございましょうが、それにいたしましたしても七兵衛は、本来善人なんでございますから、白雲先生なぞはかまいませんが、若い者にはなるべくこんなことは聞かせていただかない方がよろしいんでございます」

「何を言っているのだ、どうも、今晚のお前の挙動というものは、全く拙者にはわからない」

駒井は、いよいよ深く解し兼ねてみると、鐘が鳴りました。

寺の境内のことですから、その鐘が、突き抜けるように間近

く響きました。七兵衛は、あわただしく立ち上り、

「では、時刻が遅れますと、なんでございますから、これでおいとま暇……」

入つて来たところから、完全に出て行つてしまつたのですが、
駒井はどうしても、夢でなければ魔である——物ものの怪けを信ずる
ことの絶無な駒井甚三郎が、何か実物以外の影の尾を曳ひいてい
る姿を、認めようとして認め得られなかつたのです。

十五

その翌朝、舟を雇うて、松島から石巻湾を横断して、月ノ浦
に帰つた駒井甚三郎は、何はさて置き、昨夜の怪事を田山白雲
に向つて物語りました。

白雲は、自分が逢わせられたと同じ型を、異つた舞台面で見せられた駒井の経験に、またおぞけをふりました。そうして同時に二人が、七兵衛なる者が、今まで見ていた通りの篤実なおやじで、世話好きのために、けたはず桁の外れた道楽にまで踏み込むことを悔いない、珍しい田舎者だいなかものと見た見方を変えなければならなくなりました。

しかし、駒井にまだわかりきらないところも、白雲には、いよいよ心胆を寒からしめるほどに深く突込まれるものがあるのです。おうぎし王羲之の孝経を一目なりとも自分に持つて来て見せると誓つたような、あの不思議な応対が、今となつては犇々ひしひしと思ひ当る——奇怪、不埒ふらち、人を食つた白徒しれもの——と奥歯を嚙んでみたが、それにしても、頼まれてもやれない仕事を、好意づくでやつてみせようという男。やることに事を欠きこそするが、そこに

憎めない何物かがある。結局、わからない奴だ、変な奴だ、油断のならない奴だ。だが、自分たちにとっては、好意のありたけを見せられたほかには、なんらの悪意を受けてはいない。

駒井甚三郎は、七兵衛なるものを、ようやく解しきれないものに見直したのは同じだが、白雲ほどに深刻にはこたえていないのです。そこで白雲も、自分の見直したところを率直に駒井に言ってしまうことが、なんとなく忍びないような気持になりました。

しかし、解釈の相違にその辺までの程度はあるけれど、何は措^おいても、彼を一刻も早く救い出してやらねばならぬ、という気持は全然一致している。それをするには何でもないことで、金城鉄壁の中に蔵^{かく}されているというわけでもなんでもなく、隠れ家はちやーんとわかっているし、ちよつと引出して、駒井が

帰つて来たように舟にでも載せさえすれば、いつぶくの間にここまで連れて来られるのだが、それを本人が希望しないで、少なくとも七日間はあれに窮命きゆうめいろうじよう籠城ろうじようしていなければならぬというのは、何か事情があるのだろう。その事情を諒察してやるとすれば、彼の申し出どおり、その間の糧食を運んでやる事が唯一の道だ。それとても、そんな難事ではない、そつと人知れぬ宵闇に、あの瑞巖寺の、人目の少ない境内の臥竜梅のう、つろの中へ、握飯なり、干飯ほしいなり持つて行つて、隠して置いてやりさえすればいいのだ、それだけのことはしてやらすばなるまい。それをするには、誰彼というよりお松に越したものはない。

駒井と白雲とは、このことを相談し合いました。けれども、お松にこの内容の一切を語り聞かせることは考えものだと思いました。お松が七兵衛を信じている心持は、どこまでも尊重し

て置かなければならないと考えたものですから——手際よく要領をのみこませ、そうして、田山白雲が、その翌日お松を連れて、また舟で松島へ渡りました。

松島の風景を写さんがために逗留とうりゆうの画家が、当座の女中として、雇い入れたようにして宿をとり、白雲は駒井の紹介で、瑞巖寺の典童老師を訪れたものです。

松島の宿に着いたお松も、わからない心持でいっぱいです。

ただ当分、七兵衛おじさんのためにこつそりと食物を運んであげる役目——宵々毎に瑞巖寺の臥竜梅のうつろへ、その使命だけを固く心にかけましたが、それにしてもどうもなんだか、牢屋へ入れられている人に差入物にでも行くような気持がして——愚図愚図していれば、七兵衛おじさんはお仕置に会って斬られてもしてしまふのではないか知ら、というような不安が、何と

はなしにこみ上げて来るのです。

白雲はその翌日から、瑞巖寺へ日参して絵を描くことになったのは幸い——そうしてその夕暮、お松は絵の先生を迎えに行くふりをして、臥竜梅のう、つろの使命の第一日を首尾よく果しました。

十六

これとほぼ時を同じうして、仙台の町奉行丹野元之丞たんのものとのじょうが、何か感ずるところあつて、仲間一人ちゆうげんを連れて不意に、古城の牢屋を見廻りに来ました。

「兵助ひょうすけ、兵助、兵助はいるか」

「はい、お呼びなさるのは、どなたでございます」

「丹野じゃ」

「これはこれは、お奉行様」

牢名主兵助が、立つて戸前のところまで来ました。

元之丞が、

「兵助——無事か」

「はい、おかげさまで、無事すぎるほど無事でございます」

上目づかいにおとなしく返事をする囚人を、奉行は高飛車に、

「兵助、貴様も年をとったな」

「はいはい、年をとりましてございます」

「哀れなものだな、昔の元気はないな、その分では、目白籠めじろかごへ入れて置いてもちつちのものじゃ」

「へ、へ、へ、御冗談ものでございましょう、お奉行様」

と言つて、獄中の人が始めて冷笑しました。

「氣にさわったか」

「御冗談もことによりけりでござります、お奉行様、兵助が年をとつたと申しましたのは、往生を致したという次第じゃございません」

「なら、昔の元氣が少しは残っているか」

「へ、へ、へ、万事若い時のようには参りませんが、お奉行様、兵助はおとなしくしているのが勝手でございますから、こうして牢疊の上で日向ぼつこをして虱しらみをとつてゐるまでのことでございます、音をあげろとおっしゃるなら、いつでも兵助相当の音をあげてごらんに入れます」

「うむ、まだ音をあげる元氣があつたのか」

「早い話がお奉行様——このお牢屋なんぞは、どだい骨が細くつて、朝夕の立居振舞たちいぶるまいにも痛々しくてたまらないんでございます、

まあ、お奉行様の前ですが、ちよつと、ここんところをこうしてみてごらんあそばせ」

兵助はこのこと立つて来て、牢の一方の格子の角をゆすると、どうしたものか、その柱の一边がガタガタと弛ゆるんで、見てみると、そこから人間が楽々と這はい出しかねない隙間をこしらえて見せました。

「ふーむ」

と、奉行は目をすましてそれを見る。

「お奉行様、年はとりましたとは言うものの、兵助もまだ四十台でございますよ、やれとおっしゃれば、こんなヤワな細工をおつぺしよつて娑婆しゃばへ飛び出して、もう一働きも、二働きも、罪を作るのは朝飯前でございますが——何を言うにも、もう四十の坂を越しましてな」

「四十がまだ若いというのか、年をとり過ぎたと申すのか、わ
からん」

「どちらにお取り下さつてもよろしうございますが、盗人ぬすつとと致
しましては、四十はもう停年でございますな」

「どうして」

「私が今日まで見ましたところが、盗人をする奴は二十五六止
り、大抵その辺で年貢が上つて、三尺高いところへ、この笠の
台というやつがのつかるのが落ちでございしますが、不思議とこ
の兵助は餓鬼の時分から手癖が悪いくせに、こうして御方便に
四十の坂を越して、安穩あんのんに牢名主をつとめさせていただくとい
うようなのは、全く例外なんでございます。ですから、観念おんねんい
たしやした。世間では、兵助はロクでもない奴だが、親爺おやじが仏
師で、徳人であつたその報いで、ああして無事に長生き——盗

人としてはでございますよ——をしている、とこう言っている
そうでございます。そこで兵助も観念しましてな、こうしてお
となしくして、牢畳の上で虱をとって神妙に納まつているので
ございますが、なあに、お奉行様がやれとおっしゃれば今晚に
も、こんな窮屈なところは飛び出してお目にかかりません」
「ふむ——そんなことをやれとは言わない、しかし、お前に少し
ばかり相談があつて来たのだ、早くいえば頼みたいことがあつ
て来たのだ」

「これは、異いな仰せでございますな、お奉行様が盗人に頼みた
いこととおっしゃるのは——これは、どうしても頼まれて上げ
なければなりませんまい」

こうして奉行が、囚人である兵助の耳に口を当てて、ささや
く。つまり、耳こすりという段取りになりました。

その結果が——兵助の呑込みとなつて、

「ようがす。その話は、牢へ新参しんめえの口から聞かねえ話でもござりません。なかなかした、たか者でございますぜ、わつしの眼の届く奥州五十四郡のうちには、まずそんなした、たか者はございせんから、つまりそれは、旅鳥の、風来者の——といつて、またたびで賽さいの目をちよろまかそうという三下奴さんしたやつこの出来損いにやれる芸当じゃございせん。盗人の方でも、かなり本場を踏んで、五十四郡をのんでかかろうつて奴でなけりややれません。年の頃だつてそうでございます、まあ、この兵助と、おつつかつでございますね、かなり甲羅こうらは経ていますよ。ようがす、ようがす、一番当つてごらんに入れましょう。お願いには、この兵助を七日間の間牢からお出し下さいまし、七日目に必ずここへ歸つてまいります、歸るからには、何とか目鼻を明けてごら

んに入れたいと思います、七日とお約束をいたしやしょう、お奉行様」

兵助がこう言つて、ニツタリと笑いました。

それからこの兵助が、松島の観瀾亭のお庭へ姿を現わしたのは、その翌日のことであります。

事の順に戻つて、この兵助なるものの身柄を、一応説明しておく必要があります。

今の自らの物語にもある通り、この城下生れの者で、父は仏師です。兵助、生れて身軽で、力があつて、いつ習うともなく武芸が優れてきて、それが仇となつて、今日までに幾多の悪事を重ね、数百の子分を持っている――

これが今、町奉行の内命を受けて、特に刑中の身を以て、観瀾亭から瑞巖寺^{ずいがんじ}方面へ派遣されました。

これが裏を返すと、すなわち、仙台のほとけひようすけ仏兵助と、青梅の裏宿七兵衛うらじゆくしちべえとの取組みとなるのです。

十七

お松はその翌日、新月楼という宿屋から、瑞巖寺の庫裡くらへ、田山白雲画伯のためのお弁当を運びました。

白雲先生へという名題なだいで、実は、臥竜梅がりゆうばいのうつろの中が目的であること申すまでもありません。

ところが、来て見ると、その臥竜梅の下が先客によつて占領されていました。その老大木の前には、自分がたずねて来るずっと以前から、おそらく早朝からでありましょう、一人のずんぐりした小柄な桶屋さんが座を構えて、しきりに桶たがの箍をはめて

いるところでしたから、お松は、これはいけないと思いました。
意地の悪い桶屋さん——と、お松としてはそうとれたのもやむを得ませんが、ここで桶屋さんが仕事をはじめて悪いというわけはなし、よし悪いにしても、自分にそれを咎め立てすべき権能はないのですが、どうも悪いところに桶屋さんが頑張っている、小憎らしく感ぜざるを得ませんでした。しかも、この桶屋さんは、悠然と、朝からこの大樹の下の日当りのよいところを仕事場に選定してかかっているらしいから、そう急に動き出しそうな様子もありません。

のみならず、この悠然たる桶屋さんの、いま仕事にとりかかっているのは、天水桶のうちでも優れた大きさを持ったやつですから、これ一つの箍の懸換えをするにも優に一日はかかりそう
だ。

ところが、仕事はそれだけには止まらない。桶屋さんの周囲こめときおけを見ると、米磨桶もあれば手桶もあり、荷桶もあれば番手桶ばんておけもあり、釣瓶つるべの壊れたのまで、ごろごろしているところを見れば、今日一日の雇いきりに限らず、当分失業問題は起らないものと見なければなりません。

お松は困ったと思つたが、どうも仕方がない——何かの機会にこの桶屋さんが、ちよつとでもこの座を立つ機会を待つて素早く使命を果してしまふよりほかはないと思ひました。

そこで、暫くあちらこちらさまようて、桶屋さんの動き出す隙を待つていたが、泰然として座を構へこんでしまつた桶屋さんは、容易に動き出さないので。いかげんの時分になると、座右からかますを取り出して、カチカチと火をきつて、ぷかぷかと二三ぷく煙草をのんでしまつては、さて悠々と、老木の梢の

上なんぞを上目づかいでながめて、鶯がどこへ来ているか、雀が何羽止ったかという数なんぞ読んでいる様子が、お松にとつては、いよいよ小憎らしいばかりです。

そこで、遠廻りをして臥竜梅のうしろの方へ廻り、そこから桶屋さんの隙をねらつて、うつろへ投げ込もうかと思いました。が、気のせいか、どうもこの桶屋さんが、それとなく自分の行動を注意しているように思われなくてもありません。

とうとう、近づきかねたお松は、いったん瑞巖寺の外へ出てしまつて、法身窟のあたりの小暗い杉の中を歩み歩み行きました。

「どうも仕方がない、あの桶屋さんに追立てを食つてしまったようだ、なにも桶屋さんがわたしの仕事に意地悪をしようとしてあそこにいるわけではないが、わたしにはそうと思われ

てならない、ただの桶屋さんにしては、なんだか気が置け過ぎるのが、つまりわたしの疑心暗鬼というものでしょう、あの桶屋さんに圧迫されて、知らず識^しらずわたしははみ出されたようなことになってしまった——どうも仕方がない、もう少し、よそを歩いて、また来てみましょう」

お松はこんなひとり言を言つて、お弁当を抱えたまま、まもなく松島の海岸の方をぶらつきはじめました。

お松がこうして臥竜梅の下から圧迫され、ハミ出されたのと反対に、庫裡^{くら}からひよつこりと身を現わしたのは田山白雲でありました。

白雲は極めて気軽に出て来ましたが、手には写生帖と矢立を持って、早くもこの臥竜梅の姿に目をとめながら、近づいたり、やや遠のいたりして、ためつすがめつ、この木ぶり、枝ぶりを

見ているのです。

その有様は虚心坦懷で、眼中にただ、梅の木の本ぶり枝ぶりあるのみ。ちよつと当惑するのは日ざしの具合で、まぶしい感じがする時、左右に紙と筆とを持っているものだから、小手のかざしようないだけのものです。

ですから、お松をしてあれほど焦心せしめた桶屋の存在などは、最初から念頭になく、木ぶりのみをためつすがめつしていたが、ついには或る地点で行きつ戻りつしているところを見ると、この梅を写生せんがための足場をきめるための働きであること申すまでもありません。

そこで、田山白雲は、いかげんの地点を選定し得たと見えて、やがて、筆を動かし、写生をはじめました。

こうなると一心不乱の形で、この臥竜梅の形神を、五彩の間かん

に奪い去ろうとの熱心が見えないではありません。

ところが、お松を悩ませた臥竜梅の下の桶屋さんなるものは、てもとその手許を見ていると、存外不器用で、且つ不熱心と思われな
いでもありません。本来ならばお松が通りかかろうとも、白雲
が出現しようとも、桶屋さんはその職業に於て一心不乱であり、
またその職業としてもこのくらいの年配になれば、相当の業前わざまえ
を見せなければならないはずなのに、お松が来れば来たでよそ
みをし、白雲が出れば出たでそつとその人相をうかがうような
目つきがいやです。

しかし、気分には相当の差異こそあれ、二人ともにその職業と
するところに一心であることは同じようなものですから、あえ
てこの寂さびのついた庭の面を荒すというようなことはありません
でしたが、不意に、二つの珍客が舞い込んで攪乱こうらんしました。

「あ、いたいた、田山先生がいたよ」

「茂公か——」

田山白雲が、思わず写生の筆をとどめて見入ると、まごうべくもない清澄の茂太郎と、それから、もう一つの珍客はムク犬です。

ムクは、この著作に於てこそ、かなり知名にして有要な役目をつとめつつある犬ですけれども、田山白雲とは未だ相識の間でもなく、まして入魂の間柄じゅっこんでもありませんでした。

白雲が船へおとずれた時は、ムクはひそかに睡眠の不足を船底のいづれかで補っていたかと見える。白雲がこちらへ来るまで誰も引合わせなかったものですから、この時、これは素敵な大物を茂公が連れこんで来たものだわい——この小僧は、山に入つて猛獸毒蛇とも親しむだけの天才を持った小僧だから、も

うここへ来ると、その辺のイカモノと馴染なじみが出来てしまったのだな。

「先生、七兵衛おやじはいないの？」

「うむ——」

この時、白雲はあたりを見廻し、

「お前は どうして来たんだ」

「あたいは、舟で来ました」

「そうか」

「ムクも来たいというから連れて来ました」

「駒井船長のゆるしを得て来たのか」

「うむ、いいえ——」

「黙って飛び出して来たな？」

「済みません」

「おれに詫^わびを言つても仕方がない、お前の悪い癖だ」

「だって、ムクがついているからいいでしょう？」

「ムクというのはその犬のことか」

「ええ」

「誰がついて来ようとも、だまつて舟を出て来ることはいけな
い」

「でも、金椎^{キンツイ}さんにだけことわつて来たからいいでしょう？」

「金椎に？ あれはつんぼだ」

「だって——」

「まあ、仕方がない、金椎君にでも、ことわつて出て来たんな
らいいとして——」

「ねえ、先生」

「何だ」

「大きなお寺だね」

「うむ、奥州第一等のお寺だ」

「広いお庭だね」

「うむ、広い」

「七兵衛おやじはどこにいるの」

「ナニ？」

白雲は、またしてもあたりを見廻しました。この小僧が、七兵衛、七兵衛と無遠慮に言うのが気がかりになってならない。その度毎に、あたりを見廻したが、幸いにも誰も聞き咎^{とが}める者はない、ありとすればあの桶屋のおやじだけだが、桶屋のおやじがどうなるものか。

「ねえ、先生、お松さまはどこにいるの」

「お松さんか、お松さんは宿屋に待っているだろう」

「宿屋つてどこ」

「つい、その海岸だ」

「先生は毎日ここで絵を描いてるの？」

「そうだ」

「で、お松さんだけが、七兵衛おやじを探しているの？」

「叱しつ！」

と田山白雲が、今度は茂太郎を叱り睨めました。七兵衛七兵衛と言うのが、いけないのです。

叱られて茂太郎は、何でそれが咎められるのかわからない。

「このお寺中に隠れているんじゃないの？」

「これ——」

白雲はついにたまりかねて、

「茂公——お前はここへ来ちゃいけない、拙者の仕事の邪魔に

なるから、宿へ行ってお松さんをたずねろ——ずっと海岸通りをつたって行くと、五大堂というのがあつて、その前に新月楼という家がある、お松さんはそこにいるはずだから、先へたずねて行ってみろ」

「え、じゃ、行ってみましょう」

「茂坊、ちよつとお待ち」

「何ですか、田山先生」

「ちよつと、こつちへおいで」

「はい」

茂太郎を呼び戻した田山白雲は、前こごみになつて、その耳もとに口をつけ、

「お前、めつたに七兵衛おやじと言うんではないぞ」

「じゃ、七兵衛おじさんと言えはいいの？」

「いけない、七兵衛という名をめつたに口に出してはいけない」

「そうですか」

「わかったか」

「わかりました。さあ、ムク、おいで」

心得顔にムク犬を促し立てて、白雲に教えられた通りを茂太郎が歩み出そうとすると、ムク犬はこの時、臥竜梅の下へ行つて、桶屋さんの仕事ぶりをすまし込んでながめているところだす。

「ムク——」

呼ばれても、ちよつと動きそうにもありません。

「ムク、何を見ているの」

そこで、茂太郎も、ついのだき込んで見ると、桶屋のおやじが、長い竹を裂いて、その尾を左右に揺動させながらハメ込む

手際を面白いと見ないわけにはゆきません。

ムクを呼び立てた自分が自分に引かされて、両箇が轡くつわを揃たがさばえて桶屋さんの前に突立っている。この桶屋さんの箍捌くわくきのところがそんなに気に入ったのか、茂公と、ムクとは、一心こめて手元に見入ったまま動こうとはしません。

田山白雲は、そこでまた写生帖の筆を進めて梅をうつしにかかりました。

「坊ちゃんは、どちらからおいでなさいました」

不意に、気のいい桶屋さんからたずねられて、茂太郎は、

「お船から」

「お船はどちらから？」

「房州の洲崎すのさきというところから」

「ほうほう、それは遠いところですね」

「遠いよ」

「そのお船は、今どこについておいでなさいやす」

「月ノ浦」

「ほいほい、月ノ浦、それもなかなかの道じゃござんせん、坊ちゃんはその月ノ浦から歩いてこれへござらしたか」

「小舟で来たよ」

「小舟で——七兵衛さんと一緒に？」

「ううん、七兵衛おやじは……」

と言つて、茂太郎がハツと田山白雲の方を見返りました。

「知らないよ。さあ、ムク、行こう、オイセとチョウセ、オイセとチョウセ、オイセとチョウセ——」

こう言いながら一散に飛び出したものですから、ムク犬も、そのあとを追いました。

十八

それから暫くたつて、再びお松がこの場へ来て見た時分には、茂太郎も、ムクも、無論いないし、写生に凝^こつていた田山白雲の姿も見えなかったが、例のイヤな桶屋さんだけは、抜からぬ面で頑張^{がんば}つていたものですから、うんざりせざるを得ませんでした。

そこでお松は、田山白雲をと思つて、庫裡^{ぐり}から客殿の方をたずねてみましたけれども、今日は早歸りをしたと覺しくて、杖も、下駄も見えません。

また庭へ戻つて見ると、イヤな桶屋さんは相変らず頑張つて、こんどは聞きたくもない鼻唄まじりでいるのが、いよいよ憎ら

しい。といつて、退どいて下さいとも言えず、ぜひなくお松はまた舞い戻つて、ではともかく、一旦は宿へ引取つてからと思ひました。

遠くもない新月楼へ来て見ると、田山先生も先刻お戻りになつたにはなつたが、お客様からお誘ひが来てどこへかおいでになつたとのこと。お松は部屋へ戻つて、ひとまず休息して、また出直そうと思ひました。

だが、出直すにしても、桶屋さんがあの調子では手もとの見える間は、あすこからみこしを上げそうにもない。しかし、いかに頑張ることが好きな人とはいえ、夜になればイヤでも仕事をやめて立ち上らなければなるまいから、いつそ夕方まで我慢して、黄昏時たそがれどきに行けば間違ひはない——とこう思案して、お松は焦立いらだつ心をおさえながら、田山白雲のためにも、何かと夕餉ゆううげ

の仕度をととのえたり、部屋のうちを片づけたりして待つておりました。

しかし、白雲先生も今日はまたイヤに気が長い、お連れが出来てどこへか行かれたそうです、そのお連れはどちらの方か、いつぞや案内をうけたという、仙台の女学者で高橋という先生でもありはしないか。

そんなことを考えている間に、いつしか日も海に沈みました。

もうよい時分——と、お松が例の包みを抱えて外へ出た時分に、

月が上っていました。月が松島湾の曲々くまぐまを限りなく照して

いました。まあ、こんないい月夜を、日本の国で一とか二とか言われる風景のところではながめながら、自分というものの身もはかないものだ——お松は岸に立ったなり、何となしに涙がこぼれてまいりました。

思えば、あの大菩薩峠の上の出来事以来、自分の身世しんせいも、あちらに流れ、こちらに漂うて、幾時幾所でいろいろの月をながめたが、この世に自分ほど不運なものはないとは言わないが、自分というものもまた、あまり幸福にばかり迎えられた身とは思えない。京島原の月、大和やまと三輪初瀬の月、紀伊路の夜に悩んだこともあれば、甲斐の葡萄ぶどうをしぼる露に泣いたこともある。定まらぬ旅路の中の旅路の身、昨夜は大海の上で、今宵はこうして松島の月をながめているけれども、明日の夜はいずれの里に、いかなる月をながめるか計られない。

それはなにも自分に限ったことはない、誰にしても、本当にこれでよいと落着くことのできないのが人間の一生で、落着くところはすなわち墓——というほどの、ひとかどのさとりの下に愚痴をこぼさず、感傷に落ちないお松でしたけれども、こう

して静かに海岸の月夜を歩かせられていると、泣かないわけにはゆきません。月に心を傷められると、身に思い当る人という人の運命を思いめぐらして、その人たちのためにも泣かざるを得ない気持ちに迫られました。

宇津木さんも苦勞をしているが、机竜之助というやつ、憎いも憎い悪人だが、それでもどうかすると、何とはなしに、かわいそうに思われてならないこともある。七兵衛おじさんの親切は再生の親も同じとは思うが、それにしてもあのおじさんも、もう少し落着けないものかしら——足の速いことが仇^{あだ}になって、一つ所にじつとしていられないために、よけいな苦勞を求めて廻る、あの持つて生れた速足さえ無ければ、ほんとに暢^{のんき}気なお百姓さんで苦勞なく一生を暮して行かれようものを……駒井の殿様だつてそうです、あの御器量と、学問さえ無ければ、立派

なお旗本として、わたしたちなんぞはお傍へも寄れないところにいらつしやれるはずなのを……

人間は、能が無いために苦しまないで、能があるために苦しむ、人に優れたものを持つが故に、かえつて人並ゆえよりも苦しまなければならない。自分なんぞは何も能は無いくせに、苦しい運命に置かれることだけは人並以上な心持もするが、それは自分だけの勝手の見方で、能がないからこそ、このくらいの苦勞で済む——もし何かすぐれたものがあれば、もつと苦しい思いをさせられなければならないのかも知れない。そうです、そうです、あのお君さんを見てもそうです。あんな美しい容姿に生れなければ、あんなかわいそうな一生を終らなくてもよかったです。わたくしも不幸だけれども、あの人にも不幸でした。たしかにあの人の不幸な一生は、わたしの不幸な今までよりも増

している。かわいそうな人でした、お君様は……

米友さんはどうしているんだろう。あの人は、ああいう人だから、怒っているのか、悲しんでいるのかわからないが、自分の運命が恵まれているとは、自分ながら考えていないに違いない。

そこへ行くと与八さんは——あの人だけはいつも温かい。やさしい。人を疑うことと、物を怨む^{うら}ことを知らない人だ。あの人に負われながら、わたしたちとは反対に西の方へ行ってしまった郁太郎さん——ああ、またあの子の身の上を考えると、たまらない。

ああ、いけない、いけない、こんな思い過しをしてはいけない。さし当つての仕事は、あの七兵衛おじさんを助けることだ。何のためにこんな窮命を好んでしておいでなさるのか、それはわからないにしても、自分としてはこの当座の使命——当座の

食糧を運ぶことだけは完全に為し遂げなければならぬ。

お松はようやく瑞巖寺の中門に着きました。庫裡へは案内することですから、とりあえず目的の臥竜梅へは行かずして、なにげないお使のように見せて、手前から庭を見渡すと、イヤな桶屋さんもう姿が見えません。あの桶屋さんが、お松の仕事を妨害するために、昼夜ぶつつづけで頑張っているのではない限り、日が暮れると共に仕事を仕舞い、仕事を仕舞うと共にあの場所を立去ることは当然なのだが、それでも、あの梅の木の下は、大桶小桶の幾つかが置きっぱなしであるのを見れば、明日もまだまだ天気である限り、頑張り通すものと見なければならぬ。

一通り見すまして、お松がそつと臥竜梅のうつろの方へ急ごうとすると、門前からドヤドヤと人が入り込んで来ました。三

人ばかりは巡礼の風をしているのです。巡礼にしては今頃、変だなど思つて足を控えていると、その巡礼は本堂へは拝礼をしないで、さつさと縁をめぐつて、なんだか宵闇の縁の下へ姿をくらましてしまったようにも見えました。

十九

お松は、その宵闇の中に吸い込まれてしまった巡礼姿の二三人でさえが、心もとない人たちだと思わせられている途端に——今度は向うの一方の庭木立を潜つて、人が這はい寄つて来るのを認めました。それがいよいよ合点がてんがゆかないことに思い、自分の身も堀際へいざわに沈めるようにして様子をうかがつてからでない、どうにも仕様がないうちに思いました。

月の夜ですから、その気になつて見さえすれば、物の隠顯はよくわかるのですが、一方から這い出して、そろそろと木の間をくぐる人の影は、どう見ても尋常の人ではない。おのおのその扮装をした捕方とりかたの人数だと認めないわけにはゆきません。

お松は胸のつぶれる思いをして、自分は物蔭から月の陰影で、自分の姿は安全に保証されている立場から、一心にそれを見詰めていますと、それは自分が心がけている臥竜梅の大木の下を、その捕方は目指しているような足どりで、そこへ来ると、数人が居合腰になつてかたまり、額をあつめている。

お松が息をこらしてそれを眺めているとも知らず、右の捕方と覚しい一かたまりは、そこで額をあつめて、一応の合図をしたと見ると、どうでしょう——一人、二人ずつ、昼のうちからお松の焦躁しょうそうの種を蒔まいていた、あのイヤな桶屋さんの置き放し

た桶の前まで来ると、一人ずつが素早く、その大きな修繕半ばの天水桶を無雑作に押傾けると、その中へついと身を隠してしまつたのです。そこで表面は何もない伏せ桶の中には、たしかに五人ばかりの人数が隠されてしまつてゐるということが、お松の眼にはつきりと受取れてしまいました。

これは、尋常ではない——お松は手にしているお弁当を取落そうとしました。こうなるとお弁当を供給するその使命そのことよりも、この場のなりゆきを注視することが大事です。たとい夜が明けるまでも、この場は去れない。この場にこうしていて、これから先のなりゆきを監視し尽さなければならぬ。そう思つて見れば、そこへ姿を消した巡礼姿の人も怪しい。あとのは、てつきり人を召捕るためのお手先に相違ないが——そうだとすれば、誰を召捕るため、それは言わずと最初から胸一杯

に思い塞^{ふさ}がつている。自分がこの当座の糧食を捧げようと思う目当ての人と、今のあの人たちが覬^{ねら}っている目当ての人と、同じでなくて何であろう。

ああ、こうして七兵衛おじさんが召捕られるのだ。何の間違いで、また何の罪で——これはこうしてはいられない。こうしてはいられないといつて、どうすればよいのだ、今の自分として、事の急を七兵衛おじさんに告げ知らせてやる便りは無いではないか。よしそれがあつたとして、自分がこの場を飛び出せば、七兵衛おじさんが召捕られる以前に、自分が捕まって、当座の動きが取れなくなるにきまつている。声を立てて叫ぼうか、それとも、この垣を越えて逃げようか——そのいずれも進退きわまつている。ただ、為し得ることは、ここにいて事のなりゆきの一切を見つめていることだけだ。

お松は絶体絶命の立場から、また一種の勇気が湧いて来ないでもありません。委細を見て見ぬことにしていれば、咄嗟とつさの急にまた何かの手段が取れないでもなからう。ここは、ただ落着いて息を殺していることだ——夜が明けるまでも、ここを動かないことだ。

それだけで月はいよいよ照り、庭の夜の色はいとど更け行き、何も知らないものから見れば、いつもと変ることのない静かな夜が、おだやかに深くなり行くばかりであります。

かなり長い時間の後、この庭にシューツと、鼠花火の走るような音がしました。一つの物影が地面を這はい且つ走るもののように、庭の上に線を引いたかと思うと、それから一大事でした。

その直ぐあとから、同じく鼠花火のように筋を引いて追いか

けた幾つかのもの、それがお寺の縁の下あたりから出たと思うと、それからというものは、眼前に、月明りの夜に見えていたお松にとつても、全く何が何だかわからないのです。大きな独楽こまがグングン唸うなりを立てて夜中を飛び廻まわっている。立木をくぐり、庭石を飛び、燈籠をめぐり、全く眼にとまらない迅速でグングンと独楽こまが庭一ぱいに廻まわつたり隠れたりする、そのあとをまた幾つかの独楽が入り乱れて追いかけるのです。これはやつぱり大きな捕物には相違ないけれども——何者が何者を捕えようとするのだから、さつぱりわかりません。追いかける方の姿が眼に止らない上に、追いかける方が「御用」ともなんと叫ばないのです。お松は、全くいらいらして、何とも口の出しようもありません。

そのうちに、追われている大きなブン廻まわしの独楽が、くぐり

抜けて勢い込んで、問題の臥竜梅がりゅうばいの下まで廻つて来たような姿を認める——追いかけられた独楽の勢いでは、その臥竜梅の梢こずえへ飛びつきたかったものと見えましたが、その幹のうつろに近づいたかと思うと、その下に伏せてあつた天水桶がガバと動きましました。

「捕とつた！」

お松はよろよろとよろけました。

天水桶から飛び出したのは、それは、昼のうちの気のよい桶屋さんの形によく似ている。それが、今しブン廻しで臥竜梅の幹の下までくぐり抜けて来た、その追われる独楽の主に、前面から大手をひろげて飛びかかつて、

「占めた！」

そこで桶屋さんが、まともにぶつつかつて来た大きな独楽を

抑えつけたものですから、その独楽との正面衝突です。

「捕った!」「占めた!」というのは、おそらく、勢いこんだ気合の掛声だけだったでしょう。

正面衝突から両箇が組んずほぐれつの大格闘になったのが、お松の眼にありありと分ります。それから、その一人が気のいい桶屋さんであるだろうこともいよいよ推想されますが、ぶつかって来た独楽の何者であるかはめまぐるしくってわからな^い。これが居ても立つてもいられないほどにお松の気を揉ませるのです。

しかし、この両箇が臥竜梅で組んずほぐれつの大格闘を演じている間も、そう長いことではありませんでした。何となれば、追われた独楽の方は身一つであるけれども、それを追いかけたものには幾箇の捕手があり、それが、桶から出て正面衝突に組

みついた桶屋さんに加勢する。

「ち、ち、ちくしょう、途方もねえ奴だ、骨を折らせやがる、貴様はどここの何者で、誰の縄張りだ——おれは仙台の仏兵助だぞ」
「……………」

組み打ちながら、仙台の仏兵助と名乗ったのは、天水桶の伏兵をつとめていた昼の桶屋さん——の声に相違ないと、お松の耳には響きましたけれど——敵に名乗りをかけられて相手の独楽がいつこういらえがありません。

しかしこの独楽が、まだ充分に抑えきられていないことは、多勢を相手に必死の抵抗が乱闘となり行くことでわかります。

お松は全く気が気でありません。

せめて、この相手の一人が、何とか言葉を出してくれればいいと思いました。

何とか一言いつてくれれば、この気がいくらか休まると思いました。いいえ、そんなところではない、追われて来て、ここで組み止められている人が、七兵衛おじさんでなければ果して誰でしょう。

違いない、違いない、七兵衛おじさんがこうして追い詰められて、いま、つかまろうとしているところだ。

ああ、どうしよう。

自分の力では——出ていいか、出て悪いか。出たところでどうなるものかと言ったって、みすみすああして、捕まってしまうものを……

「うぬ、てごわい奴！」

「あつ！」

「失敗しまった！」

この失敗った！ という一語が、どちらの口から出たのか。それだけが、わくわくしていたお松の耳にそれてしまいました。いや、たしかにその一語を聞き止めたには相違ないけれども——それがいずれから出たのか、仏兵助と名乗りをあげた桶屋さんの口から出たのか、追いかけて組みつかれた七兵衛おじさん——仮りにその人だとして——の口から出たのか、お松が聞き漏らしました。

お松は、それを、この場合、重大なる心ばかりであつたように思われたいではありません。この「失敗^{しま}った！」の一語が、仏兵助という桶屋さんの口から出たならば、七兵衛おじさんの方にまだ脈があるのですが、万一この「失敗^{しま}った！」が、七兵衛おじさんの口から出たものならばどうしよう。お松はその時、胸の上へガンと金槌^{かなづち}をぶつつけられたような気持がして、もう、

意地も、我慢も、見栄も、分別もなく、隠れ場から走り出してしまいました。

そうして、格闘の現場へ飛び込んで見なければならぬ気持ちに追われて、丸くなって飛び出したその出端でばなを、ふわりと抑えるものがありました。

「おや？」

それを払い除けようとしてみると、そのものが、いよいよ和やわらかく、自分の面かおをすつぽりと包んでしまいました。

それは、誰か大きな人か、出家の身に相違ありません。その人が、お松のかけ出した出端を、その大きな法衣ころもの袖で、包んで抑えてしまったものだということが、直ちに分りましたけれども、その坊さんが誰であるかはわかりません。

ただ、こうして自分を抑えてくれたことに、充分の好意をもつ

てしてくれる証拠には、その法衣ざわりが全く和らかで、最初から窒息させるつもりもなく、抑留の気分もなかったことでわかります。それは獲物えものを捕えるために張った蜘蛛くもの巣でないことはわかつているが、さりとて、お松の力でこれを払い除けて走ることは、その法衣の袖が和らかに出であるほどにかえつて、困難なことでありました。そこで、お松としては、あのすさまじい現場へ走り込むことを遮おさえられたのみか、その現場を見届けることをさえ抑えられてしまった形で、どうすることもできないで、全くその瞬間だけは、蜘蛛の巣にかかった小蝶と同じような運命に置かれました。

これより先、田山白雲が、今日は少し早目に宿へ帰つてしまつたのは、不意にやつて来た清澄の茂太郎の足もとがあぶなつかしいので、それが心配になるのと、もう一つはかねて約束が一つありました。

仙台の閨秀詩人、けいしゅうしじん高橋玉蕉女史の招待で、今晚あたり松島の月を見ようとの誘いを受けていたものですから、その心がかりもあつて帰つて見ると、果して玉蕉女史から使がありました。少し時刻は早いが、かんらんてい観瀾亭の下から船を出すことにしましたから、おいでを願いたい——とのことです。白雲は胸を打つてよろこびました。

「田山先生」

そこへ、茂太郎とムク犬が馳はせつけて来ている。

「お前ドコにいた」

「五大堂で少し遊んで来ました。田山先生、これからまた、どこへかいらっしゃるの」

「うむ、お月見に行くのだ」

「まだお月様は出ていないじゃないか」

「うむ、これから船で沖へ乗り出すと、ちょうど月の出る時分になる」

「洒落^{しやれ}てるね——あたいをつれてつて頂戴」

「うむ——」

「いいでしょうね」

「わしはかまわないが、人から招^よばれたのだから」

「御招待なの？ だって、かまわないでしょう、あたいとムクが先生のおともだつて言えば」

「そうさなあ——」

「いいでしょう。さあ、ムク、これから先生のおともをして、船で松島のお月見としゃれこむんだよ」

「まだ、独り決ひとめをするのは早い、先方の同意を得た上でなければならん」

「先方だって、先生のおともだと言えば、いやとは言わないでしょう」

「あんまり騒々しくはいかん」

「お月見の御招待だから、お酒も出るでしょう、歌をうたつていけないということはありませんまい、その席上で、あたいが歌をうたい、踊りをおどつて興を添えてあげます」

「生意気なことを言うな」

「だって——わざわざ芸人を呼んで興を助ける人さえあるんだから、あたいが只で歌って踊ってあげれば、お呼び申した方も喜ぶだろう」

「無茶を言うなよ——だが、あんまり騒々しくせず、邪魔にさえならなければ、お頼み申して連れて行つてやる」

「では行きましょう、その月見のお舟はどこから出るのです」

「観瀾亭の下から」

「観瀾亭というのは、お月見御殿のことなんでしょう、行きましょう」

茂太郎は、むしろ白雲の衣を引っぱるようにして、月見船まで促し立てました。相変らず生意気な小僧めとは思いつながら、この小僧をつれて行くことは、必ずしも風流の邪魔にはならないで、相手が稀代の風流婦人だけに、時にとって意外の手土産

になりはしないかとさえ思われました。

こうして、茂太郎とムクとにからまれながら田山白雲は観瀾亭の下まで来ると、果して風流数寄な屋形舟^{ふね}が一つ、ちゃんところ、かいをととのえて、酒席を設けて待構えていました。酒席の上には、当然、東道の主なる^{あるじ}閨秀詩人が、今日は薄化粧^{えんぜん}して嫣然^{えんぜん}として待ちかねている。物慣れた老女が一人かきずいて席を周旋し、老船頭が一人船をあずかつて迫らない形をしている。

「田山先生、ようこそ」

「いや、どうも……恐縮です」

白雲がいたく恐縮をしてしまいました。ことには、いかなれば旅絵師のやつがれ風情に、今日はこうして扶桑第一^{ふそう}といわれる風景のところ、絶世の美人で、そうして一代の詩人に迎えられる、水入らずにお月見——美酒あり、佳肴^{かこう}あり、毛氈^{もうせん}あり、

文台がある。山陽、東坡のやからすら企て及ばざる風流韻事の果報なり、と心を躍おどらせずにはおられません。

「時に、玉蕉先生、一つお願いがあるのですが」

「改まつて、何でございます」

「ここに一人の少年と、一頭のムク犬がおります、拙者の従者なのですが、画舫がほうの片隅へ召しつれて差支えさしつかひございますまいか」

「ええええ、差支えさしつかひございませんとも」

「では、茂——ムク——」

白雲は茂太郎とムクとをこの船に引きずり込み、やがて、風流瀟洒しょうしやたるこの月見船は、松島湾の波の上を音もなくすべにり出しました。

果して、興は船の進むと共に進みました。美酒佳肴の用意も申すまでもなく、丹青翰墨たんせい かんぼくの具まで備わらずといふことはあり

ません。

興に乗じて、白雲は筆をとつて直ちに眼前の景を描きました。

「これへ一筆——」

玉蕉女史に向つて賛を求めると、女史も辞することなく達筆をふるいました。

絶奇造化思紛々（絶奇なり造化、思ひ紛々）

位置如棋島嶼分（位置は棋の如く島嶼分る）

最是風光難画処（最もこれ風光の画き難き処）

落霞紅抹万松裙（落霞紅に抹く万松の裙）

それから白雲が随つて画けば、玉蕉が随つて賛をする——二人が詩興画趣のうちに全く陶醉して行くのはやむを得ないことですが、

オイセとチヨウセ

オイセとチヨウセ

オイセとチヨウセ

清澄の茂太郎が、けたたましい声を上げて突如として舟べりをゆすりはじめたのは、風景の美に打たれての感興か、それとも、美人と画家とが、自分たちだけ詩興画趣に陶醉していて、我々に頓着しないのに、いささかの嫉妬と退屈とを感じ出したのか、とにかく、茂太郎の破調が、ちよつと船の中を驚かせました。

「茂、静かにしろよ」

田山白雲は、うつろ心で叱つてみたけれども、茂太郎は頓着なく、

オイセとチヨウセ

オイセとチヨウセ

オイセとチヨウセ

この即興と反芻はんすうとを兼ねた小天才は、この単句をどこから見つけ出したか知らないが、しきりに繰返しては小船の縁をゆすぶっている。

「茂、静かに」

白雲が叱るけれども、この場合はあまり權威がなかったのです。それは玉蕉女史との応酬唱和の興があまりに濃厚であつたから、その叱る言葉も、ついつい上の空になつて、相手にはこたえないらしい。

それを見兼ねて、物慣れた玉蕉女史介添の老婦人がさし出て来ました。

「坊ちゃん——おもしろい話をして上げますから、こちらへいらつしやい」

と、茂太郎をあやなしにかかる。

「面白い話」

「あい」

「おばさんがおもしろい話と思つても、人が聞いては面白くないこともありますよ」

「そりやありますがね、今おばさんがして上げようという話は、この仙台の人でなければ知らない話ですから、よそからおいでの方が聞けば面白いにきまつていますよ」

「仙台の昔話が、そんなに面白いかえ」

「ええ、面白いですとも」

「話してみても頂戴、あたいは、面白くないと思えば決して辛抱して聞かないから」

「こちらへいらつしやい、話して上げますから」

こうして老女は、茂太郎を自分に近いところへ呼び寄せて坐らせ、それから奥州の昔話をはじめました。

「むかしむかし、ぎつと昔」

「むかしむかし、ぎつと昔」

「あるところで婆が座敷を掃いていたら、豆が一粒落ちていた。婆が拾うべとしたら、豆はコロコロと転がって行つた。婆が拾うべと思つて追いかけて行つたら、どこまでも転がって行くので、婆は『豆どん豆どん、どこまでござる』と言つて道端みちばたの地藏さんのお堂の中で見失つてしまいました」

豆どん豆どん、どこまでござる

豆どん豆どん、どこまでござる

茂太郎は声高く歌い出しますと、それを抑えて老女は語りつぎました。

「そこで婆は地藏さんに、『地藏さん地藏さん、豆が転がつて来えんか』と尋ねますと、地藏さんが、おれ喰つてしまったとお返事をしたので、婆は帰ろうとしたら、待つてろ待つてろ、いいこと教えてやると、地藏さんが引止めて、おれの膝さ上れ——と言いました」

「……………」

「地藏さんから膝さ上れと言われて、婆は『とつても勿体なく
て、上られえん』と言いますと、地藏さんが、いいから上れと
申しました」

とつてもとつても

勿体なくて

上られえん

膝さ上れ

上られえん

茂太郎は、老女の昔話のうちの奥州訛おうしゅうなまりを面白く心得て、口真似くちまね

に節をつけて唄い出しました。それに老女はあまり取合わず、

「すると地藏さんは、いいから上れと言いますから、婆ばばは恐る

恐る地藏さんの膝さ上つたら、今度は地藏さんが、手のひらへ上れと申しました。婆は『とつてもとつても勿体なくて上られえん』と言いますと、地藏さんが、いいから上れと言いました」

とつても

とつても

勿体なくて

上られえん

とつても

とつても

茂太郎がうたい出す、老女がかまわず昔話をつづける。

「そこで婆は恐る恐る、地藏さんの手のひらへ上ると、地藏さんが今度は、肩の上きのぼれと言いますから、婆は『とつてもとつても勿体なくて上られえん』と言いますと、地藏さんが、いから上れと言いました」

とつても

とつても

勿体なくて

上られえん

とつても

とつても

茂太郎がまたはしやぎ出すのを、老女が抑えて、

「そこで婆は恐る恐る、肩の上き上ると、地藏さんが、婆や婆

や、頭の上さのぼれと言いますから、婆が『とつてもとつても勿体なくて上られえん』と言いますと、地蔵さんが、いいから上れと言いました」

とつても

とつても

勿体なくて

今度は老女が茂太郎の合の手を押しかぶせて次を語りました。「そこで婆は、とうとう地蔵さんの頭の上までのぼってしまうと、今度は地蔵さんが、梁^{はり}の上さのぼれと言いました、婆は、とつても、とつても……」

とつても

とつても

勿体なくて

上られえん

今度は茂太郎が、老女の話頭を奪つて歌い出したのです。老女も負けない気になって、話を進行させて行きました。

「地藏さんが、いいから上れと言われたので、婆は梁の上までのぼると、地藏さんが、婆や婆——おれがいいこと教えてやる、いまに鬼どもが、ここさ博奕^{ばくち}打ちに来^くつから、そしたらおれが指図するから、鶏^{とり}の啼^なく真似^{まね}をしろ、と言われました」

ここさ博奕打ち

くつから

くつから

茂太郎が頓狂声を出すと、もう慣れきつた老女は、かえつてそれを合の手のようにして、

「まもなく鬼どもがドヤドヤとやって来て、地藏さんの前で博奕

をはじめた。地藏さんが合図をしたので、婆は梁の上でコケツコーと鶏の啼く真似をした。そうすると、鬼共は、一番鶏が啼いたから急いでやれと言つて、ウンと博奕をやつた。地藏さんがまた指図をしたので、婆は再びコケツコーと鶏の啼く真似をしたら鬼どもは、もう二番鶏だと言いました。地藏さんが三べん目の指図に婆がコケツコーとやると、鬼どもは、それ三番鶏だから夜が明けたと言つて、みんなあわてふためいて金をたくさん置いたまま逃げ出して行つた。そしたら地藏さんが、婆や婆、ここさ下りて来いと言われたので、婆は梁から下りて行くと、そこにある金もつて来いと言いつけられた。婆が金を集めて持つて行つたら、地藏さんが、それを持つて早く帰れと言われた。婆はその日から、うんと金持になりました」

「婆さんうまくやつたね」

茂太郎も席の興に乗出して来ました。話そのものの興味もあつたでしょうが、老女が聞き馴^なれない奥州語を調合しての話しぶりが、妙に気に入つたらしい。老女もまた、茂太郎が存外聞き上手なのに張合いが出て――

「そこへ隣の慾タカリ婆がやつて来て、あんた、何してそんなに金持になつたのつしやと尋ねた。婆はありのまま、これこれこういうわけで金持になつたと教えたたら、慾タカリ婆は早速家さ歸つて、豆を座敷に転がして、それを地藏さんの前まで転がして行つて、地藏さん地藏さん、豆さ転がつて来^きえんかと尋ねたが、地藏さんは何とも返事をしないのに、慾タカリ婆は勝手に地藏さんの膝の上へのぼつたり、手のひらへ上つたり、肩の上へのぼつたり、頭の上へのぼつたりして、とうとう梁の上までのぼつた。そこへきのうのように鬼どもがぞろぞろと博奕打ちに

やつて来た。慾タカリ婆は、コケツコーと鶏の啼く真似を、地藏さんが指図もしないのに三遍やつて鬼どもの前へ下りて行ったら、鬼どもはウンと怒って、さてはきのうおれたちをだましたのはこの婆だな、と言つて慾タカリ婆をさんざんにハタいて瘤こぶだらけにしてしまったとき」

オイセとチョウセ

オイセとチョウセ

老女の昔話のくさがりが終ると、きつかけに茂太郎がまた頓狂な調子を上げましたが、あたかもよし、その時に月が上り出したのです。

「ああ月が——」

船のうちが、ひとしく、いま海波の上にゆらゆらのぼりかけた月を見て、鳴りをしずめてしまいました。

田山白雲が水墨を取つて、大きく紙面にうつした松島月影の
即興図に、玉蕉女史は心得たりとあつて、さらさらと次の絶句
を走らせる。

高閣峻嶒山月開（高閣峻嶒として山月開く）

倒懸清影落江隈（倒まに清影を懸けて江隈に落ち）

欲呼漁艇分幽韻（漁艇を呼ばんと欲して幽韻を分つ）

好就金波洗玉杯（好し金波に就いて玉杯を洗はん）

田山白雲は、それを見て、この閨秀詩人は字を合わせ韻をさ

ぐることに、多くの苦心をせず、のうちゅう囊中のうちゅうのものを取り出すように、

むぞうさ無雑作にこれだけの詩を書いてしまったことに舌を捲かずには

いられません。婦人にして漢詩を作るということは、極めて珍

しいことに属している。ぶんぼう文鳳、さいこう細香、さいひん采蘋、こうらん紅蘭——等、数え

きた来つてみると古来、日本の国では五本の指を折るほども無いら

しい。

だが、この当面の高橋玉蕉女史は、右の五本の指のうちのいずれに比べても、優るとも劣りはしない。更にその第一流と謂えろと考へざるを得ないで、そうして徐ろに酔眼をみはつて、一応、右の絶句を黙読してから、さて、朗々として得意の吟声を試み出でようと思いました。

高閣峻嶒トシテ山月……

その発声の途端に、別の方から、また一つの吟声が無遠慮に飛び出して来ました。

春江潮水、海二連ツテ平カナリ

と、澄み渡つた声で、白雲の出ばなを抑えたものがあつたものですから、啞然^{あぜん}として一時沈黙することのやむを得ない事態に至りました。その内容節調にして穏かなる二重奏でない限り、

それが同時に起るとすれば一方が一方を乱すか、或いは一方が沈黙してしまうか、両者同時に相譲るかでなければ始末のつきようはずはないのであります。礼儀としてもこれは許せないことですが、相手が箸にも棒にもかからない代物しろものだけに、白雲もかお面負けがせざるを得ません。

さすがの白雲をして、せっかくの朗吟を中止沈黙のやむなきに至らしめた無作法者の、清澄の茂坊であること申すまでもなく、白雲をして、中止沈黙のやむなきに至らしめたことをいいことにして、茂太郎がいよいよ独擅どくせんを發揮し、独擅といっても元はといえば、内容節調みな白雲先生の直伝じきでんによるところのものに相違ないが――

海上の明月、潮うしほと共に生ず

ゑんゑんとして波に随ふ千万里

何れの処か春江月明なからん

江流ゑんてんとして芳てんをめぐる

月は花林を照して皆霰に似たり

空裏の流霜飛ぶことを覚えす

汀上の白沙見れども見えす

江天一色纖塵なし

皓々たり空中孤月輪

江畔何人か初めて月を見し

江月いづれの年か初めて人を照せし

人生代々窮まりやむことなく

江月年々望み相似たり

知らず江月何人かをか照す

ただ見る長江の流水を送ることを

白雲一片去つて悠々

青楓浦上愁ひに勝^たへず

誰^たが家ぞ今夜扁舟^{へんしゅう}の子は

何れの処ぞ相思ふ明月の楼

憐れむべし楼上月徘徊^{つきはいくわい}す

まさに離人の粧鏡台を照すべし

玉戸簾中まけども去らず

擣衣砧^{たういちんじやう}上払へどもまた来^{きた}る

此時相望めども相聞^{このとき}えず

願はくば月華を逐^おうて流れて君を照さん

鴻雁^{こうがん}長く飛んで光わたらず

魚竜^{ひそ}潜み躍^{をど}りて水文^{あや}をなす

昨夜かんとん落花を夢む

憐れむべし春半家しゅんぱんに還らず

江水春を流して去つて尽きんと欲す

江潭落月かうたんらくげつまた西に斜めなり

斜月沈々として海霧かいむに蔵かくる

碣石瀟湘けつせきせうしやう限り無きの路

知らず月に乗じて幾人か帰る

落月情を揺うごかして江樹に満つ

これだけの詩を一句も余さず、清澄の茂太郎が、吟じ来り吟じ尽してしまつたものですから、今度は、天地が動き出したほどこに玉蕉女史が驚かされてしまいました。

まあ、この子は、何という子だろう、化け物ではないかしらとまで呆あきれ、

「まあ、田山先生、あの子は……」

と言ったきり、あとの句がつけませんでした。

「は、は、は、は」

と、テレきつていた田山白雲が高く笑いしました。そうして釈明して言うことには、

「驚いてはいけません、あれが反芻はんすうの反芻はんすうたる所以ゆえんなんです、意味がわかつて歌っているんじゃないやありませんよ、消化しきれない頭の中のウロ覚えが、興に乗じて飛び出して来るだけのものですが、知らない人は、ちよつと驚かされます」

「ですけど先生、わけがわかるにしても、わからないにしても、これには驚かないわけにはゆかないじゃありませんか、勸学院の雀どころじゃありませんもの」

「は、は、は——門前の小僧おそのためにしてやられましたね」

「ほんとうに門前の後世おそ畏るべしでございます、田山先生のお

仕込みのほど、全く怖るべきものでございます」

玉蕉女史は、改めて、船べりをさまよう清澄の茂太郎を見直しました。が、茂公は、この閨秀けいしゅうの詩人をして舌を捲かせていることはいっこう御存じなく、例の般若はんにゃの面は後生大事に小脇にかかえて、なおしきりに月に嘯うそいぶきながら、更に続々となんらかの感興が咽喉のどをついて出るのを、しばらくこらえているようでしたが、勢いこんで、

とつても

とつても

勿体もったいなくて

上られえん

とつても

とつても

右のように喚わめき出したかと思うと、

さんさ時雨しぐれか

かやのの雨か

音もせで来て

ぬれかかる

とつても

とつても

勿体なくて

上られえん

とつても

とつても

とうとう船べりで、足拍子を踏んで、片手を振り上げながら、面白おかしくおどり出してしまいました。

とつても

とつても

勿体なくて

上られえん

その狂態を指して田山白雲が、

「あれです——初唐の古詩をああして朗々とやり出すかと思えば、とりとめもないあのでたらめをごろんなさい、さんさ時雨を取入れたかを見ると、もう、たつたいま耳食じしよくの昔話が織り込まれているのであり、何物でも一度彼奴きやつの耳に入ったら助かりません——あの踊りだつてそうです、無雑作のうちに、どこか節律があるんでしてね。だから、見ていて、なかなか面白いです。つい我々まで、あいつの踊りに釣込まれてしまうのです。黙って見ていてごろんなさい、興が乗り出して来たようですか

ら、何をやり出すか見物みものですよ、何かの感傷で反芻が引出される
と、全く思いがけない離れ業が飛び出すのです。御当人に分つ
ていないのですから——歌う意味が分っていないのは勿論、こ
の次に何が飛び出すかの予測が、歌って踊る御当人にもついて
いないのですから……」

白雲がこう説明して、この際、玉蕉女史に、暫く鳴りをしずつめ
て、かの童子の出鱈目でたらめに制限を加えないように心づかいを慫慂しやうよう
していると、

玉だすき

うねびの山の

かしはらの

ひじりの御代ゆ

あれましし

神のことごと

かたへより

いやつぎつぎに

つがの木の

「そうら、ごらんなさい——さんき時雨しぐれが万葉に変わりました。

この次には、カッポレや隆達たかたけが飛び出さないとともに限りません」

白雲さくもが囁くと、果せるかな、歌い手が急に韻文から散文に直

下して、それから演説口調になりました、

「皆さん、今晚の月を見て、皆さんのお心持はいかようにお感じなさいますか。昔の歌人は、月見れば、ちぢにものこそ悲しけれ、我身一つの秋にあらねど……とうたいました。御同様にわたくしもなんとなく、悲しい思いがいたします。これはおそらくどなたでも、同じ思いでございましょうと思います、日本の

人も、唐からの人も、それから西洋の人も……西洋のゲートルという人はこう言いました、楽しい、悲しい昔の思い出が心に満ちて、わたしはこの二つの世の間に、ひとり今宵さびしくさまよいます——と。皆さん、人情には変わりありません、古今東西——眼の色が違うからと言って、月の色は変わりません、月を見て感ずる心は同じだろうと思いますが、皆さんはいかがです」

これは、もとより、玉蕉女史に向つて呼びかけたのでもなく、白雲に向つて訴えたのでもないのです。月と海とを聴衆に見立てて、その波がしらに向つて無心に演説を試みはじめたのです。かと思うと、格調急に変じて、

ゼ、クイン、オブ、ナイト

シャイン、フェア、ウイズ、オール

ハア、バージン、スターズ、アバウト

ハア――

口早にそれを言い切ると、また足拍子がはじまりました。

チーカロンドン、ツアン

パツカロンドン、ツアン

「あれです――出鱈目でたらめもあの程度になると、仕入先がちよつと

わかりません、漢詩などは、われわれが偶然のすさみに口頭
のぼったやつを、直ぐに乾板にうつしとって置いて、複製して
出すのですが、あのペロペロはどこからどう覚えて来るのです
か、あれにも相当のよりどころはあるのでしょうか――全く油断
も隙すきもならない奴です」

「驚きました、本当に驚きました」

本物の詩人と画伯を全く茫然自失せしめているとは知らず――
足拍子おもしろく船べりを踊って、トモの方へ来た時分に、

「あ、ムク、あ、ムク——ムク、お前はどうかしたのかえ」

ここで全くブチこわし。

反芻もローマンもあつたものではありません。世の常の子供が、驚いてベソをかいと同じような狼狽としよげ方とで叫び出しました。

「ムク——ムク」

今まで所在を潜めていたムクが、かくまで昂上してきた茂太郎の感興を一時に打破るがものはありました。前両足を揃えて、耳を筒の如く立て、眼をらんらんと光らせて、そうして遠くこし方の岸上を見込んで、身の毛を簀みののようによだてて立ち上つた瞬間を最初に認めたのは、清澄の茂太郎ひとりでしたけれども、その凄氣せいぎに襲われたのは船の人すべてでありました。

「どうしたのだ、茂——」

「ムクが……」

「いいからもつと踊らないか」

白雲が茂太郎の踊ることをむしろ奨励してみましたけれど、茂太郎の耳には入りません。

と同時に、ムクが吼ほえました。遠く岸上をのぞみながら吼え立てました。その吼え声が、またしても可憐なる女詩人を渾身こんしんからふるえ上らせずにはおかかない。

「あ、ムクが……」

この急に存在を持上げた巨犬が、ザンブとばかりに海中へ飛び込んだので、満船の人がまた慄ふるえ上りました。

最初は、茂太郎と相抱いて飛び込んだかと思われるほどでありましたのに、よく見ると、飛び込んだのはムクだけで、茂太郎は確実に舟のうちにこそあるが、その手と心は、まっしぐら

にムク犬のあとを追いかけているのです。

それを後にして、犬がまたまっしぐらに遠くの岸の方をのぞんで泳ぐこと、泳ぐこと——この状態がついに、船中の田山白雲にも解しきれなかったくらいですから、玉蕉女史にも、附添の老女にも、船夫風情にも合点のゆきようは^{がてん}ありません。

ひとり、清澄の茂太郎が、それから船一杯にうろたえ廻りました。

「先生——大変です、ムクが眼の色を変えて飛び出しました、あの犬が眼の色を変えて飛び出すからには、よほどの大変があるから見なければなりません。ごらんない、これほどわたしがうろたえているのを顧みもせず、真一文字に海を泳ぎきって行くのをごらんない、岸へ向って行くから、変事はきつと岸の方にあるのです。ですけれども、岸は遠いです、ごらんない、

町の火影^{ほかげ}が星のように小さく、あんなに微かに見えるではありませんか。皆さん、わたしたちは興に乗じて少し来過ぎました、岸が遠過ぎます、いかにムクだつて、翼があるわけではありませんから、この海を泳ぎきつて、あの岸まで行く間には時間がかかります——ああ、わたしたちは、いい気になつて、月に浮かれ、景色にみとれ、少し遠くまで来過ぎてしまいました」

茂太郎は、こう言つて船べりに地団駄を踏むのです。

重ね重ね、呆れ果^{あき}てている白雲も、玉蕉女史も、事の仔細は紛糾^{ふんきゆうこうさく}交錯して何だかわからないが、そう言われてみると、自分たちは、たしかに岸を離れること遠きに過ぎたという感じだけは取戻しました。

ことがここに至つては、いかに逸興しじんそうかくの詩人騷客といえども、再び以前の興を取戻すことは不可能でしょう。

すべて、事は盛満を忌むもので、今宵の風流は、最初から興たけなが酤ぐわに過ぎました。こうなつた以上、どのみち、舟を戻して興を新たにするよりほかはないでしょう——言わず語らず舳艫じくろはしめやかにめぐられました。

一方——どこをどうして泳ぎ着いたのか、ムク犬は完全に五
大堂前の松島の陸の岸の上に身ぶるいして立ち上ると、そのま
ま息をもつかず、めざして走るところは、まさしく瑞巖寺ずいがんじの境内けいだい
であるらしい。

果して瑞巖寺の門内、法身窟の前の真暗闇まつくらやみの中に、まっしぐ
らに走り入ると、その闇の中の行手から息せききつて走つて来

る一人の人の姿と、ムクとが、バツタリと出会いました。

であいがしら
出合頭にムクが一声吠えりと、

「まあ、ムク」

バツタリ行会った先方の人影が、狂喜の叫びを立てて、この犬に抱きついて、

「ムク！ 遅かったねえと言いたいけれども、考えてみると、お前の来るのが遅かったのがよかったかも知れない、お前の来ることももう少し早かろうものなら、かえつて大変なことになつたかも知れない、今となつては……どうしていいか、わたしにも分らない」

と言つたのは、まごうべくもないお松の声であります。

無論、この絶望に近い呼び声に対して、なんらの表情をも返すことのできない畜生の身ではあるけれども、ある一種の意気

込みを示していることだけはたしかであります。

この犬の性質と、挙動と、それから性質と挙動から起る表情を知り抜いているはずの人には、夜であろうとも、表情の機関が働こうとも働くまいとも、その気合は充分に受取れるのです。代つて言つてみれば、

「お松さん、どうしたというのです、あなたにも似合わないじやありませんか、さあ、どこへなりとわたしを御案内して下さい、あなたが行ききれないところへも、わたしなら行きます——あなたが相手になれない相手にも、わたしなら、なることが出来るかも知れません、さあ、わたしを、どこへなりとやつて下さい」

こう言つて、息をきりながらも、落着いて促し励している呼吸は、たしかなものですよ。

それでもお松から、行けとも、止れとも命令の出ないのをもどかしがって、

「ね、あなたは、七兵衛おじさんを尋ねて、こんなに心配苦勞をしているのでしよう、わたしもそれが急に氣にかかつてたまらないから、それで、ここまで抜けがけをして来たのですよ、七兵衛おじさんはどうしました、あなたが暗示をさえ与えて下さるなら、わたしならきつと嗅ぎつけて上げます、さあ、早く」

こう言つて、ムク犬から促し立てられていることはたしかに受取れるが、お松はそれに、指図も、命令も下す氣にはなれないようです。

「ムクや、お前の志は有難いけれど、実は、わたしにも、何が何だか、ちつともわからないのですよ。どうも、この胸は心配で心配でたまらないけれども、また、七兵衛おじさんが、そう

滅多に人に捕まるようなはずはないとも思われるから、安心してゐるところもあるのです。それですから、お前のような強い犬をやつて、もしあやまつてお役人を傷つけたりなんかして事壊しになつてはいけないから、それで、せつかくのお前の好意に對しても、わたしはなんにも言えないの——けれども、有難うよ、お前は本当にいい犬ですね、いつもこんなにしてもとの御主人のお君さんを護つていたのですね。でも……お前ほどの神に通じた強い犬でも、それでも人間の運命というものは、どうすることもできませんでした、お君さんの身を守つたけれども、命を助けることはできませんでした。今、その親切を、わたしたちにしてくれる……どうして、わたしがここにゐることがわかつたのか、それをお前にたずねてみるのも野暮やぼですね、お前には、ちゃんと未然がわかる働き、神通力じんずうりきというものがあ

るつて、みんなそう信じているから間違ひはない、せつかくだけれど、ここは諦めて、^{あきら}田山先生に御相談してからのことにしましよう。宿へ帰りましよう、もう先生も帰つていらつしやるでしようから……」

思慮あるお松は、ムクのせつかくの加勢を得たりとして、あの臥竜梅の場の捕物の方へ引きかえすこともしないし、また、その人数が引きあげて行つたらしい方向をムクと共に追おうともしないで、ムクを従えて、大きな不安のうちに、一種の分別と、沈着とを以て、また海岸の方へと出てしまいました。

二十二

風流韻事^{ふうりゅういんじ}で、いい気持になりきつた田山白雲が船を漕ぎ^こ戻さ

せて、宿へ帰つて見ると、果して非常事がありました。

お松から一伍一什いちぶしじゅうを聞き取った上、改めて瑞巖寺まで行つて

問いただしてみると、だいそれた、この「つわ者隠し」の天井に賊が潜んでいたのを、張込んでいた仙台の手のものに捕まつてしまつた。

たしかに捕まつたのか——ええ確かに手を後ろへ廻されて縛られてしまいました。最初はずいぶん、暴れましたけれど、仙台の方に、ほとけひょうすけ仏兵助という親分がいて、それがとうとう右の怪賊を生捕つてしまつたに相違ございません。

それを聞くと、田山白雲もがっかりしたが、お松のしおれ方は目もあてられないほどでありました。白雲はそれを慰めかねていたが——

「よし、お松さんの実見したところによると、果して七兵衛お

やじが捕まつたのか、疑問を存する余地は充分ある。捕まつたにしても、つかまらないにしても、その罪状というのが明瞭でないのだから、いずれ放免されるにきまつているが、世間には人違いでヒドイ目に逢う者もある、みすみす冤罪えんざいで陥れられるものもあるのだから——そう絶望するがものはない。ひとつ拙者が本当のところを突きとめてみて、いよいよ捕まつたとなればかえつてまた方法もある、駒井殿と相談して貰い下げることたやすも容易いと思うから、そんなに気を落しなさるなよ」

白雲はこう言つてお松をなぐさめて、その翌日、塩釜から仙台へかけて、昨夜の捕物の顛末てんまつを聞きただし、さぐりを入れて歩いてみると、岩切というところで、一つの異聞をしつかりと聞きとめました。

ここの立場たてばで——ほんのたつた今、大変が起つたというので、

火の見の下の茶屋で、土地の人が目の色を変えつつ、よつてたかつているあたりの形勢の狼藉ろうぜきなのを見て、白雲はなんとなく胸を突くものがあるものですから、尋ねてみると、いよいよ聞き馴れない奥州語を、半ばは語勢で判じてみると、白雲が来たほとんど一刻前ひとときまえ、ここで大活劇が行われた——というのは、松島から連れて来た重大な犯人が、ここで駕籠かごを破つて逃げてしまったところだということです。

それだ！ 更に突つこんでその点を厳しく尋ねてみると、いよいよそれに相違ない。駕籠脇について来たのは仙台名代の親分で仏兵助という者——ここで一行が暫く休んでいるうちに、兵助親分が、「おとっさん、あの駕籠の中へ、温あつたけえうどんをいっぺえ、くれてやってくんな」というような情けを見せたのが仇となつたようです。

うどんを一杯、駕籠のところまで持って行つてやると、そのうどんを食べるには、どうしても小手をゆるめてやらなければなりません。

兵助親分にしてみれば、なあに、俺がついている——いいようにしてやれというはらがあつたので、うどんを口へ運ぶだけの手のゆとりを許したものらしい。

そうすると、非常に有難がつて、旨うまそうにそのうどんを食べてしまつたが——食どんぶりべてしまふと井の中に、どうして入れたか小判が二枚あつたそうです。

誰が井の中の二枚の小判を最初に認めたか、それはわからなかつたが、とにかく、非常に神妙に、丁寧に、一椀のうどんにお礼を言つてしまつてから、あとの願いがまことに申し兼ねたことですが、用便がいたしたいということでした。

それは兵助親分の同意を得たわけではないが、誰か近くにいた目明めあかしのお目こぼしで、駕籠から出して、無論、嚴重な附添の下に雪隠せつちんへ案内をしたのが運の尽きでした。

あんまり静かな時が長く続くものですから、兵助親分が急に気になって、「長いじゃねえか」と言った時は、もう遅かったのです。あの田圃たんぼの向うを走る犯人の姿が、ありありと誰の目にも見えました。

「それ！」というので追いかけたが、先方の妙に早いこと、早いこと、まるで鉄砲玉が飛ぶように、稲田の蔭に没入した後は、どっちの方面から、どう探しても、行方きえ判断することでもできなくて、この始末。つまり、完全に罪人を取逃してしまったということになるのです。

「なに、井の中の二枚の小判ですか、それは、どなたも受取りや

しません、井と一緒に、さきほどまでこの店先に抛^{ほう}り出されて
ございました」

それだけ聞くと、白雲は、

「そうか」

と言つて、棒のように身を立て直すと、そのまま、すつくすつ
くともと来た松島の方へ歩み去るのであります。

二十三

右の要領をつきとめた田山白雲は、もうこれで、七兵衛の安
否そのものだけは充分だと思つたのでしよう、岩切から真直ぐ
に仙台へ帰ると、お松にも、その旨を言い含めたのでしよう。
それから即刻、宿を引払い、自分が主になつて、お松、茂太郎、

ムクを引具して、小舟で月ノ浦へ帰つてしまいました。

無名丸に着いて、改めてこの報告と、善後策について会議を開いてみると、駒井甚三郎もここに、七兵衛というものが、自分が想像していた以上の曲者くせものではないかと考え、何かほかに重大なる黒い影を持つ男ではないかと、胸に迫るものがありました。しかし、田山白雲は事柄を、もう少し単純に考えて言いました、

「どうでしょう、あの男は、何か重大な嫌疑をかけられて、尋常では解くに由なき立場にいるらしいから、いつそ駒井氏の知辺しるべをもつて、藩の上の方へ貫い下げ運動を試み、我々の一族で、決して怪しいものでないという証明の下に、直接じかに当つてみては」

白雲がそう言ったけれど、駒井は立ちどころには同意しませんでした。

「それで事が解決するならば、いつでももらい下げ運動は試むるが、どうも拙者の見るところによると、あの男は、何か相当の思慮があつて、我々との關係を秘して、我々の迷惑にならぬようにと苦心しているのではないか。そうでなければ捕方が彼を探索するために、当然まずこちらへ交渉がなければならぬのだが、何もない。従つてこちらへ累^{るい}が及んで来ない。そこはどうしても彼の好意でもあり、苦心の存するところと思うから、それをこちらから進んで明白にしてしまつたんでは、彼の好意と苦心を無にした上、おたがいの迷惑と犠牲を大きくするようになるかも知れぬ。もう少し考えた上で、おたがいの安全を期しつつ、彼を無事にこの船中へ取納める方法を講ずるがよろうではないか」

「なるほど、そのへんもありましような。窮迫しても彼が、駒

井氏や無名丸を肩に着ようとしないうし、直接にここへ目指して逃げて来ようとしないうところに、彼の思慮は充分見えるようです。では公然のもらい下げ運動は見合わせるとして……」

その次の方法でありました。そこへお松が意見を述べたのは、「わたし一人で出かけてはいかがでしょう、わたしならば人様も疑いますまいから、巡礼の姿にでもなつて、そうしてムクを連れて行けば、きつと探し当てられると思います。わたしをやつていただきますよう」

「いや、それはいけまい、言語風俗の違う若い娘が巡礼姿にやつすとはいえ、たった一人で、その辺をうろつくなんぞということが、かえつて人の眼につき易い^{やす}。それにムクは、また目立ち過ぎる」

評議半ばのところへ、扉をやや手荒く外からおとなう者があ

ります。

「誰だ」

扉を開いて、板張にかしこまっている男。

「船頭でございます」

「何か用か」

「あのムクが帰りましたそうでございますが、どうか、さきほどお願^{ねげ}え申した通り、ムクをお借り申してえんでございます」

「うむ……」

と駒井が、急に返答をしないでいると、白雲が船頭に向って言いました、

「ムクを借りてどうしようというんだ」

「はい、ムクをお借り申しまして、マドロスの奴を追いかけてみてえと思つて、殿様にさきほどお願^{ねげ}え申してみたでございます。」

マドロスの野郎、思えば思うほど胸の悪くなる畜生だ、殿様の御恩も忘れやがって、わしどもを踏みつけにしやがって、どうしても腹が癒えねえから、ひとつ、ムクが帰ったらば、ムクをお借り申して、あいつのあとを追いかけて、とつ捕まえて、思うさまひとつ懲しめてやらねえことにや……」

船頭は、余憤堪え難き風情で、駒井へ直訴に來たものらしい。ところが駒井は、いいとも悪いとも言いません。

つまり、うむ、では、直ぐに出かけてつかまえて來いとも言わないし、あんな奴は問題にするなとも言わないのは、駒井としてそこに若干の苦衷が存するものらしいことを、田山白雲も最初から感じていました。あのウスノロのマドロスめ、言語道断の奴ではあるが、船長としての駒井甚三郎が、その言語道断の奴を一刀両断にも為し難い——というのは、駒井甚三郎はその秀拔

な頭脳を以て、最近の學術と、經驗と、応用とを以て、一艘いっそうの船を獨創したことは事實であるが、それを首尾よく運送して、初航海を無事にここまで安着せしめた成功の大半は、この放縱無頼ほうじゅうぶらうのウスノロのマドロスの力に負うところが無いとは言えない状態なのだ。學問は無く、品性は下劣であるにしても、その世界中を渡り歩いて、海を庭とし、船を家としていた生活から生れた體驗は、駒井が、書物や、學理や、少々の実験からではどうしても得られないものを、こいつが豊富に持つていました。それは今度の初航海に充分に証明されたところであり、本人が、こつちにとつてそれほど貴重な經驗を、マドロスとしてあたりまえの働きとして、鼻にかけるところまでは行つてなかつたらしいが、駒井にとつて、天の助けとも、渡りに船とも、なんとも、有難い唯一無二の羅針となつたものです。この男がいなかる

うものなら、船は、難破せしめるほどのことはないにしても、ここまでの無事廻航はまず覚束おぼつかない。或いは途中、不意にどこかへ寄港して、腹帯を締め直す必要はたしかに存していたと見なければならぬ。同時に、不意の寄港がもたらすところの不便や、誤解や、さまざまの障碍を想像すると、マドロスにあつては尋常茶飯じんじょうさはんの労務が、駒井には無くてならぬ依頼——船中の誰よりも、むしろ船の次には、その男が必要と認めないではいられなかったと思われる。

自然、今後の航海、その針路としてはまだ確定はしていないが、それは当然房州から仙台まで廻航して来た以上の難航が予想される。その際に於てのあのマドロスの必要は、全くかけがえのない絶対的のものである。伊豆系統の熟練な船頭はいるけれども、それは仕事の性質と経験が違ふ。そう思つて見ると、

許し難き放蕩ほうとうも許し、度し難き不埒ふらちも見て見ぬふりをしておらねばならなかつた駒井甚三郎の苦衷というものが、白雲にはよくわかつてくると共に、自分というものの不在中を残念がらずにはおられない。

なあに、あのウスノ口如きは、自分がいさえすれば頭から威圧して、文句は言わせもしないのだが、船長としての責任ある地位で、かけがえのない無頼の労働者を、だましましたし使用する苦衷は、自分のようにそう一本調子にいくものでないことを、白雲といえども駒井のために推察するだけの思いやりは持つている。そこで、白雲は身を乗出して言いました、

「うむ、そのこともあつたつけな。許し難い奴だ、あのマドロスめ——もう一ぺん締めてやらなければ。よしよし、その方も拙者が引受けよう、七兵衛おやじの方といつしよに、ウスノ口

の奴も近いうちに見つけ出して、有無^{うむ}を言わさず、これへ引きずって来てみましょう。七兵衛おやじは思慮があるだけに雲をつかむようだが、ウスノロの奴は、なあに直ぐと、とつ捕まえますよ。第一、あの赤髯^{あかひげ}と碧^{あお}い眼で、日本娘さんと道行なんて、ドコまでそんなフザけた洒落^{しやれ}が利^きくものか、いくら奥州の果てにしたところで、あれで晴れての道中ができたらお慰み、どこかに隠れ忍んでいるうちは無事だが、ウスノロとあの娘さんとは、やがて頭も尻尾も丸出しにするのは眼の前だ、或いは早く追手がかかってくれるようにと待っているかも知れない。これは、船頭君の腹立まぎれではないけない、拙者が行きましょう。拙者が行って、ズルズル襟首を持って引きずって来ます。ウスノロの奴めまた泣くだろう、大きな図体をしてザマはない」

「田山先生にあつちやかないません」

昂奮しきつた船頭も、白雲画伯がウスノロを捕えて引きずつて来る時の光景を想像して、多少おかしくなつたらしい。

そこで白雲は、駒井を促して言いました、

「駒井氏——では、そういうことに願ひましょう、拙者ならば、旅には慣れているし、手形も持っている——ここまで来た以上は南部領へも足を踏み入れてみたい希望もある。この船の休養と修理の間を、拙者は右の通り一石……三鳥の獲物えもののため、また旅に出ましょう」

船の休養と修理のためにも、少なくとも約一二カ月はここに碇泊ていはくしている必要を聞き知っている白雲は、ここでその期間を利用し、行方不明の二人の船族と、それからなお進んでは風景の見学と、つまりいわゆる一石三鳥の妙案を独断的に提出すると、駒井甚三郎も、

「では……そういうことをお願いしますかな」

白雲一人に使命を託することが、粗放のようで、実は最も安全にして確実な方法だと思案したのでしよう。お松はムク犬と共に、ぜひ白雲先生のおともにと申し出たけれど、それはかえって辛抱する方がおたがいのためだということを説得されて、それが呑込めない子でもありませんでした。

かくて白雲は、例のいでたちを以て、その翌朝、ひとりこの船を立つて、一石三鳥の目的のために出かけることに評議がまとまりました。

その出立の前に当って、賢明なるお松は、こういうことを思案しました——そんなこんなの出來事のために、自分の心に大きな悩みを持たせられているけれども、それよりも、こんなことのために、船長の意気を沈ませてはならないこと、船中の人々

の氣を腐らせてもいけないということ、だから、自分がまず誰よりもつとめて快活にして、船長をはじめ皆の氣を引立てることにつとめなければならぬ。それには、ひとつこの人数を会して、陽氣な慰安会を開いて、一つは田山先生の門出を祝し、一つは船中の意氣を盛んにしようとの案を立て、それを駒井船長と白雲画伯とに申し出で、欣然同意を得ました。

この慰安会は船中の人だけに限らないで、せつかくのことに、この港に碇泊しているすべての船と、この港附近のあらゆる漁村に触れを廻して、参会觀覽を許すということを提議して、お松が委員長で準備を進めました。

たてやくしや

立役者には清澄の茂太郎というものもあれば、お角さん仕込みの江戸前の、ムクの縄ぬけ、輪ぬけの芸当というのも、ここへ持ち出して悪いということはない。その他、乳母^{ばあや}、船頭さん、

金椎さんまでが、どんな隠し芸を持っていようとまではかられぬ。
お松さん自身は委員長としてのほかに、太夫元、たゆうもと狂言作者、舞
台監督等のすべてを背負って立たなければならないが、事と次
第によつては、舞台上の一役をさえ買つて出なければならない
都合になるかも知れぬ。

かくてその翌日――

果して当日の慰安会は、清澄の茂太郎の三番叟を以てはじま
りました。

田山白雲も覚束ない手つきで、手品を一席やりました。

登の乳母が三味線をひき、房州の船頭衆が唄いつ踊りつしま
した。

見物は船の甲板上にいっぱいあふに溢れたけれども、他の船から
も、岸の上からも見られるようにしておきましたから、広くも

あらぬこの港の津々浦々は、総出の見物です。

それから、飛入りをうながすと、最初ははにかんでいたのが、一人やり二人やるうちに、勇気が出て、ところの名物の総ざらいがはじまったようなものです。

そこで、当日は臨時の大祭が行なわれたようなもので、船の人も楽しむと共に、土地の人々をも楽しませることができ、陽々たる和氣がたなびいて、お松の考案は百分の効果をあげたという次第です。

二十四

かくてその翌日、田山白雲は一石三鳥の目的をもって、暫ししばしの旅に立ちいづる。

しばしの旅のつもりではあるが、旅という気になってみると、
またしても漂浪性の血が脈を立てて、一石三鳥の重任ある身で
ありながら、白雲悠々の旅心が動くに耐えないのです。

つまり、船に来てから人に逢つてみると里心がついて、この
当座は、人間界の代物しろものでしたけれども、ここでまたも放たれた
気分になりました。放たれたといつても、誰も白雲を囚とらえんと
したものはないのですけれども、人事のことがあれこれと左右
に群がると、どうしても旅心そのものは抑圧されてしまいます。
しばしでも人事を離れてみると、旅心というものは、生き生き
と盛り返して来るものなのです。

だから、旅心といえていば体がよいけれども蛮性に帰るのです。
近代人の社会性をはなれて原始の漂浪性に帰るのです。歴史は
人類の野性、獣性、蛮性、無宿性、無頼性を訓練するために、ま

ず人間に恋愛を教えました。恋愛が次に羞恥しゆうちを教えました。羞恥が人間に衣服を教え、衣服が人間に住居を教え、住居が人間に近隣を教え、団体性を教え、国家性を教え、社会性を教ゆるところの最初のものとなります。

原始の人類は遊牧の民でありました。彼等は食のあるところが住のあるところでしたから、漂浪がすなわちその生存のレールでありました。ですから、今日に至つても、人間をひとりで置けば、当然この原始性への逆転を見ないではおられません。ひとりで置けば人は漂浪に帰ります。そうして道徳的には一種の放蕩ほうとうの人とならざるを得ないのです。酒色に溺おぼれるだけが放蕩ではない、人間社会の約束を無視して、旅心をほしいままにせしむるは即ちこれ一つの大なる放蕩であります。さればこそ、芭蕉翁の如きも、西行法師の如きも、古今無類の放蕩漢と言え

ば言われる。多くの人が、この種の放蕩漢になれないのは、前に言う如く、まず恋愛を教えられたその枷かせなので——恋愛あるが故に妻があり、妻あるが故に子があり、子があるが故に隣り社会のお附合いに柔順にならなければならぬ弱味を、人間というものが体得してくる。そうして、人間は完全に原始人への逆転を防止されて、善良なる国民に馴致じゅんちされると共に、自己本来の旅心は極度の暴圧こうむを蒙こうむっている。古来、人間に加えられた重大なる抑圧と、苛辣からつなる課税の筆頭は恋愛でありました。

石巻へ来て、ともかく、ここで一泊の上、一石三鳥の使命を再検討しなければならぬ自省心によつて、白雲の漂浪性が取りとめられたようなもので、もしこのことなくば、白雲の今度の旅にも全く糸目というものがなく、このまま三日月の円くなり、明月の三日月になるまで、南部領あたりを巡っていたかも

知れないのです。

石巻の港の、田代屋とある宿へ泊りを求めて、さて、第一次に為すべきことは、よき道案内の地図を求めることでした。相
当の地図は、船で駒井の文庫から写し取って来たものの、内地のくわしいのになると、その土地で求めるか、或いは実地について、聴取図、見とり図のようなものを作って置いてかからねばならぬ。

「地図はあるかな、奥州一国の全図でもよし、この附近の郡村の地図でもよろしい、何でもいいから一つ貸してくれないか」
こう言つて宿へ頼むと、

「うちには、いい地図はござりませぬ——この間、お客様が置いてござつた地図が一枚ありましたはず、あれをごらんに入れましようか」

「何でもいゝから見せてくれ」

「持つてまいりましょう」

女の子が絵図を持つて来た。それで見ると、仙台領の南の部分、松島から石巻、牡鹿半島の切絵図——あまり上手でない手つきで、棒を引いたり、書入れをしたりしてある。

「結構結構、少しの間、貸してくんな」

白雲は、その絵図を篤^{とく}と見入りました。そうして、自分のこしらえて来た図面と参照して、多少の書入れをする。

そのうちに、絵図面の終りの方を見ると、同じ手筆^{しゅひつ}で、

「清澄村 茂太郎所持」

と書いてある。

「おやおや、ここにも茂太郎がいたぜ、同じく清澄村の住人……」
田山白雲は、これを、先頃の笠島の道祖神の絵馬と思い合

せないわけにはゆきません。

思い合わせて見れば見るほど、あれと同じ人間の手になるのです。

そこで、また女中を呼んで、いつたい、この絵図を置いて行つたお客様のは、どんなお客様であつたか——え、え、それは、これこれ斯^{かよう}様な人でござりまして、毎日毎日のように出てお歩きになりました。なんでもお江戸から船のお着きになるのを待兼ねての御様子でございました。あ、そうか、そうして年頃は、うむ、なるほど……

それこそ七兵衛おやじに紛^{まぎ}れもないと、白雲が直ちに覺りました。そうしてみると、あの道祖神の絵馬も、ますますあのおやじの仕業に違いない。なお、してみると、あの絵馬は、特に自分の筋道^{おもんばか}を慮^{おも}つて、そうして目印に、こちらの目につき易^{やす}い

ようにとの親切でしたことだ。今ここで、わざわざ清澄村茂太郎の署名をした絵図を忘れて行つたのも、何かこれを我々のための合図の下心ではないか。なかなか細かいところに親切のある男だな。

ああ、そう言えば、なるほど——何のこつた、迂濶^{うかつせんぼん}千万、今までのことにまぎれて、それを忘れていたが、あの名取川べの蛇籠^{じやかごづく}作りの時に、あの男が、房州に残し置ける拙者の財産を、急の場合にかき集めて、石巻の宿まであずけ置いたということだったが、そうだ、何といったかな、その宿の名は——そうそう、田代の冠者^{かんじゃ}で覚えている、田代屋というのだ、その石巻の田代屋というのへ、房州に残し置いた拙者の財産を持って来て預けて置いたと、名取川であの男が確かに言つた——この宿が、その田代屋ではないか、そうだ、田代屋だ、この帳面にある。

急にその事を思いついた白雲は、番頭を呼んで、その由を申し入れてみると、番頭の言うには、確かにお預り申してあります——土蔵へ蔵いこんでございますから、只今、取り出してごらんに入れます。そうか——それはよかった。白雲はここで思いがけなく、房州で別れたわが子にめぐり会われるような喜びを感じました。

土蔵から、その財産を取り出して来てくれる間のこと、田山白雲は、地図を按じて、あん追手搦手おうてからめての二つの戦略を考えはじめました。

追手というのは、七兵衛方面のことで、搦手というのは、ウスノロと兵部の娘の馳落方面のことをいう。この二つを、これからどう目当てをつけていいか、ここ石巻を策源地として手段方法を案じはじめたのです。

二十五

つらつら地図を按ずると、どうもなんとなく、第六感的に、北東部が気になつてならない。ここから北東部といえ、北上川の支流にあたる追波、おっぱ雄勝方面と、それから自分がいま経て来た万石浦から、まんごくうら女川湾をいいます。

七兵衛の逃げた方面というのは、全然雲を掴むつかようなものだが、絶体絶命の場合には、方角を選ぶ余裕は無いにきまつているが、しかし、彼の本心の磁石は、必ずや月ノ浦の無名丸に向つてゐるに相違ない。一旦はやみくもにどちらへ逃げようとも、やがては、月ノ浦をめざして慕い寄ろうとする心持はよくわかるから、西南北へ向つて遠く走り過ぎる心配はない。マドロス

並びに兵部の娘らしいのが、万石浦を小舟で渡つたというのを
見た者があるというから、これは、いずれその辺の、木の根、石
の蔭に当分こらえていて、たまらなくなれば這い出すのだ、こ
の方は発見にそう骨が折れない！ と、田山白雲は最初から夕
力をくくっているのです。

いずれにしても、円心はこちらにある、牡鹿おじか、桃生ももふ、志田、仙
台の界限かいわいをそう遠く離れるに及ばないということを、白雲は白
雲なみに断定して、漫然とこの北上川の沿岸を漂浪しているう
ちには、何とか手がかりがあるだろう。奥羽第一の大河として
の北上川の沿岸をぶらついていいうちに、その風光を画囊がのうに納
めなければならぬ。本来はこの方が本業なのだが、ここに白
雲の仕事がまた一つ加わって、つまり、一石四鳥の目的のため
に、当分はこの辺をぶらついて、ということに思案を定めまし

た。

その思案が定まった時分に、番頭が蔵くらから七兵衛おやじからの預り物、つまり、房州洲崎の暴動の際に、手早く、かき集めて、ここまで持ってきてくれた白雲の財産——といつても、写生画稿が主であつて、一般経済の上には大した価値のある代物ではないが、自分の丹精の無事なのを見て、

「これ、これ——まず、これで安心」

白雲は、一応あらためてみて大安心をして、その荷物をまた一からげ、帰りまで更に保管を託して置くことにしました。

そうして、夜具をのべてもらい、枕に就くと女の子が、六枚屏風を持って来て、立て廻してくれました。六枚屏風は少し大形おおぎようだと感じましたが、その手重いところが、また、旅情の一つと嬉しくも思いました。

そこで、枕について、それとなく立て廻された六枚屏風を見ると、それは月並のつく芋山水いもさんすいを描いたものでなく、いろいろの文字を寄せ書してある様子が異っているから、また少し枕の向きをかえて見直すと、一目でわかる旅姿の芭蕉ばしやうの像を描いて、その上に文章が記してある。

「終つひに道ふみたがへて、石の巻といふ湊みなとに出づ。こがね花咲くと詠みて奉りたる金花山、海上に見わたし、数百の廻船、入江につどひ、人家地をあらそひて、竈かまどの煙たちつづけたり。思ひかけずかかる所にも来きたれるかなと、宿からんとすれど、更に宿かす人なし。やうやうまどしき小家に一夜を明す」これを讀んで田山白雲が、ははあ、「奥の細道」だな、「奥の細道」も、松島や平泉のところの名文は空そらに覚えてゐるが、こんなところはあまり気がつかなかった。宿からんとすれど、更に

宿かす人なし——か。なるほど、芭蕉翁の如き名人でもこれだな、我々が、こうして田舎廻りいなかをしていながらも、とにかく、宿かす人はある。一とせ文晁ぶんちやうは、松平樂翁公につれられて仙台へのり込んだそうだが、豪勢な羽ぶりであつたそうだ。当節は絵師といえども、名声を得ればお大名だが、昔は芭蕉ほどの大家聖人でも、我々に劣つた旅をしたものだ。しかしそういう貧しい旅のうちに、人間の真相というものが本当に掴めるのだ、人生の深奥しんおうというものに、かえつて触れることができるのだ、有難いものだ。

白雲はガラになく、しんみりと、こんなことを思いやつて六枚屏風をながめているが、この六枚屏風には単にこれだけのことを記してあるのではない、なお、盛んに、あとからあとからとつぎ足らしい筆蹟が続いているのである。

次のは片仮名文字入りで、

「潮流ト河流トノ關係デ、北上ノ河口ガ土砂デ塞ガツタ、北上
ノ無尽蔵ナ水利ガ殆ンド無用ノ長物ニナツタ、石巻ノ衰ヘタ
原因ハ如何ニモ明白^{いか}デアル、水ニ鮭^{さけ}、鮪^{まぐろ}ガアル、陸ニ石、糸
ガアル、長十郎梨ガアル、雄勝ノ硯石モアル、渡ノ波ノ塩ハ
昔カラ名高イ物デアル、アタリノ禿山^{はげやま}ニ木ヲ植エ、荒蕪^{くわうぶ}ノ地
ヲ開墾スルナド興スベキ産業ハ天然ノ景色ト相俟^{あひま}ツテ有志ノ
志ヲ待チツツアル、牡鹿唯一ノ都ハ無意味ニ廢頽^{はいたい}ニ帰スベキ
デハナイ、石巻恢復ノ策三ツアル」

と、版下でも書くようにかつきりと書いて、その下に「平五郎」
と銘を打つてあるのは、つまり平五郎という人の石巻觀を率直
に述べたものらしい。その次に「野老庵小集」とあつて、

風呂吹に酒一斗ある夜の会 木犀

風呂吹や尊き親に皿の味噌 其北

風呂吹を食へば蕎麦湯をすすめ^{けり} 陽山

風呂吹の賛宏大になりにつけり 平五郎

ここで句会を催した逸興であるらしいが、その次に、
六朝風^{りくちようふう}の筆で、

芒鞋布韃路三千^{ぼうあいふつ}（芒鞋布韃路三千）

追逐看山臨水縁^{おひおひ}（追逐に山を看^み、水縁に臨む）

唱出俳壇新韵鐸^{しんゐん}（俳壇に唱へ出す新韵の鐸^{たく}）

声々喚起百年眠^{こゝろ}（声々に喚起す百年の眠り）

身在閑中不識閑^{あした}（身は閑中に在つて閑を識らず）

朝躋鶴巔夕雲開^{かくてん}（朝に鶴巔を躋え夕に雲開く）

瓠壺之腹縦摸筆^{こゝろ}（瓠壺の腹に縦に筆を摸^{さぐ}り）

收拾五十四郡山^{さくし}（收拾す五十四郡の山）

打見たところでは一律のようになっているが、一絶句である。この詩と句とによつて考えると、平五郎という俳諧師はいかいしが、遙々はるばるここへ旅に来て、同好の士がこれを迎えた。平五郎という人は近世の俳人で、そうして、これによつて見ると、都から遙々旅をして来た人だ。路三千とある。山河遍歴に於ては芭蕉に勝るとも劣らない人と見える。そこで白雲も、身に引比べて何かしらこの六枚屏風の余白に一つ書いてやりたい氣になつて、御苦労千万にも、一旦ついた枕をあげて、帯を締め直し、行燈あんどんをかき立て、筆墨の行李こうりを開きにかかりました。

白雲は屏風の余白へ何か書いてみたい氣になりましたが、さて、お手前ものの絵を描く氣になれませんでした。

何か字を書きたい、といったところで、その文字も咄嗟とつさに平仄ひようそくを合わせて詩を作るの余裕もなく、また、あまり自信もない和

歌や俳句の速成をのたくらせて、この道の泰斗名家のあとを汚すほどの向う見ずもやりたくなく、思案のはてが、いきなり、

ゆく春や鳥啼^なき魚の目はなみだ

と、ぶつつけ書きに、墨壺の水のゆるすだけを大きくなくりつけて、そうしてその下に、魚と、鳥と、水と、木の枝とを描いて、ああこれでよしと心が落着き、ひとり感心しながら再び枕につきました。

何の理由で、田山白雲が特にこの句を認^{したた}める気になったのだ

か、それはわかりません。ただこの場合、むやみにここへこの句を書いてみたくなつたから、その衝動にかられて書いてみただけのものでありましょう。しかしながら、即興といつても、衝動といつても、人間は日頃心にないことを、自発的に発表するはずはありませんから、田山白雲は、日頃この一句が何がな

しに好きで、記憶に溢あふれていた結果と見なければなりません。
それでしょうやく、白雲の即興の昂奮もどうやら鎮静して、そ
うして枕につくや、ぐつすりと熟睡に落ち込んでしまいました。

二十六

その翌日、白雲は漫然と結束して宿を立ち出でると、早くも北
上川の渡頭ととうの上の小高いところに立つて、北上川の北より来きたつ
て東南にのぼり流るる勢いに眼を拭いました。

「ははア、これが北上川だな——」

白雲はここで初めて、北上川というものの印象を新たにしま
した。

北上川そのものを見ることは今にはじまったことではないの

です。現に昨晚泊った石巻の港が、その北上川の河口にあるので、今日はまたその沿岸を溯さかのぼつて来たのですから、北上川とは絶えず道連れになつて来たのに相違ないが、ははア、これが北上川だなど印象を新たににして、例によつて限りなき旅心を湧きたたせたのは、この渡頭に立つた時が最初であると言わなければなりません。

立つて北上川及びその彼方かなた、漠々と連なる陸奥みちのくの平野を見ているうちに、白雲は旅心濛々りよしんもうもうとして抑え難く、やがて大きな声をあげて歌い出しました。

感来きたつて吟声ぎんせいが口をついて出でるのは、白雲も元来が多情多恨の詩人的素質を多分に持つて生れたのみならず、これは清澄の茂太郎を育てつつある間に、それにかぶれたところもあると見なければなりません。その白雲の吟懷を、清澄の茂太郎がま

た反芻はんすうして輪をかけるということになり、即興と出鱈目でたらめとに於ては、師弟いずれが本家だかわからないくらいになっているのであります。

今や北上川の渡頭の辺ほとりに立つて田山白雲が歌い出したのは（むしろ唸り出したのは）——

「三代の栄耀えいよう一睡うちの中にして、大門だいもんの跡は一里こなたに有り、秀衡が跡は田野に成りて、金鶏山のみ形を残す。先づ高館たかだちにひでひらのぼれば、北上川南部より流るる大河也。衣川ころもがはは和泉ヶ城いづみじやうをめぐりて、高館の下にて大河に落入る。康衡が旧跡は衣ヶ関やすひらを隔てて、南部口をさし堅め夷えびすをふせぐと見えたり。偕さても義臣きしんすぐつて此城にこもり、功名一時の叢くさむらとなる。国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て時のうつるまでなみだ涙を落し侍りぬ。はべ

夏草やつはものどもが夢の跡」

これは、やはりこの土地の形勢によつてうつされた文章でないことはわかり切つておりますが、白雲はどうしても、これをこの場で歌つてみたい氣持になつたのは、「まづ高館にのぼれば、北上川南部より流るる大河也。衣川は和泉ヶ城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る」という氣象がここでピタリと來たから、それでこの文章をここで高らかに吟じてみたくなつたのでしょう。それは昨晚の屏風に、無性に「ゆく春や鳥啼き魚の目はなみだ」と書いてみたかつた心持、時は、秋であるのに、往く春の心が抑えきれなかつたのと、同じ衝動でありましょう。そうしてまた、北上川なるものの相がいかにおうもうも汪蒙として、古調を帯びたところに、白雲の心胸が打たれないわけにはゆかなかつたのでしょう。

こちらへ来る間にも、荒川だとか、大利根だとか、那珂^{なか}、阿武隈^{あぶくま}、近くは名取川に至るまで、大小いくつかの川を渡つては来ているけれども、この北上川へ来て見ると全く違つた感じ——どうやら奥州の夷^{えびす}——更に遠くは日高見の国をまで眼前に思い浮べ来つたものと見えます。

キタカミの文字がヒタカミの訛^{なまり}であるという考証を仙台で聞いた。してみると、人文の未だ^{いま}剖判^{ほうはん}せざる上古、武内宿禰^{たけのうちのすくね}や、日本武尊の足跡がある。キタカミとヒタカミは果して相通じているか知れないが、この川の氣象を見ると、悠々として北から流れ来つて西へ溯^{さかのぼ}るところが、他の河川の北より出でて東海に注ぐ河相と趣を異にしている。北上の名の字面^{じづら}も単純ではあるが、大きくして淋しい、または何となくこの川の川相を尽している、なんぞと字義の詮索にまで及んでみました。

白雲はそうして、のぼせきつて川をながめている間に、もとこの地点は渡頭のこと、仙台から南部へ通ずる要路でありますから、いかに北地のこととはいえ、一人、二人、三人の旅人が川岸へ集まつて来るのであります。漁者ぎょしやもあれば樵者しょうしやもある、農工の人であれば旅の巡礼もある、馬もある、駕籠かごもあるうというものです。それがやがての間にかの数の数にまとまつて、そこで一同が誰言うとなく、ブツブツと言ひ出しているうちに、じれつたがる声、船頭を呼ぶ声が口々を突いて出でたので、それとは少し離れて高いところになっている地点で、右の如く風景をほしいままにし、空想を食物としていた白雲の耳にまで届くようになりました。

「なるほど……舟が出ない、拙者のように風景を食物として、心目を遊ばせている身とは違い、人生の必要あつて旅程を急ぐ

人にとつては、待たせられるのは長いものだ、待つ身はつらいものだ、なるほど、待たせるにしても、これはどうも少し待たせ過ぎるな、いくら北のハテの暢気のんきな土地柄にしても、あまりに悠長な船出ではある、自分が来てからでも、これだけの時間、もうこれだけの人が集まっている、船頭が顔を出してもよかりそんなものだ」

と、舟を待つ人の不平に白雲はそろそろ共鳴したが、なるほど舟は川の下に見えるが、船頭がいない。

「オーイ、船頭どん」

「どしやむしや船頭どん」

盛んに呼びたてているが、船頭が返事もしないのは、あの小屋の中にいないらしい。いないとすれば、ドコぞへすつぽかしたのか、そうでなければ向うの岸へ舟を渡して行つて、向うか

らまた人をその舟へ乗せて渡るといふ段取りだろう。ははア、向うの岸にも船頭小屋があり、舟があるにはある。舟といえ、この渡しまへの舟の形はおかしい、舳うしろも艫うしろもない、ひきがえるを踏みつけたようなペツタリした舟だワイ、あちらの岸の舟もそうだ。

いったい、川舟と草鞋わらじは土地土地によつて違う。川舟の形というものは、土地のものがその河流の水勢によつて経験的に工夫した形が多いから、一定したものだと思うと大きに違う。例えば、富士川の急流には富士川の急流に向くように底までがちゃんと附木つけぎツパのように薄くしてある。利根川の舟でも、上流、中流、下流、皆それぞれ違う。今ここへ来て北上川の舟が、ひきがえるを踏みつけたようなペツタリした舟だと言つて、それを笑うのは間違つてゐる。草鞋にしてもそうだ、平地を歩くも

のは平地を歩くように、山路を歩くものはそのように、走つて歩く商売の草鞋と、ずしりずしりと踏みしめて行く人の草鞋とは作り方が違う、形によつて軽蔑してはならないのだ。

白雲は、そんなことまで思い出していたが、まだ船頭の影も形も見えない。不平がようやく沸き上ってくる。いくら東北人は鈍重であるからといつて、これではたまらなくなるのも道理だと考えました。

いつたい船頭は、どこに何をしているのだ。こつちの岸の舟小屋にだつて一人や二人いなければならぬではないか。いないとなれば向うの小屋に何をしている。

悠々たる白雲も、ついに少し癩癪玉^{かんしやくだま}が焦^じれてきて、向うの岸を見つめていたが、どうも遠目にはつきりと見えないのをもどかしく思いました。眼を拭つてもう一度見直そうとした途端――

白雲がはつしとばかり思い当ったことがあります。われながら迂濶^{うかつ}千万、実は昨日、船を立つ時に、駒井氏から借用して来た^{とおめがね}「遠眼鏡」というものが、ここにあるではないか。この行李^{こうり}の中に納めて来て、こんどはこれをひとつ充分に活用してやろうとの楽しみが、こんどの旅程の一つの新しい景物と期待していたのを、今まで忘れていたのだ、こういう時だ、この時だと気がつく、白雲は急いで行李を解いて、その中から取り出したのが最新式の「遠眼鏡」であります。

二十七

この「遠眼鏡」をもつて、田山白雲が対岸の渡頭の船頭小屋のあたりに照準を据えた時、不意に右の船頭小屋の後ろから雲

つくばかりの大きな男が飛び出したのを認めました。

ははア、出たな、裏の方から出たな、出は出たが、今までの悠長さに引換えて、これはまた、すばしっこい飛び出し方だ、と呆あきれているうちに、その飛び出した大男が、河岸かしの舟の方へは来ないで、右手の小高い方へ一目散に何か抱えて駆け出して行く。どうも変だと見ていると、続いてまた、同じ船頭小屋のうしろからバタバタと駆け出した大小二つの人影がある。そのあわてて駆け出したところを見ると、まさしく前に駆け出した大男を追いかけて行くのだということがありありと分ります。

ところが、前に駆けけて行く大男は、身体こそ頑丈がんじょうそうだが、駆け方は存外不器用で、何か河原の石ころか、杭くいかにつまずいて仰向けにひっくりかえった状さまは、見られたものではありません。そうすると、それを幸いに後ろから追いかけて来た大小二つの

人間が、いきなりそれを取押えて組伏せにかかりました。そこで、大男がはね起きようとする、二人が必死と抑え込もうとする、三箇が川の岸で組んずほぐれつの大格闘を始め出したのです。

遠眼鏡で委細を見ていた田山^三白雲は全く呆れてしまいました。いいかげん長い間お客をおつぽり出して、焦^じらせて置きながら、ようやく姿を見せたかと思うと、こんどはまたお客の眼の前で、素敵なロケーション^{あやつ}をおつぽり始めてしまった。船頭は舟を操^{あやつ}ればよろしい、船頭がロケーション^{あやつ}をして見せることはふざけ過ぎている。また、こちらに待焦^{まちこが}れている客人は、ロケーションの余興を船頭に向つて要求はしていない、船頭は早く船を出すようにしてくれればいいのだ。白雲のように最新の機械はもってはいないけれども、待ちくたびれたすべての客は、こ

の船頭小屋から飛び出して来た三人の人影によつて行なわれつつある対岸の大格闘を、ありありと肉眼で見て、またわき立ちました。

「何してやがるんだ、人をさんざん待たせて置きながら、自分たちは勝手な芝居をしていやがら、フザけた船頭だ、なぐつちまえ」

江戸ッ児なら、こんなに言うでしょう。そうかと言って、ここからでは弥次も飛ばせず、退屈まぎれに事のなりゆきを遠目に眺め渡して、むだな力瘤ちからこぶを入れるばかりです。

そのうちにむつくりはね起きたくだんの大男、もう立ち直つたと見ると、大変な馬力で両方からとりかかる大小二つの、たぶんこれは船頭親子であろうと見られるところの二つを、むしろ返り討ていの体で突き飛ばし、はね飛ばし、その暴れつぷりの不

器用ながら猛烈なることは当るべくありません。あとから追いかけた船頭親子は、あべこべに突きまくられ、はね飛ばされ、蹴倒されつつ、ついには大声をあげて救いを求むる体です。

それを見ると、田山白雲、急に気がついたことがあると見え、心急いだ人が電話口でお辞儀をするように、遠眼鏡を一層深くのぞき込んで、

「ア！ ウスノロ！ うすのろだ、あいつだ……」

と、下にいる待合客のすべてがびつくりしたほどに一つの叫びを立ててしまいました。

事実、白雲が絶叫したのも無理がありません。そう思つて見ると、ことに遠眼鏡という視力の飛道具を使用して見れば、いよいよそれはそれに相違ないことで、眼の玉の碧いことあおはわからないが、髪の毛の唐もろこしの房のように赤いことが、はつ

きりとわかつてくる。

このウスノロの力の強いことは、さすがの白雲も一時はタジタジとさせられた体験がある。なかなかいなどの老人子供の手に合うものではない。ああして立て直して返り討の形になり、二人に悲鳴を挙げさせているのも無理のないところだが、それはそうとしてあいつをここで見ようとは思わなかった。もとよりあいつを探しに出た目的の旅ではあるが、こんなところで、あんなことをしているあいつを、こうして発見しようとは思わなかった。

何のためにあいつ、こんなことをしているのだ——それはわかつている！ というのは、あのウスノロがこういうことをやり出すのは今に始まったことではない、あいつは本来がウスノロであつて、ジゴマでもなければ、ギャングでもないのである。

強盜殺人をしようの、詐欺横領をしようのというほどのたくらみはあいつには無いのだ。あいつが人を犯し、人から咎められることのかぎりは食と色との外に出ないのだ。食といったところで、あれのは、いよいよ飢えに迫って堪えられなくなったところに至って、初めてノコノコと人里へ出て来て、その当座の飢えを凌ぐだけのものをかっぱらって来る以上の仕事はできないのだ。それから色、すなわち性慾のことだって、あいつのは、なにも特に巧言令色に構えこんで、色魔だとか、誘惑だとかいう手段で行くのではない、眼の前へ異性の女の肉のかおりがうごめいて来る時に、ついついたまらなくなつてかぶりつくまでのものだ。

今の事情が、またそれを証明させる。あいつ無闇に親船を駈落して来は来たものの、本来あの兵部の娘にしてからが、そんなに

思慮の計算のあるや、からではない、人の金を持ち出して、二十日余りに四十両の五十両のと使い果してから、この世の名残りなごとしやれるようなしやばつても持ち合わせてはいない。ただ盲目的に着のみ着のままで飛び出して来たのだから、行当りばつたり、行詰るにきまつている。行詰った時、最初の要求は、彼等にとつては死でなくして食である。少なくとも、ウスノロの奴め、雪時の熊のように、どこかへ食物をあさりに出るに相違ない。食物を人里へあさりに出たが最後、眼の色、毛の色の変つた珍客——昔二ツ眼のある人物が、見世物の材料を生捕るために一ツ眼の人の島へ押渡つたところ、反対に二ツ眼のある人間が来たから取つかまえて見世物にしてやれ、と言つてつかまつてしまったというのと同じ運命に落つるにきまつている。白雲が最初、七兵衛おやじの影を捕えるのはかなり難儀であろうが、

ウスノロの方は存外てまひま手間暇がかかるまいと安く見ていたのが的中しました。彼は今、飢えに迫つてあの船頭小屋の中へ何か食物を漁あさりに來たのだ。そして船頭親子に見つかつてあの醜体だ。白雲は自分の想像の凶星を行つてゐるウスノロめの行動が、むしろおかしくなつて吹き出したいくらいに感じたが、しかし、彼處かしこで争つてゐる三人の御当人たちの身になつてみれば必死の格闘である。ことに氣の毒なのは、この一種異様な侵入者を、ここまで追跡して來て、せつかく取抑えたかと思えば、かえつて逆襲されて、一步あやまると、自分たちの生命問題になる立場に變つて、狼狽ろうばいしつつ、後退しつつ、必死に争つてゐる体を見ると、白雲は氣の毒でたまりません。

白雲以外の舟を待つ人々は、事の内情も、目色、毛色も一切わからないから、どちらへどう同情していいかわからないけれ

ども、どちらにしても、あの格闘の幕が終るまでは、われわれは舟に乗れないのだと、半ばヤケ気味に諦めつつ、なお八分の興味をもつて右のロケーションを眺めておりました。

そのうちに、突きまくられ、追いまくられた船頭親子は、無残にも足を踏みすべらして、重なり合うように北上川の川の淵の中へ落ち込んでしまいました。

「アッ」

と、こちらの岸で見ていた一同が声をあげて、この無残な船頭親子のドン詰りに同情の叫びを挙げましたけれども、この不幸が、実はかえって力の弱い船頭親子には幸いでありました。というのは、力限り陸上で格闘を続けていた日には際限がない、際限がありとすれば、暴力に於て格段の差ある親子は、あの巨大な暴漢のために、徹底的に、致命的に叩き伏せられて、再び

立つことができないようにまでさせられてしまふにきまつてゐる。それが川という別管区域へ落ち込んでしまったために、相手はちよつと追窮の機会を失つたのだから、この二人の親子が水練を心得ている限り——船頭のことだから、むろんそのたしなみはあるに相違ない——また、何か水中に人を刺すような木石の類が存在していない限り、致命的の怪我からはまず遁れられるものと見なければならぬ。

果して、追究された船頭親子が水中に落ち込んだのを機会に、むしろそれは落ち込んだというよりは、こちらが叩き込んだと見るのが至当な攻勢であつたけれども、そこまで来ると、もうこれ以上働くことよりも、逃げることの急なのが自分の立場であるということにでも氣のついた如く、倉皇そうこうと取つて返し、最初倒れた際に、そこにおつぽり出した包みもの、それは、その

中のものは白雲の遠眼鏡を以てすれば、当然にか船頭小屋の中に有合わせた、当座の食料品であらねばならぬところのものを取り上げるや、それを拾つて、不器用な駄けつぷりで、こけつまろびつ川下の方へにげて行くのであります。

「やれやれ、これでどうやら一卷の終りになつたが、かわいそうに、たたき込まれてお陀仏だぶつになつたらしい船頭親子——」

と言つて、待ちくたびらかされたこちらの旅人たちも、改めて同情の眼を以て見る瞬間に、早くも船頭親子は、落ち込んだところから十間ばかり上流へポカリと浮き出して、二人とも河原に立つて、着物を絞りながら馬鹿な面つらをして、逃げて行く大男の後姿を見送っている。

やれやれ、これでまあ、こつちも助かった、船頭親子も怪我がない限り、おつつけ舟も廻つて来るだろう、と旅人どもは、市いち

が栄えたような心持で、げんなりしたが、白雲ひとりだけの興味は、決してそれで尽きたものではありません。更に一層の興味をこめて遠眼鏡の筒を、逃げて行くウスノロ氏の後ろへ向けました。

こけつまろびつ走りつづけたウスノロが、ほどなく蘆荻ろてぎの生いしげったようなところへ来ると、その蔭からパツと飛び出して、いきなり抱きつくようにウスノロ氏を迎えたものがあります。

「あれだ！」

白雲は、その者が兵部の娘もゆる嬢であることを直ちに認めました。

「ははあ、あいつら、こんなところに巢をくつていたのか、本来、ふやけた奴等ではあるが、それにしても水びたりになつて

隠れているのにも及ぶまいに、どこまでも変っている、どうするか見遁すことではないぞ」

と、見ているうちに、二つの影は相擁あいようして、その蘆荻の中へ没入してしまいました。

「ちえッ、やつぱりあの水の中の蘆荻の蔭で二人がうじゃじゃけている、しようもようもない奴等だ」

白雲は、二人の没入した蘆荻の中を、苦笑いしながらなお眼鏡を外はずさないで見ていると、やがてその間から、すうつと一いつ隻の小舟が漕ぎ出されたのを見て、

「ははア、よしきりじゃあるまいし、水の中にうじゃじゃけていたというわけでもない、奴等、舟をあゝの蔭につないで隠れていたのだな。そうして兵部の娘だけが舟に残っていて、ウスノ口が食料品徴発と出かけたものなんだ。そうして、多少の食料

にありついたから、これから河岸かしを変えようというのだ。あれを下流へ行けば飯野川の宿になり、それから、ずんずん下れば追波湾おつばわんへ出るのだ、今では石巻方面よりも、あちらの流れが北上川の本流と言いたいくらいだ。さあ、しかし、こう認めた以上は、あいつらをこうして遠方からいい気でさげすんでばかりいてはならない、あれを追いかけていなければならない、追っかけて手捕りにしなければならぬ使命と責任とを負う身だ——もう一ぺん、あの野郎を相手にロケーションを繰返さなければならぬ、今度は船頭共とは相手が違う、追いついた以上はこつちのものだが——追い過して海へでも追い出してしまつてはならぬ」

というようなことが気懸りになると、白雲も実際、対岸の火事の如く、対岸の駈落者を興味半分だけで見ているわけにはゆか

ないことに胸をうちました。

二十八

田山白雲が船を出て行つた夕べ、駒井甚三郎は、ひとり静かに船室に落着くと、「人が出て行つた」という感傷に堪えられない。

白雲が出て行つたのは戻るために出て行つたのである。七兵衛が帰つて来ないのは帰りたくてたまらないのが帰れない事情に妨げられているということを、駒井はよく知つている。それなのに、人が去つて行くという淋しい気持ちを、如何いかんともするこ

とができません。

マドロスと兵部の娘に至つては論外であるけれども、それで

すら、離れて出て行つてしまつた人間には相違ない。彼等の放縦と、我儘と、不謹慎とで背そむいて去つたのだから、こちらに責任が無いと言へば言うものの、自分の周囲に人を引きつける徳がなく、人を容れるの量がないのかということ想像してみると、駒井といえども、いとど心淋しさを催さずにはおられないのでしよう。

古来英雄というものには、みな人を引きつける一つの力を備えている。憎まれながらも、恐れられながらも、人がそれについて行く。人がそれから離れられないという力があるものだ。然るに自分は——英雄であるとはうぬぼれていないが、自分に附く人よりも、自分から離れる人の方が多く、自分のよしと信ずる理想が、人から喜ばれるよりも、人から斥しりぞけられるものばかりが多いように思われてならない。第一、自分の妻が、もう最

初から自分を離れている。お君が離れた。従つてあの米友という礼儀はわきまえないが、心実の確かな小男も、自分を離れたというよりは、むしろ怨うらんで去つた。神尾主膳の陷かんせい穽にかかつて、自分は半生を葬られてしまつたようだが、実はやつぱり自分分は、その地位を保つだけの徳がなく、職をすべるだけの欠陥があつたせいだと見られないこともない——駒井はこんなことを考えながら、やがてひとり船室を立ち出で、甲板の上を静かに歩み出でました。

外へ出て見ると、月ノ浦の夜に月はありませんでしたけれども、至つて静かなものです。遠く松島湾の方のいさり火を眺めて、駒井甚三郎は満面に触るる夜気を快しとしました。

船の修繕と、未完成の部分の工事、この地で大工に心あるものを雇ひは雇つたが、どうも思うようにこちらの壺を吞込んで

くれなくて困る。人手に不足はなく、みんなよく働くけれども、本来、こういう船の工事を扱う手心が出来ていないのだから仕方がない。明日はまたひとつ鍛冶屋を探し求めなければならぬ。機関部の工事を補足をするために、この辺から鍛冶屋を求め出して来なければならぬ。それはあるだろう、本当の鍛冶屋は探せば出てくるに相違ないが、それを生なまでは使えない、一応陶冶教育を加えてから、傍についていて指導して使わなければならぬ。その手数がどうも容易のものではないが、それは致し方ない、と駒井が、そのことを思い及ぼすと、どうもあの不所存者のことが気になる。

「あのマドロスの奴がいれば、こういう時には全く役に立つ」
やつぱり未練のような思いが残るらしい。

その時に、船室の一方から唄が流れ出して来ました。

ネン、ネン、ネン

ネン、ネン、ネンヨ

ネンネのお守はどこへいた

南条おさだへ魚買いに

チーカロンドン

パツカロンドン

ツアン

「茂だな、茂太郎歌い出したな、珍妙な子守唄を」

と甚三郎が思い出していると、キャツキャツと言ってよろこぶ男の子の声が続いてしました。これは申すまでもなく登。

そうするとまた、茂太郎の声で、

ちようち、ちようち、ばア

ちようち、ちようち、ばア

うつむてんてん、ばア

かいぐり、かいぐり、ばア

ととのめ、ととのめ、ばア

その度毎にキャツキャツとよろこび笑う登、登を笑わせていよいよはしゃぐ茂太郎。こんどはどうしたのか、登がワーツと泣き出す。

「そら、茂ちゃん、だからいけません、あんまりしつっこいから、とうとうお泣かせ申してしまいました」

と叱るのはばあやの声。

「いいよ、いいよ、お泣かせ申したって、また、あたいが笑わせてあげるから、いいじゃないか。さあ、登さん、ごらん、あたいが踊ってあげるから、ばア」

それは茂太郎の声。登も御機嫌がなおつたと見えて泣きやん

でいると、茂太郎の声色こわいろめかした気取った声で、

うんとことっちゃん

やつとこな

そうれつらつらおもんみれば……

そこで、登といわず、ばあやといわず、一同がやんやと喝采かつさいしたその声を聞くと、船頭もいれば、大工も交っているらしい。やんやとうけさせた御当人を想像すると、これはどうやら団十郎をやっているものらしい。目口をかわかし、台詞せりふをめりはらせて、大気取りに気取ったところが目に見えるようです。駒井もそれを聞くと、ほほえまれずにはおられず、なんとなく陽気な気分になるのです。

そこで駒井も、自分もひとつその船室へ入り込んで見ようという気にまでなったが、かえって一同を驚かせて、せつかくの

興を殺^そいではないけない——と、その前を音立てず素通りをしてしましました。

二十九

それから駒井甚三郎は、歩廊の間を歩いて、コック部屋のところへ来ると、ここで金椎^{キンツイ}君を見舞つてやりたい気になりました。それは今の団欒^{だんらん}の中に、金椎とお松だけが加わつていないらしいから、駒井はここへ来て、扉をコツコツと叩いたが、叩いても叩きばえのする金椎でないことに気がつく、そのまま扉をあけ放しました。

普通ならば、どちらからか言葉をかけなければならぬのですが、ここではそうする必要もなく、開けて見ると室の真中に

ろうそく
蠟燭が一本かすかに光っているその前で、ひとりひれ伏している金椎を見ました。

駒井が入って来たのに驚きもしないのは、それは、全然気がつかないであちら向きにつつぷしているからであります。といつても、そこで熟睡に落ちてゐるわけでも、居眠りをしているわけでもありませんでした。金椎は卓子テーブルを前にして、何かしらおごそかな唸うなりを立てている。しかし、その唸りは病苦に悩んでの唸りではない。

その光景を見ると、駒井は何か知らん嚴肅沈痛なるものの氣分に打たれて、突立つてしまいました。駒井は、金椎がこうして密室の中に、ひとり深い唸りを立てている光景を見たのは、今宵にはじまったことではないのです。駒井がどうかして不意に金椎の室内を訪れた時、こういった光景を見て、最初は病氣

に苦しんでいるのだと思いますが、後にはそうでないことを知りました。

つまり、この聾少年ろうしょうねんはこうして「おいのり」をしているので

す。駒井には信じきれない、目に見きれない神様というものに對して、この少年はこうして「おいのり」を捧げているのだ、ということを知ると共に、駒井はそれを軽んぜられない心になりました。これを妨げてはいけないという心になつて、ある時はそのまま立去り、ある時は、その「おいのり」の済むまで自分も儼然としてそのところに立ち尽すのを例としました。

今もまたその通りです——しかし、駒井甚三郎がこうしてその少年の祈りを見ているが、今宵の少年の祈りは、いよいよ嚴肅に、深刻に進み行くかのように、はらわた腸へしみるような深い唸りうなが連続的に続いて行く。単にその唸りだけが、駒井の心を、な

んとも言えない厳かな、沈痛なものに導き入れるのです。駒井はついにその重圧に堪えられないで、この少年の祈りの終るのを待たずに、またそつとこの室を出てしまいました。

祈りの聾少年は、船長の入って来たことも知らず、立去ったことも知らなかったでしょう。そしてこの分では、何か夜もすがらの祈りが続くかもしれない。

そこを忍びやかに立ち出でた駒井甚三郎は、次に、事務長室のところまで来て、また歩みを止めてコトコトと扉を打ちますと、こんどは明瞭な返事がありました。

「どなた？」

「駒井です」

「おお船長さま」

中にいたのはお松です。お松は事務長室の卓子テーブルの上で、今ま

で一心に本を読んでいたことがよくわかります。

「何ですか、この本は」

「この間、殿様からかしていただいた御本でございます」

「おお、伊蘇保物語、どうです、面白いですか」

「まことに結構な御本でございます、今までこんなおもしろい、
為めになる御本を読んだことがございません。あんまり結構で
ございますから、つい、登様の御機嫌を伺いに行くのも忘れて、
今まで夢中に拝見いたしましたところでございます」

「そうでしょう、それはたしかに面白くてためになる本、わし
も感心して読みました」

「もとは西洋の御本だそうでございますから、わたしはまた金
椎さんの大事にしておいでなさる、西洋のお寺のお経の御本か
と思いましたら、そうではございませんでした」

「中身はお伽噺ときばなしのようなものだが、このお伽噺は大人君子たいじんくんしも深く味わわなければならぬお伽噺だ」

「ほんとうに左様でございます、噛かみしめればしめるほど、幾つになつても、どんな偉いお方でも、お手本になるお伽噺と存じます、全くこんな為めになる御本はほかにはございませぬ」
「それに元は西洋の本でも、翻訳がなかなか名文だから、いつそう読み心地がよい。どこまで読みました」

「はい、ここまで拝見しましたが」

と言つてお松は、雁皮紙がんぴし刷りの一種異様な古版本のある頁を開いて、駒井の方へ示しました。

「ははア——」

と駒井が、それに眼を落したところに、次の如き文字が見える。

「狼と子を持った女のこと」

「それから殿様、この少し前のところに、私としても、少し不審なことがございます」

と言つて、お松は、十枚ばかり後ろへ紙数を繰り返したところの書物の上を指すと、そこには、

「父と子どものこと」

駒井が示されたまま黙読すると、次のように書いてある。

「ある父、子が大勢もつたが、その子供の仲が不和で、ややもすれば喧嘩口論をして犇めくによつて、その父、なにとぞしてこれらが仲を一味させたいといろいろ工めども、為うずるようもなかつたが、あるとき兎ども一処に集まりいたとき、父下人を召うで、『樹の楚をあまた束ねて持つてこい』というて、その束を執つて、数多を一つにして縄をもつて思うさま堅う巻きたてて子どもに渡いて『これを折れ』という、兎

共われもわれもと力を尽して折つてみれども、すこしも叶わ
なんだ、そのとき父堅く巻きたてしをほどき、一把いちわずつ面々
に渡いたれば、造作もなく折つた、それをみて父のいうは、
『めんめんもそのごとく、一人いちにんずつの力は弱くとも、たがい
にじゅつこんし、志を合わするにおいては、なにとした敵にも
左右そう無うとり拉ひがるることあるまじいぞ……』と言ひ終つた。

下心したごころ

互いの一味をもつて人間の仲も強く、また不和なときは国
家も滅びやすいという義くだりじや」

駒井甚三郎がこの条くだりを読おみ了ると、お松が、

「このお話はどうも、わたくしが子供の時に聞いた毛利元就公
のお話と、あんまりよく似過ぎておりますから、ことによると
元就公のお話を、こんなふうに書き改めたのではないかと思

われるのでございますが」

駒井がそれを聞いて、うなず頷いて、

「なるほど、そう思われるのも決して無理はないが、事實はそうではないのだ。いったい、この伊蘇保の物語というのは、今から二千年も前に出来た本なのだから、毛利元就の時代より遙かに遠い。だから疑えば毛利元就のあの三人の子供に弓の矢を折らせたという物語は、かえってこの物語から出たつくり話ではないかと疑うのが当然なのである。しかし、もう少し同情した考えようによると、日本でこの本がはじめて翻訳されたのは文禄三年ということだが、それ以前に日本へ来た宣教師や外人によつて、なんらかたと言話となつて日本人の口に膾炙かいしやしていったかも知れない、それを元就が聞き知つていて、自分の最期さいごの遺言に利用したものと見られないこともあるまい」

「そういう順序でございましたようか。なんにしても大へん結構なお話で、偉い父親ならば、きつと利用しそうなお話でございます」

それから、駒井は、そう解釈するのが親切であつて、たとえばなどというものは、本にまとまつて出るずっと以前に、必ず口頭で伝えられてなければならぬはずのもの、現にこの伊蘇保物語などにしてからが、二千年前、ギリシャという国で、イソホという人が著したということになつてゐるけれども、事實はそれよりも千年も前に、同様の話が行われていたということ、イソホはそれらを上手に集め成したのだろう——日本でも、文禄時代に肥前の天草で翻訳される以前、いずれの国人にも最も耳あたりのよいこの物語が、言い伝えられ、語り伝えられていないというはずはなく、まして、海外交通の最も便宜の多かつた

山陽道方面の要地を占めていた毛利元就の知識となることは不自然ではない。元就が最期の時に、あれを利用したのは、元就その人の教養と遠慮とを知るに最も適格な話として受け容れられるということなどを説明して聞かせてくれた。そのあと、お松が、

「殿様、こんなに結構な御本ですけれども、ただ一カ所、ほんとうになさけないと思うことがございます」

「それは何です」

「イソホさまが、養子に御教訓なさる言葉のうちに、『妻に心を許すな、平生、意見を加えい、すべて女は弱いによつて、悪には入り易く、善には至り難いぞ』とあるのと、それから、『大事を妻に洩すな、おんなは知恵浅く、無遠慮なるによつて、他に洩して仇となるぞ』とありますが、仏様のお教えにも女は成仏じょうぶつ

ができない、孔子様も女子と小人など仰せられまして、女をたのみ難いものになさるのは、東洋の国々ばかりかと思ひましたら、この御本のように、西洋でもやはり女は浅ましいものとなつておりますのが、真実のこととは申しながら、なさけない思ひがいたします」

「うむ、全部がそうというわけでもなからうが——」

と言つて、駒井は肯定するような、しないような返事をしました。あさましい女もあれば、たとえばお松さんのような、立派な強い素質を持った女性もある——とでも言えと言いたかつたのでしようが、そうも言わないでいると、お松が、

「それから殿様、わたくしは申し上げに出ようと思つていたところでございますが、ただいま船の修理に来ておいでなさる人たちの中に、珍しい人が一人おりますのでございます」

「それは、どういう人ですか」

「この近辺の人ですが、日本でははじめて、この世界中を一巡りして来た人の仲間のうちの一人だそうでございます、世界の国々を経巡^{へめぐ}つて来たことに於ては、あのマドロスさんなんぞより、遙かに世間が広いらしうございます」

「ははア、それは耳寄りな話だ」

と言つて、駒井甚三郎はわれながらはずむほどに身を乗出したというの、今もいままで思いなやんでいた当座の問題——かけがえのない船の苦勞人^{くろうと}、思案の果てが、いつもあの不埒^{ふらち}千万なマドロスの上に落ちて来るのが苦々しい限り。ところがこのマドロスに上越すところの海の苦勞人^{くろうと}が、現在自分の身近にいる！ という報告を、別人ならぬお松が聞かせてくれたのだから、駒井が夢かと驚喜の色を浮ばせるのも無理はありません。

「そういう人がいるなら、早速会ってみたい、どこにいます」

「お船の船頭部屋に泊り込んで、毎日、修繕仕事を手伝わせて
いただいております」

「今晚もいますか」

「はい、宵のうちは乳母ばあやさんのお部屋へ、皆さんとよくお話し
に出かけます」

「では、直ぐにここへ呼んでもらえまいか」

「今晚お会い下さいますか」

「早い方がよい、今すぐにここへ呼んで来て下さい、ここでひ
とつ、会いましょう」

「では行つてまいります」

お松があたふたと出て行つたその後で、駒井甚三郎は、なん
だか胸が躍るように思いました。が、また思い返してみると、

それはあんまりお誂向き過ぎる、そういう思いがけない人間が、この際、ひよつこりとここへ現われるなどは夢のようなものだ。もとより本当のマドロス修業をした人間ではない、海へ出た魚師かなにかが災難で漂流して、世界中を吹き廻されて来たというものだろうが、なんにしても遠洋航海の実地経験さえ持ち合わせている人ならば充分だ、早くその人を見てみたい、そうしたならば明日からでもマドロスの補欠として雇い、大工から引抜いて、天晴れ一方あつぱの仕事を任せてみたい。

こう気構えしていると、やがてお松が手を曳ひいて、当人をここへ連れて来ました。

待ち焦るるほどの目の前へ、当人を連れて来られて見ると、再び駒井甚三郎が、一時は拍子抜けのするほど呆氣あつけに取られてしまい、

「ははア、君はいったい幾つなのですか」

と、とりあえず年を尋ねることが先になつてしまつたことほど、この当人は年寄中のヨボヨボでありました。遠洋航海というところから、マドロスの海風に吹き鍛えられた皮膚の色、図抜けて張り切つた若い体格、そればかり頭にあつた駒井は、目の前にこのヨボヨボ老人を見せつけられて、やつとそれだけの文句しか出なかつたものです。

しかし尋ねられた老人は、駒井にそんな思惑外れがあろうとは思われないから、抜からぬ顔で、

「はいはい、今年八十六でございます」

「八十六！」

で、駒井が全く苦笑いを抑えることができませんでした。でも、サラリと打解けて、

「そうですか、よくその年で達者に働けますね。そうして、君が世界中を廻って来たというのは、それは幾つくらいの時のことでしたか」

「え」

と言つて、もじもじしたのは耳が少し遠いものらしい。八十六では耳の少し遠いくらいは無理はない、と思つていると、お松が代つて、大きな声をして、

「おじいさん、あなたが異国を巡つてお歩きになつたのは、幾つの時でしたかと殿様がお尋ねになります」

「はあ、わしが流されたのですか、それは寛政五年十一月のこ

とでございましてな」

「寛政五年」

といつて、駒井は胸算用むなざんようをしてみますと、寛政五年といえ、今

を去ること六十四年の昔になる、その当時は、このお爺さんも

二十二歳といった若盛りだが、それにしても古い話だ――

と、また呆あきれましたが、しかし、古いにしても、新しいにして

も、経験の教えるところは腐らないものがある。よしよし今晚

はひとつ、この老人に就いて聞き得るだけを聞いてみよう。耳

は少し遠いようだが、金かなツンボというわけではないから、お松

がそばにいてあしらってくればけっこう話の用には立つ。そ

こで駒井は、

「お松さん、金椎君は今、例によつてお祈りでもしているらしい、それを妨げてはいけなから、あなたひとつ、茶菓の用意

をして下さい、今晚ひとつ、このお爺さんから海の話聞かせてもらいましょう、ゆつくりと」

お松は心得て、

「承知いたしました」

といつて出て行つたが、暫くして茶菓の用意をととのえて持つて来ました。

そこで駒井甚三郎は、老人を相手に、その昔経験した漂流談を、お松と二人がかりで聴き取りにかかります。何しても耳が遠いし、年は寄っているし、記憶もう散逸している部分も多いし、言葉も大分ちがいますから、もどかしいことはこの上なわけですけれども、それでも相当の収穫が与えられないということはありません。少なくともこの老人が、日本人としては最初に世界を一周して来たところの漂流者の中の一人であるという

ことは疑いがありません。

時は寛政五年十一月、石巻の船頭で、平兵衛、巳之助、清蔵、初三郎、善六郎、市五郎、寒風沢やぶがわの左太夫、銀三郎、民之助、左平、津太夫、小竹浜の茂七郎、吉次郎、石浜の辰蔵、源谷室浜の儀兵衛、太十ら十六人、江戸へ向けての材木と、穀物千百石を積んで石巻を船出したが、途中大風に逢つて翌六年二月まで海と島との間を漂流した。ようやく漂いついたところが露西亞ロシア領のオンデレケオストロという島。

その島の島人のなさけでとどまること一年ばかり、穀物は無く、魚類のみを食べていた。

七年四月三日にまた船に乗つて島々を過ぎ、陸地を渡り、エリカウツカというところに着いて、総勢一家を借りてすみ、住民の情けにめぐまれ、或いは日雇となつて働いて賃銀を得るこ

と八年、その後モスコーを経て、ロシアの港ビゼリポルガというところで皇帝に謁見^{えっけん}を賜わった時分には、一行のうち六人のものはもう死んでいた。

ここで皇帝から帰るものは帰るべし、とどまろうとするものはとどまるも差支えなしとの仰せによつて、四人は帰り、六人はとどまることになった、その帰国四人のうちの一人が、すなわちここにゐる老人である。

かくて文化元年正月、かの地を発船し、マルゲシ、サンベイツケ等を経て、七月の初めカムシカツカに着き、翌月発船して九月長崎に帰る――

という物語。それを繰返し、引集めて要領をとつてみると、まずロシアの地に漂着し、そこで大部分を暮し、それからシベリアを経てウラル山脈を越え、モスコーを経てペテレスブルグ

に至つて、ロシア皇帝に謁見し、公使レサノツトに従つてカナシタの港を出て、大西洋を経、アメリカのエカテンナというところへ行き、それから、サンドーイッチ島を過ぎてカムチャツカに入り、長崎に帰るといふ順路、寛政五年から十三年目で故国へ帰つたといふ筋道だけは分る。

右の話のうちにも、地名だの、方角だの、ずいぶん混線したり、聞き馴れないところが多いが、それでも地理の素養の深い駒井には、よく要領を受取ることができました。

なおくわしくは、明日自分の船長室へ連れて来て、地図についてくわしく問い質す^{ただ}ことにして、それから余談に移ると、老人は一年ばかりの間、米も粟もなく、魚ばかり食べていたことがあるの、はじめて麦のパンを与えられた時の嬉しさだの、皇帝にお目にかかる時は、わざわざ^{しゅす}襦子の日本服を^{こしら}拵えて与えら

れたことだの、日本へ帰ろうというものの四人には羅紗らしやを一巻、懷中時計を一つずつと、それから金銭を与えられたし、向うに泊っている者六人には、衣服、寢道具を支給され、食事には毎日三度三度、パンと、豚と、魚と、酒を与えられたこと、そんなことの思い出を興味多く語り出でましたが、夜も大分ふけましたから、お松にまたその老人を送り返させて、そうして自分は船長室へ戻つて、蠟燭ろうそくをともし、光にうつる壁の大地図を引合わせて、今の老人の話した要領の筋道を、ずっと指で線を引いてみました。

三十一

根岸の屋敷で、神尾主膳が日脚の高くなつた時分に起きあが

り、

「ああ、昨夜もあの女は帰らなかったな」

とつぶやきました。

あの女というのはお絹のことです。お絹は昨夜もこの家へ帰らなかったのです。昨夜もという以上は、帰らないのは昨夜に限ったことではない、このごろは、度々そういうことがあると認められる。事実も、その通りで、つづいて神尾が楊子を使いながら勝手元で横文字のはいった赤い缶かんいれ入を横目に見て、吐き出すように、

「あいつ、また異人館か」

それもその通り、このごろのお絹は、異人館へ入りびたりの体である。

神尾としては、今となってはもう、かくべつ気にもしないら

しい。いちいち気にしていた日には際限がないとあきらめてい
るようでもあるし、異人館なるが故に寝泊りを黙許しているだ
けの、情実でもあるかのようにも見られる。

洗面も食事も済むと、神尾は書齋へ立てこもりました。

いつもは、ここで、閑居しての唯一の善事としての書道を試
むるのですが、今日は、筆を選ぶことはあと廻しにして、まず、
机に両脇りようひじをついて、腮あごを両掌りようてで受けて、じつと庭前をながめこ
んだのであります。

庭の八ツ手の下を小鳥が歩いているのを、暫くぼんやりと見
つめていたが、今度は、腮を受けていた両掌はさを外して、眼と額
をおさえてうつむきました。

「さあ、今日からひとつ、著作にとりかかってやろう」
暫くあつて、むつくと頭を上げて、硯すずりを引寄せ、紙を重ねて

文鎮^{ぶんちん}を置き、それから硯箱の中から細筆を選んで手に取り上げたのが、いつもとは少し変っています。

いつもならば、こんな細筆を選ぶということはない。細筆をとる時は、何か実用あつての例外の場合のみであつて、朝は木軸の大筆に、まずたつぷりと水を含ませることを楽しんでいたので、今日は、いきなり細筆を選んで、「ひとつ著作にとりかかる」とかけ声をしたところを見ると、筆の使用も、目途も、従来とは違い、翰墨^{かんぼく}を楽しむというのではない、実用向きに使用して、この男がかりにも著作をする気になつた動機というものがあるが、すでに今日から着手しようとおくびにも言い出したところを以て見れば、かねがねその下心はあつたに相違ない。

神尾主膳は著作をすべからざるものだときめてしまう理由は

ない。この男が著作をする、それはやつぱり似つかわしからぬところの一つのものではあるが——現に旗本や御家人で、絵師や戯作げさくを本業同様に行っている者もいくらもある。大名高家でも、立派な随筆を世に残している人もあるのだから、神尾にしても、かりそめにも著作でもしてみようという気になったことは、すでに閑居善事の第二段であるかも知れない。

下へ罫けいを入れた紙をあてがい、その上へ半紙を置いて、神尾は、さらさらと文字を綴りはじめました。暫くして、

「女賢さかシウシテ牛売り損ネル……」

と、二三度、口のうちでつぶやきながら、筆の進行をすすめて
思案の体てい——

「女賢シウシテ牛売り損ネル……」

彼は、今、再三それを繰返して、

「はて、この故事来歴の出典は、どこであつたかしら」

思案の種はそれでした。

「女賢シウシテ牛売り損ネル」という俚諺りげんは、日頃、耳目に熟していながら、さて、これを紙に書いて、その解釈を附する段になつて、神尾がハタと当惑したのであります。

この語の表現する意味は、女というものは、賢いようでも抜かりがある、いや、女の賢いのは、賢いほど仕損じがあるものだ、だから女の賢いのは危ない、女を賢がらせてはいけない——という戒めいましになつてゐるのだが、さて、これが出所はどこか、支那から来たのか、和製か、その故事来歴を知りたい、普通、会話として、常識としてでは、そんな詮議立てをしないでも通るが、著作として世に示すには、そんなことではならない。そこで、神尾が首をひねつたのは、それを知るべく、いかなる参考

書によつたらいいかということの思案でした。

「曲亭の燕石雑誌えんせきざっしなんぞにありやしないか、あれは物識りものしだから」

と言つてみたが、あいにく、ここにはその燕石雑誌もない、三才図会ざいもない、どうも、この牛売り損ネタ実例の出典に思い悩んでみても当りがつかないのであります。ついに神尾は一応断念して、

「明日あたり、市中の本屋をあさつてみよう」

そこで筆をさし置いて、また庭の面をぼんやりとながめていました。

その時に、微風が吹いて来て、机の上を煽あおると、さして強い風ではなかったけれど、半紙の薄葉うすようを動かすだけの力はある、二、三枚、すべるように、ひらひらと畳の上へ舞い下りました。

神尾が、あわててそれを抑えにかかった手先から洩れたところには、「半生記」との題名が読まれる。

ははあ、著作といったのは、身の上を書いているのだな、しおらしくも、神尾主膳が自分の「半生記」の懺悔録でも書き残して置きたいという了見になったと見える。

それに相違ない、神尾の著作といったのは、かねてよりの宿望で、自分の父祖から、わが身の今日までの自叙伝を一つ書いて置きたいという、その希望が今日になって実現しかけたというわけなのです。そうして、書き進んで、神尾は自分の母のことを書く段取りになりました。母のことを思い出して書いて行くうちに、右の「女賢さかシウシテ牛売り損ネル」につき当って、その解釈に当惑したという次第なのでありました。

そこで神尾は、筆に現わすべき進行をやめて、その代りを頭

の中に再現させ、自分の母というものの面影おもかげを脳裏に描いてみました。

神尾主膳の母――

それが当人の頭の中での主題となっていてるのであります。外で見ては、ちつともわからないけれど、神尾の頭の中では、幼少の時代の自分と母との世界が、まざまざと展開している。母を想像する裏には、どうしても父というものが浮んで来なければならぬ。

自分の父というものは、ぐうたらで、のんだくれで、のぼせ者で、人から煽おだてられれば、財産に糸目おだをつけなかった。どうにもこうにも手のつけられないどうらく者であつたということひとつては、自分も人伝ひとづてによく聞かせられて、事実そうだと信じている。その父に輪をかけて悪辣あくらつになつたのが、この自分だということ

をも、自分ながら相当承認している。人の噂うわさから言つても、自分の印象から言つても、わが父なる者は、やくざ旗本の標本であつたに相違ないとして、母は、それとは全く異つた賢婦人であつたといふことは、世間の通評であり、自分もあえてそれを否定しようとはしないが、よくよく考え直してみると、その信念がぐらつく。わが母は果して、父と全く打つて變つた良妻賢婦であつたらうか、父が箸はしにも棒にもかからない欠陥のすべてを、母が埋合わせて、持ち合せていたように信じてよいものだろうか。

少なくとも、母がそれほどの賢婦人であつたなら、この現在のおれというものを、こんなに仕立てないでも済んだのではないか。

わが母の賢婦説は再吟味の必要がある。父のぐうたらは検討

の余地なしとしても、わが母というものの世間相場は、改定される必要はないか。

神尾は、今それをつくづく思い返している。

世間の人はその当時、言った、神尾の家は奥方で持っているのだ、主人は論外だが、奥方がしつかりしているから、それを持っているのだ——これが世間の定評になつていたのに、当人の母は、また唯一のあととり息子たるまだ頑是^{がんぜ}ないこの拙者の耳に、タコの出るほど言い聞かせていたのは、

「神尾の家は、お前が起すのですよ、お父さんは駄目だから、お前が立派な人になつて、見返してやるようにしなければなりません」

これが母の口癖であつた。

だから、自分も、父というものは駄目なものだ、父というも

のは厄介者だ、自分たちの名誉を害し、生活を動揺させる以外の存在物ではあり得ないものだ、父に代つて、世間を見返してやるというのが、自分の将来の仕事でなければならない、という意味での教育をされて来たのだ。それでも、少年時代は父を軽蔑するまでには至らなかつたが、父の存在というものを無視すべきことは教えられていた。

そうしてまた、父の生活ぶりそのものが、ちょうど母の教えるように、自分にはみなされて来ると、そのだらしのないところが目につき、青年時代の初期から、何かにつけて父を軽蔑しだして来たのだ。そうすると、父が時としては烈火の如く憤つて、自分を叱責したり、罵倒ばとうしたりする、それが腕力沙汰にまなつた時、軽蔑が變じて反抗となつてしまった。そういう時に、また母が必ず、こちらに加勢してくれた。

父の評判はますます悪くなる、それに反比例して母の人氣はよくなる、神尾家は主人はぐうたらだが、奥方がしつかりしているので持つている——その極きわめはいよいよ本格的となつて、今日までも動かせないでいるのだが、果して、それが無条件でそのまま受取れるか。

母は、もとより父のように品行上の欠点はなかつた。品行上の欠陥がないということは、世間的には、すべての性格的の欠陥を帳消しするのと同じ理由で、品行上に些ささい細な欠陥でもあれば、他の性格的にどんな美点善処があろうとも、たいてい葬られてしまう。品行上では箸にも棒にもかからなかつたわが父が、性格的には全く欠陥ばかりであつたろうか。何かしら、認められないところ、良処はなかつたか。父は世間からは悪評判で葬られていたが、友人間ではむしろ敬愛される性格と趣味とを持つ

ていたようだ。母はそれに引きかえて、第一、性格に潤いというものがなかったようだ——それから……

母が、世間に言われているような賢婦人だったら、父をあんなにはしていなかったのではないか。よし、父を救うことが絶望だとしても、自分をこんなにしてしまうまでのことはなかったのではないか。

自分は、今となって、母の再吟味に続いて、多くの遺憾いかんな点を見出す。それと共に、父の性格に、何か埋もれているところはないか、何かなつかしいものが隠れていたように思われてならない。

女が第一線に立つことは、よかれ悪あしかれ不自然である。不自然が最善であり得るはずがない。古人が「女子ト小人ハ養ヒ難シ」と言つたのは、牝ひんけい鶏あしたの晨あしたすることを固く戒めたのも、今

となつて、神尾主膳にはひしと思ひ当る、現にあのお絹だ——
見給え、あれがこのごろ調子づいてゐることを。七兵衛から
金銀を捲上げて、この生活にゆとりを見せたのも、自分の手柄
だとしている。

異人館へ出入りして、外人をひっかけて、何か物にしようとい
うたくらみをいっぱしの見得みえのつもりでいる。

主膳は、そこまで考えると、あのお絹という女と、自分の母
とがその当時、どういうおもわくの下に生きていたかを知りた
い氣持になりました。父の正妻であつたわが実の母と、父のお
手かけであつた今のおお絹とが、根本から異なつた性格の下
に、表面角突つ合つきいあをしたという噂も聞かないが、内心いかよう
に、嫉刃ねたばとを磨いでいたかを考えると、いまに帰つたら、ひとつ
あの女をとつつかまえて、あの女が、わが実の母を、どう解釈

しているか、それに探りを入れてみようと思い定めました。
その時分に、庭先へ、また例の御定連ごじょうれんの子供たちが、どやどやと入りこんだ物音を聞きました。

三十二

男の子と、女の子と、入り乱れてキャツキャツと遊ぶ子供の肉声を聞くと、神尾主膳の血が物狂わしくなりました。

浅ましいことの限りに、主膳は、子供の声を聞いてその童心に触れることができません。いかに性悪な人も、おさな児かなの姿に天国の面影を見ない者はないはずですが、悲しい哉、神尾主膳にとっては子供の肉声が、自分の血の狂いを齎もたらすのは、特にあのこと以来のことでもあります。

あのことというのは、先頃までよく遊びに来ていた、大柄な、少し低能な、そのくせ色情だけは成人なみに発達している、よしんべエのこと。吉原遊びをするから、お前おいらんになつて、廻しをお取りといえ、直ぐにその真似まねをする女の子、隠れんぼをして主膳の書齋へずかずかと入つて来て、主膳の膝を隠れ場所に選んだバカな女の子——このごろ姿が見えないから、仲間の子らにたずねてみると、「ああ、殿様、よしんべエはお女郎に売られたんだよ」に、二の句がつけないうでいると、立てつづけに、「よしんべエはねえ、吉原へお女郎に売られたんだから、殿様、買いに行つておやりよ」とやられて息がとまりそうになるところを、畳みかけて、「あたしも、いまに稼かせいでお金を貯めて、お女郎買いに行くの、よしんべエを買いに行つてやらあ」友達が売られたのを、お小遣こづかいをもらつておでんを食いに行く

と同様に心得ている返答に、神尾主膳が胸の真中をどうづかれて、ひっくり返されてしまった。そのこと以来、特に主膳は子供の肉声に怖ろしき圧迫を感じずるようになったのです。で、この肉声を聞くと、三ツある目の真中のが、にちやにちやと汗ばんできて、心も、色も、物狂わしくなつてきて、立ち上ったかと思うと、お絹の部屋へ走り込みました。

そうして、あちらこちらと部屋中をかき廻して、その最後が戸棚を引きあげると、その中をがらがらひつかき廻し、そうして見つけ出したのが、多分、西洋酒の一リットル入りばかりの小壘こびんであります。それを見ると、主膳は栓せんをこじあけて、グツと飲みました。

これは何という種類の酒だか主膳は知らないが、黄色い液体がまだ六分目ほど入っている。その四分目ほどは、先日、お絹

から振舞われた覚えがある。その残りの部分をお絹から壇を取り上げられて、「もう、いけません、お預けですよ、このお酒は強いから、毎日、このくらいずつ、わたしがくぎつて飲ませて上げます」と蔵しまいこまれたのを覚えている。それを主膳は覚えているから、これだと思つて、栓をとつて、グツと飲み出したのですが、その時に、さすがの主膳も、一時いつとき、

「カツ！」

と口と咽喉のどを鳴らして、飲んだ分を一時に吐はき出し、壇をおつぽり出そうとしたほどに、酒の強烈な力におそれました。強い酒とは知っていたが、これほど強いものだとは思わなかつた。

しかし、いくら強くても酒は酒に相違ない。毒物でないということは、主膳の経験に於ても、強いながら口当りにもわかるものですから、二口目はやや注意して、そろりそろりと飲みま

した。

そうして、この何というかわからない強烈な酒の残り六分ほどを主膳が、そろりそろりと忽ちたちま飲みつくしてしまふと、眼がクラクラとしました。クラクラとしたけれども、毒に当つたのではない、やっぱり酔心地に相違ない。瞑眩めいげんのうちに陶醉を感じながら空壇をおつぽり出すと共に、またそこいらをガラガラひっかき廻しているうちに、ふと、折込みの舶来のガラス鏡を発見し、

「ははあ、こいつ、お絹のやつが異人からせしめたのだな」

と言つて、くりひろげる途端、思わず自分の面がかおうつると、明々

瞭々たる三ツ眼！

かさね

累ではないが、それ以来の主膳は鏡を見ることを嫌う。お絹がお化粧をしているところへ通りかかつて、つい自分の顔が鏡

面に触れた瞬間などは、あわててそれを避ける。日本の鏡はうつすにしても、もつと親切だが、このガラス鏡は強烈だ、いぶしも雅致もなく、醜態そのままをすつかりうつしてしまふ。主膳はかつとなつて、そのガラス鏡を畳の上に叩きつけたが、叩きつけられて裏返しになつた鏡の一面に、また鮮かな絵がある。それは酔いと物狂わしさにボケた主膳の眼にも、ハッキリと受取れるところの絵模様。

肌のすてきに美しい裸女が一人、一糸もかけずに嬌態きょうたいを長椅子にもたせて、一種異様な笑みを浮べている。

神尾が三つの眼で、一ぺん叩きつけた鏡の裏絵を見つめました。

「毛唐けとうの奴は、裸女を平気で描いて表へ出しやがる、描かせる奴も描かせる奴だが、描く奴も描く奴だ、こん畜生！」

と言いながら主膳は、畳の上の鏡の裏絵の裸体美人へ、自分の鼻先をこすりつけるほどに持つて来て、香いをかぐかのようにながめ入りました。

「ちえッ」

實際、腹の立つほどうまく描けていやがる、肉がそのまま浮いて出ている、肌の光沢が生き写しになつていやがる、それに、この生たらしい笑い顔はどうだ、生のものをそのまま取つて来て描きやがつたのだ、描く奴も描く奴だが、描かせる奴も描かせる奴だ、そうしてこの鏡の裏絵なんぞにして、大びらで世間へ向けて売り出す、不埒^{ふらち}千万だ。

日本の女なんぞは、どんなに恥知らずだつて、自分の姿を、裸にして描かせて売らせる奴はない。また、どんな墮落した絵かきだつて、女の丸裸物を描いて市中へ売ろうなんぞというこ

とはしない。また、たとい売女遊女にしても、色は売るけれども、裸になつた姿を描かせるような奴はまだ一人もない——毛唐はそれを平気でやる。

毛唐は獣なのだ。だから、女を可愛がるにしても、イキな身なりや、すつきりした姿を可愛がるんじゃない。女を買うにしても、裸にしなけりや満足ができないのだ。遊ぶにしたところで、蘭燈らんとうの影暗く浅酌低吟などという味なんぞは、毛唐にわかつてたまるものか。あいつらは、女を玩もてあそぶに、女を裸にして玩ばなければ満足のできないやからなのだ——ちえッ、いいざまをして、この女め、笑あまつてやがる、小憎らしい笑い方だなあ——主膳はこう言つて、三眼爛々らんらんとして、西洋婦人の豊満な肉体美をながめているうちに、その女のかおかたちがだんだんお絹に似てくる。お絹でありようはずはない、第一、頭が金髪で、色

の白さは似ているとしても、その肉づきがお絹でないことはわかりきっているが、嬌然笑にっこりっているいやらしい笑いが、だんだんとお絹の面になってくると、肉体そのものまでが異人ではない、明暮あけくれ自分のそばにいるあの模範的の淫婦娼婦だ。

そう思つてくると、その笑い方が、からかい気味になったり、思わせぶりになったり、いやがらせ気味になったりして、主膳をなぶつて来る。

「ちえッ」

主膳の三ツ眼はクルクルとして、その絵の傍へもう一つの幻影をこしらえて、それを燃ゆるような眼で睨にらみ出しました。もう一つの幻影というのは、そこへ、赤髯あかひげの大きな脂あぶらぎつたでぶでぶの洋服男が一つ現われて、いきなり、裸体婦人の後ろから羽搔はがじめにして、その髯だらけの面を美人の頬へ押しつけて、あ

ろうことか、その口を吸いにかかったのです。幻像がそうなった時、こんがらかった主膳の三ツ眼が全くくらくらとして、手が早くも躍動すると、無茶に畳に落ちた折鏡の全体を拾い取り、力を極めて、発止！ と投げつけたのが日頃お絹が身だしなみをするところの丸鏡の正面であります。

在来の鏡台にかかった日本の鉄製の磨かれた丸鏡と、舶来の四角なガラス鏡とが発止とかみ合つて火花を散しました。しかし、どちらがどれだけ損害の程度が大きかったかということな^{んぞ}に頓着もない主膳は、それから自分の部屋へ走り戻ると、急いで衣服を改め、わななくような手つきで足袋をはき、紙入を懷中へ押しこみ、それから大小をさし込み、頭巾ずきんをかぶりこみ、いよいよ本物の物狂わしい気色けしきになつて、この屋敷の裏門から、ふらふらと外へ出かけて行つてしまいました。

その後ろ姿を見ると、ふらふらとして、まさしく物につかれたような姿で、どうかすると、机竜之助がこんな姿で人を斬りに出かけることがある。

その後ろ姿を、庭に遊んでいた子供たちがきわどいところで認め、

「あれ、殿様が、どつかいらつしやるよ、わたしたちにはだまつてさ」

「ああ、三ツ目錐めぎりの殿様が、ないしよでどこへかいらつしやるよ」

「こつそりとね——おかしいわね」

「きつと吉原へ行くんだよ」

「そうだわ」

「そうに違いないよ」

「頭巾をかぶつてさ」

「吉原よ」

「吉原たんぼは水たんぼ」

「吉原へ何しに行くの？」

「きまつてるじゃないか、お女郎買いにさ」

「あ、そうだ、よしんべエを買いに行くんだらう」

「そうなんだね」

「そうよ」

「そうにきまつてるよ」

「憎らしい殿様、ビビ——」

と女の子の一人が、眼をむいて、主膳の後ろ姿に向つて唇を突き出すと、

「ビビ——」

寄っていた子供たちが、すべて、出て行つた神尾の後ろ姿に向つて、眼口を突き出しました。

こうして、屋敷の裏門を出た神尾主膳は、子供たちの想像するように、必ずしも吉原へ行くものとは受取れない。

根岸の里をふらつき出した神尾主膳は、どこをどう踏んでゐるのだから、自分でもよくわかつてはいないらしい。ふらふらふらと、人通りのないところ、或いは人通りの劇^{はげ}しいところを、無性に歩いて来たが、あるところで、

「駕籠屋、築地の異人館まで急いでくれ、異人館、知っているだろう、赤髯の巢だ、毛唐が肉を食つてゐるところだ、行け行け、異人館へ乗りこめ——酒料^{さかて}はいくらでも取らせてやる」

やがて威勢のいい駕籠の揺れっぷりで、神尾主膳の身はかがれて宙を飛んで行く。

その行先は、もうわかつている、すなわち築地の異人館。

後註

- 一 「屋形舟」は底本では「尾形舟」
- 二 「秀拔」は底本では「秀技」
- 三 「田山」は底本では「田代」

底本：「大菩薩峠 15」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成 8）年 7 月 24 日第 1 刷発行

底本の親本：「大菩薩峠 九」筑摩書房

1976（昭和 51）年 6 月 20 日初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：原田頌子

2004 年 1 月 9 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。